毎月十日廿五日發行

家庭雑誌

壹冊定價金五錢



明治三十年十月十五日發兌

第百九號

重要目錄

巾幗の奮闘
失脚
小兒衛生
詩人ゲーテの排(四)
香水の原料
烈婦溝口興志
天氣の話(續)
韓國の風俗
秋の蝶
野口小蘋女史
英國海軍の礎
牛肉汁、向寒、松蕈料理
北米合衆國の進歩(下)
話のくさ〴〵
彗兒星の夢
女流記者(下)

(口絵)
湖處子
(社説)
稻澤英子
(科學)
雨谷一菜庵
(談叢)
雞林子
桐廼舍女史
(訪問)
閑談
(家政)
(雑錄)
黄花女史
ザッケンス作
岡木川哲夫譯
金子春夢

奇應丸

●主治効能●

御小兒衆の虫のやまい○五かんきやうふう○胸いたみ○はら下り○しやくつかへ○船車のよい○酒の二日よい○はしか○ほうそ○產前產後はよろしからず

◎効驗の顯著にして若かも賣價の低廉なるは普く諸君の知らるゝ所願くは御試用の上倍々御高評を賜らん事を伏して願上候

◎全國有名の賣藥店に差出し有之候間御最寄にて御求め被下度候

東京市日本橋區通一丁目

白木屋

大村彦太郎謹製

●電話本局四百七十五番

●●偉人は善良なる家庭より出づ●●

毎月曜日發行

家庭新聞

一部金二錢、十部前金十九錢、二十部同三十七錢、郵税一部五厘ッヽ、爲替は銀座取扱所郵劵代用は一割増

方今新聞の種類少からずと雖多くは高尚に流れずんば野卑に陷り、甚だしきは醜聲を傳へ淫事を報ずるを以て任となし其兒女を蠧毒し家庭を混濁することゝ少からず、本紙は此の通弊を矯め善良なる**家庭の好伴侶**たらんとを期し努めて**孝子節婦**の美譚を掲げ純潔にして趣味あるの**小説**、親切なる**家政育兒の心得**さては日々發處の料理法、小兒の御伽噺、流行品の状況、衞生の注意茶道生花裁縫の指南一切の禮式等に至るまでおよそ**家庭に必要**なる諸種の事項は一切網羅して洩すなくいと平易なる文字を以てこれを記述し總傍假名に插畫を加えて何人にも讀み易からしめ外に當今大家の家庭に關する意見を掲載し**教訓と娛樂**とを併せ得せしめんとす、江湖家庭改良に志あるの諸君本紙ゝ主義を賛し、之を購讀し若くは購讀せしめ與に一國富強の本に盡されんことを祈る

東京京橋區加賀町十四番地

發行所 家庭新聞社

●家庭の改良は一國富強の本●

平田久著　（十月一日發賣）

十九世紀外交史

定價五十錢
郵稅六錢

◉外交なるものが國家の存亡に關する最重の問題となりたるは、運輸交通の方法充分に發達して兩極も猶ほ隣家の如く、陸海軍備の組織漸次に完成して平和も猶ほ休戰の如くなりたる十九世紀に在り。本書の趣旨は、此の重大問題たる十九世紀外交の精神、方法及び變遷を論述するに在り。

◉本書の材料は、精確なるものゝ中より更に精確なるものを撰び、隱微に屬するものに至りては、當時の局に當りたる外交官の遺著に據れるもの多し

◉一個の歴史なるが故に、事實の論述に關しては一個の纂譯と云ふを妨げず。されど全躰の結構に於ては本書自ら特殊の見解あり。外交的十九世紀を分ちて三大時期となし、排ナポレオン同盟より東歐同盟までを前半の均勢と稱し、クリミア戰爭より露土戰爭までを過渡の時代と稱し、伯林會議より露佛同盟までを後半の均勢と稱するが如き、本書特有の見解也。

◉文章は明晰にして、而も平凡ならず、複雜なる關係を記して殆んど遺憾なく、叙述、論評、起伏、綜錯、讀み去り讀み來るの際、興味湧くが如きものあり。

◉本書を讀みて、維納會議以來、形勢の變遷を詳にせば、歐洲の現勢を知るに於て餘師あらん。これ本書が單に過去の歴史を説くものにあらずして、當今の活文字たる所以也。

◉燈火親むべき讀書の好時節、本書を江湖に推舉するもの、豈に偶然ならんや。

發行所　東京京橋區日吉町　民友社

副總裁內藤耻叟君

●帝國地史編制補助贊成員募集

外人雜居ハ目前ニ迫レリ地史編纂ノ務ヤ急且大ナリ本會ハ國家百年ノ大計ヲ獻リ大東萬世ノ國躰ニ添ノ鄉土地史編制ヲ圖書ス茲ニ本期贊成員ヲ一大募集ス帝國ニ籍スル愛國ナル各位ヨ千古ノ一大事務タル本會ノ素望ヲ協贊贊助セラレンコトヲ茲ニ及至囑候也

贊成者待遇編

◎大日本名譽錄

員加入申込ニ應ズ

◎各府縣郡村各部支部委員ヲ囑托ス

贊成員ハ幾分ノ贊助經費ヲ寄スルモノトス

○贊成員優待法

一同本名譽錄ニ登載シテ國家ト永遠ニ答謝ス○贊助寄贈三圓以上、肖像、家門、系譜ノ各部。十圓以上、小傳。該以下普通氏名登錄○特待法

清殉難者ハ肖影贈致次第ホ待遇ヲ爲ス、贊成者ハ以會員錄公布ス○各村ニ歷史發表有志者ニ名家所藏ノ書類史料寄贈ヲ欲ス

三十年十月

大日本鄉土史編纂會

本會事務所長野縣北安曇郡八坂村四三四邸

明治三十年十月十五日發行

家庭雜誌第百九號

目録

口繪
甲板の奮闘

社說
小兒の衛生…………一
〔人〕

史談
烈婦溝口與志…一葉庵主人…四
詩人ゲーテの母(四)…稻澤英子…九
〔急速〕

科學
香水の原料…市村塘…一五
〔澀近〕

談叢
韓國の風俗…鷄林子…一八
天氣の話(雲の話)…T.K生…一九
三奇人…四季阿彌…二三
(一)醫師原玄琢…二三
(二)伊勢屋八兵衛…二四
(三)賣茶翁月海…二五
孝女千代女…二六
〔小說家〕

文苑
失脚…湖處子…二八
秋の蝶…桐廼舍桂子…三六

小兒の世界
童兒の星の夢…ディッケンス作 國木田哲夫譯…三八
里の秋風…茂川千穗子…四一
英國海將の礎…閑隱…四二
(一)ジャヴイス提督
(二)セントビンセントの海戰
無邪記…桂陵…四七
〔五重塔〕

小說
女流記者(下)…金子春夢譯…五〇

家政
話のくさ〴〵…黃花女史…五五
情…五五
母の着物…五六
區別…五六
下女の惡口…五六
小兒の我儘…五七
牛肉汁…五八
牛肉汁の製法…五九
炙牛肉汁…五九
牛肉汁の速製…五九
醫學士パビー氏處方の牛肉汁…五九
其他の製法…六〇
鷄肉羹…六一
牛肉汁さ其用法…六一
複雜の世さ和樂の家庭…林恕哉…六一
研究的破壞…六三
松蕈料理…六四
牡蠣飯…六五
火鉢さ灰…六六
鐵瓶…六六
寒さに向ふにつき…六七
煙草…六九
〔定饒〕

近著紹介
日本女禮式大全…七〇
紅葉の錦…七一
書法自在…七一
かなのてほどき…七一

訪問
野口小蘋女史…七二

和洋禮式
日本禮式…七六
西洋禮式…七八

社交一斑
流行の栞…流行子…七九
冬物の案內…七九
男子用外套…七九
婦人向外套…七九
洋服…七九
女羽織…八〇
男子の羽織…八〇
男子五歲の祝衣…八一
女子の七歲祝衣…八一
日下の女髮風…八二
冬帽子…八三
七寶燒…八三

雜錄
近時小說に於ける女姓(下)…八四
界世第一さ誇れる北米合衆國(下)…八七
時報一束…九一

交詢…九五



小川一眞製

甲板の奮鬪　(英國海權の礎參照)

家庭雜誌第百九號

（明治三十年十月十五日發兌）

社説

小兒衛生

生あるものは必ず死ありと申しながら、老後天命を終へて死するものゝ外は、皆死すべからざるに無理死をするものにして、天命を終への死は免るべからざれども、其他の死は衛生の術にして其宜しきを得ば皆免るべき道理也。

實際は固より悉く然ること能はざれども、衛生によりて死者病者の數を少くすることは現になされつゝあるに、之が注意を怠れる爲め、死すべからざるものを死せしむること、如何にも歎かはしき次第ならずや。

特に小兒の死に至りては、父母の不攝生若くは其養育上の不注意より、皆死すべからざるの死を致さしむるものなれば、父母たるものは最も深く注意して、如何に其不注意より恐るべきの結果を來す乎、又其不幸を免るゝ爲には何の邊りに其意を用ゐざるべからざる乎を知ること、極めて肝要の事ならずんばあらず。

今我邦に在りて人類の死亡は、生涯の何れの時代に於て最も多くなさるゝ乎を察するに、

人口千中の死亡者

	廿六年度	廿五年度
一年未滿	四、四二	四、三五
一年以上二年未滿	一、三四	一、一一
三年以上三年未滿	〇、八三	〇、七八
三年以上四年未滿	〇、五九	〇、五三
四年以上五年未滿	〇、四二	〇、三六
計	七、五九	七、一二
五年以上滿十年	〇、九三	〇、七七
十年以上滿二十年	〇、五四	〇、四八
廿年以上滿卅年	〇、七三	〇、六九
卅年以上滿四十年	一、三四	一、三七

四十年以上滿五十年	一、五七	一、五三
五十年以上滿六十年	一、七九	一、七八
六十年以上滿七十年	二、六四	二、六七
七十年以上滿八十年	二、四八	二、五一
八十年以上	一、〇七	一、一一
不詳	〇、〇一	〇、〇一
總計	二二、一七	二一、四五

即ち廿六年度に於て人口千人に付死亡者二十二人一七中、小兒の死者（五年未滿のもの）七人五九ありて、死亡者中の三分の一餘は實に小兒の死者たるを見る。殊に一年未滿のもの四人四二あり、總死亡者中の幾んど五分の一に當る。

是に由りて之を觀れば、人類の死亡は小兒の時に於て最も多く、殊に其初生兒に於て最も多きを知るべし。而して其多くは父母の不攝生若くは其養育上の不注意なる結果に因るとせば、世の父母たるもの自ら戒愼恐懼して十分に攝生を勉むると共に、十二分の注意を以て其子女を養育せずんばあるべからざる也。

而して此等小兒の最も多く死亡するは、常に如何なる病症に於てする乎を觀るに、

各病死亡者千中年齡別比例（廿六年度）

	滿一年迄		一年以上滿二年		二年以上滿三年		三年以上滿四年		四年以上滿五年		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
傳染性病	一四九、七七	一四九、六四	八一、一五	八二、六四	五八、三〇	五七、一五	四四、〇七	三五、八九	三五、八九	三五、三三	三六九、一八	三七〇、六二
發育及營養的病	三八七、二三	三一八、六六	四二、八一	三六、〇六	一七、六二	一七、七三	一二、四七	一一、五七	一二、四七	一一、五七	四六八、七〇	三九二、一三
皮膚及筋病	三五三、九六	三八一、四二	五三、七三	六二、八二	三三、〇五	三三、八五	一八、二四	一九、九四	一三、三七	一三、三五	四七一、三五	五一一、三八
骨及關節病	八七、七一	九三、五八	二八、五八	三四、二五	一五、一七	二二、一一	一九、三四	一八、八八	一四、〇七	一三、四一	一六四、八七	一八一、二三
血行器病	七三、九二	五八、〇九	三二、八二	一八、七〇	一二、八四	一四、五八	一一、三八	一〇、七〇	一一、二七	一〇、七〇	一三三、三三	一一二、八二
神經系及五官病	二四九、〇七	二三九、四九	七三、四〇	七二、四二	四一、五〇	四三、二四	二九、五八	三〇、三一	二〇、五一	二二、一五	四一四、〇六	四〇七、六一
呼吸器病	一九四、八七	一八五、一八	七三、六二	七三、九五	三五、二七	三八、二九	二三、二〇	二六、一三	二五、三六	一八、八二	三四二、三一	二四二、三七
消化器病	一三五、〇二	一二三、二三	五八、八〇	五六、七一	四五、七四	四六、五〇	三一、六五	三二、六九	一九、八七	二二、三五	二九一、〇八	三八一、三七

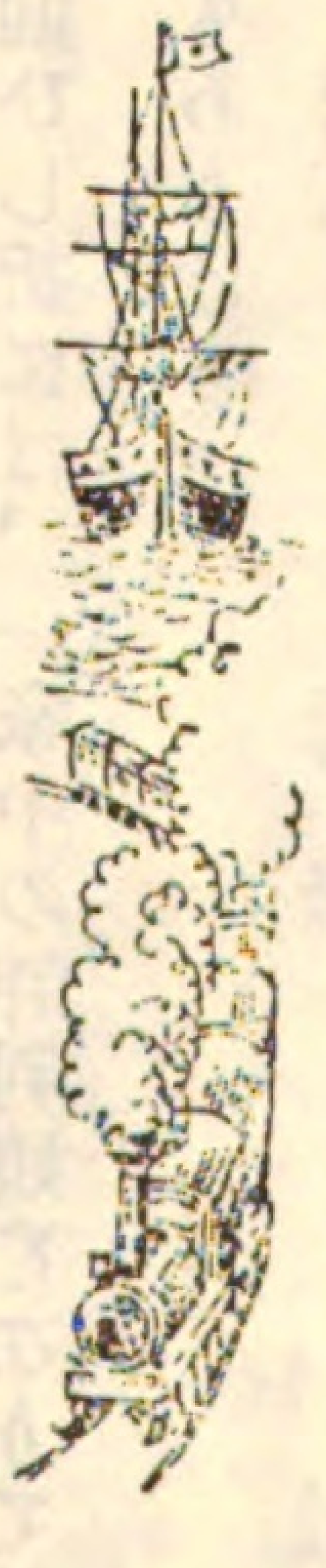
泌尿及生殖器病	二〇五、五一	八四、八四	二〇、五六	九、四二	一七、九八	九、〇七	一九、三八	八、〇二	一六、七九	六、八二	二八〇、二三	一一八、一七
外襲性變死	六一、六三	九三、三三	四六、七八	六〇、六六	三六、五六	五六、一一	三〇、四九	三七、〇九	二一、三九	二四、二四	一九六、八五	二七一、四二
中毒病	五四、二四	二一一、九四	三、三九	三七、三一	三、三九	四四、七八	一六、九五	二二、三九	二〇、三四	七、四六	九八、三一	三二三、八八
原因不詳	一九一、四三	一七八、三四	五九、六五	六、七九	三三、二三	三五、八三	一九、三九	一七、〇五	一六、二二	一四、六一	三一九、九二	三〇四、六二
計	二〇八、二三	一九〇、四〇	六二、〇一	五八、四九	三七、四九	三七、四八	二六、六五	二六、三五	一八、六五	一九、一八	三五三、〇二	三三一、九〇
合計	一九九、五〇		六〇、二九		三七、四八		二六、五〇		一八、九二		三四二、六九	

（千中此の合數の外は五年以上のもの及び年齢未詳のものに係る）

即ち人口千の中滿五歳までの死亡者は第一に皮膚及筋病にて死亡し、第二に發育及び營養的病にて死亡し、第三に神經系及び五官病にて死亡し、第四に傳染性病にて死亡し、第五に呼吸器病にて死亡し、第六に消化器病にて死亡し、第七に外襲性變死し、第八に泌尿及生殖器病にて死亡し、第九に骨及び關節病にて死亡し、第十に中毒症にて死亡し、第十一に血行器病にて死亡するものにあらずや。亦以て小兒衛生の如何なる病症に向て最も密なる注意を要すべき乎、如何なる手段を以て之を豫防せざるべからざる乎を察するに足るべし。世の父母たるもの、仔細に此邊に考慮する所あり、十分なる注意と十分なる手當とを以て、以て可愛の子女の健全なる成長を企圖せざるべからざる也。

人

人は十才で小兒、二十才で荒れ廻り、三十才で馴れて、四十で賢こく五十才で富み六十で善し



實談

烈婦溝口與志 (上)

一葉庵主人

人生れて婦人の身となる事勿かれとは誰がいひ殘したる言の葉なりけん。織田信方公の家臣に溝口七太夫とよべる侍ありけり、年老ひたれども男子とてはなく、一人の娘ありて名をば於與志と呼びつ、天のなせる美しさを猶ほ磨き立て飾り立て寵愛斜ならず、稚きより歌俳諧香のきゝやう茶のたて方、さては音樂書畫の嗜まで殘る方なく、師を撰びて敎えならはせける斗りか武藝までも七太夫自ら手を下して法を傳へ、只管何事も世に勝れ天晴れ藝も縹緻も雙びなき賢女かなと、世間の人に賞させたきは親心、これを譬へば山高く、海深しとやなみならず思ひ汲みつゝ怜悧ければ、朝夕更に怠なく心を籠めて學びしより、於與志の早や二八の春を迎ひし折には、一家中の評判娘となりて羨むあり猜むもありけり。

然るに其翌年於與志十七歳の秋、ふさはしき縁なればとて、同家中松村甚右衛門の次男七郎右衛門といへるを婿養子となして、於與志に配合せ溝口家をば繼がせける。(此時七郎右衛門十九歳)七郎右衛門は少年ながら才氣に富み、且つ美男子の聞えかくれなかりしかばアハレ一雙の美玉よ、梅と櫻のいづれ劣らぬ夫婦なりけりと、たゝへぬ人もあらざりける、夫婦の間も能く睦みて、春の日も短く、秋の夜も明け易しと打かこちて、七太夫夫婦も人の顔みる度、やつと安心致しましたと問はれぬ先に吹聽し、人も何より先に御安心でと花を持たせぬ。

嫉風妬雲多し、月に曇るとあり、花に散るとあり、浮世のならひぞ常なけれ、玆に織田信方公の正室にして

綾の方と申せる傾國の美人おはしき。御年ばへ廿餘七ツ八ツ過ぐさせ給ひけれども、姥櫻のながめ一層にして、紅粉の粧鷄障の下に深く、御身にかさね給ふ羅綾錦繡、髪にかざし給へる玳瑁珊瑚、揚貴妃の唐朝に時めきて、六宮の粉黛顏色を失ひしも、よもこれにはいかで過ぐべしなど沙汰しあへり。

一年後園の春の花に、信方公群臣を召し集め給ひ、奥表のへだてなく、今日ばかりは無禮講よとて、蝶と舞ひ鳥と共に歌ひて、一日の歡をつくし給ひし事ありしが、綾の方は此折フト彼の七郎右衛門の優姿に心を亂し給ひ、夫よりは徒に唯戀つのりて現となく夢となくまどろみ給ふにも、彷彿に其面影を見て、果ては病に伏し給へり。

奥方附の女中に蟬羽といへるものあり、先に家中の某に嫁ぎ、其間に一人の娘をもふけて夫は病死したりしかば、家をば弟なる人につがせ、娘をば自らが兄の許に托し、奥方の御側に侍き、御寵愛の深きを此世の思出にして月日を送り居けり。然るに其娘年頃になりて何時しか七郎右衛門を戀ひ慕ひつ、母も夫と知りて彼にかく思を碎き、其望みを叶へてやらんとなせる甲斐なく、七郎右衛門は溝口の養子となり、於興志との妹背中、睦ましき由聞くにつけて、娘は遂に狂じて死せり。蟬羽これを悲しむの餘り、痛く於興志を怨みて、愚にも綾の方の七郎右衛門に心を寄せ給ふを推し、道ならぬ不義の媒をなしけることこそうたてけれ。

（中）

或日溝口七郎右衛門の妻於興志は、此頃の良人の素振何となく氣にかゝれば、氣に入りの姥をさへ近けず、獨り一間に閉ち籠り、良人七郎右衛門がぬきすてし小袖などたゝみ居たるに、袂よりして一封の文出でたり。ひらきて讀むに艶めきし女文字にて、人目を忍ぶ戀のじつなき由など繰りかへせり、扨てはうす〳〵耳

にせる由もありしが、さてもよもやと思ひ居たるに、此筆跡は何時なりけん、花月の御宴にめされし時、書きて給ひし御歌そのまゝ、良人は疾くより君臣の分を亂し、奧方と密通なし給ひしか、あな悲し天魔の所爲か狂氣の沙汰かと、泣くも十方にくれ方の、人目なければ取みだし、袖かみしめて伏しなげく、女心ぞあはれなれ。

（下）

徒に歎き悲まんよりは、良人の爲め御主人の爲め、又一つには家の爲め、聞かれぬまでも誠をつくし、諫をいるゝにましたる事なし、今日歸られなば兎やせん角やせん術も、淚先立つせつなさを、こらへ〳〵てかき上ぐる、髮も亂れて後れ毛の、千筋は心、一筋は、流石が操に曇りなき貞女の鏡なりけられし。

七郎右衛門はいたづらに、迷ひ入りたる不義の道、妻が諫もあだにして、猶ほ日につもる亂行を、誰れ言ふとてはなけれども、世間の人の口の端にかゝるぞ四知のためしなる。唯此上は身を捨てゝ、良人の罪に代らんと於與志は思ひ入合の、かねて母より讓られし合口をつて鞘を拂ひ、燈の影にさしかざせば、水したゝる刄の冴、ゾッと寒さを身に覺へ、わなゝく手先、血走る眼元、さらでも深き女性の罪、忠義の爲めとはいひながら夫を殺す大惡業、賴むは唯に菩薩戒、『以憐愍心而斷彼命』と佛だに、說かせ給ひし誓ぞかし、救はせ給へも口の內、ホロリとこぼす血の淚、硯にうけ



て書とむる、文一巻は裾に縫ひ入れ、他の一封は人をもて父七太夫の方に送らせ、殘るはこれを懐にし、良人の歸待受くる、心の內ぞ哀れなる。

斯るべしとは露知らず、七郎右衛門は夜に入りて、歸り來れば出迎ふる、妻の於與志は甲斐〲しく、袴の紐を解くや疾し、用意の合口抜より早く、良人が脇腹グザと刺す、刺されて驚く七郎右衛門、床になほせし太刀を取らんと、よろめく所を引き倒し、懐にせる一通とり出し、

一、君臣の分を忘れ恐れ多くも御主君の御正室と密通わりし事

二、此事公となるに至らば御正室をはじめ良人にも重き刑罰を蒙りて君家は御家不取締の由にも相成且つ溝口家斷絶の事

三、夫病死の由を以て他家より養子をなし當家家督を願ふ存念の事、

四、去る年睦月晦日の日附を以て綾の方より送られし艶書の手に入り來るのみか蟬羽の去る人に洩せし秘密を耳にせし事乳母某の妹なるものを御奉公に出し實否を探らせし事

つばらに說きて涙を拂ひ『猶ほ數々の申條は候へども聞くに嫉妬よりと覺されんも心苦し、早や何事も申すまじく候ふ、妾も御跡を慕ひまゐらすべければ、言つくさぬ節は後の世にてや語りつくしはべらんかし』といふをきゝて、七郎右衛問苦しき息をホッとつき『よくぞいしくも計らひしな、今更に吾も夢さめたり、死すともなどか怨みんや、唯我亡後は兩親に孝養つくし奉り、せめて命日忌日には菩提を弔ひくれよかし、ゆめ我跡を逐ふなど、不所存なる事し給ふな』と誡にかへる臨終の一言、聞くに於與志は腸ちぎれ、張りつめたりし一念も、ガックリ弱る哀傷慟哭。七郎右衛門は傍なる合口片手にさぐり寄せ、腹に衝き立て引廻し其

儘息は絶え果てける。
かくと見て於與志も今や合口の鮮血を拭ひて逆手にとり咽喉かききらんとしたりし折、父七太夫は走せつけて之を制し、上に娘與志亂心の上良人七郎右衛門を傷けたる由訴出で、公の御沙汰を待ちたるに、上にも敏くましませば、早くも御慈悲の裁斷もて、家祿は故なく隱居七太夫に賜り、於與志には御内意もて白小袖一襲を下しおかれ、自害御許容ありしかば。於與志は只管涙にむせび、上の御恩を謝し奉り、沐浴して身を清め、鏡にむかひて化粧をなし、死裝束の似合ひしも、前世定まる因果かと、櫛をとる手も躊躇ふうしろに、父七太夫は忍びより、男々しけれども女なり、おくれ出でなばみにくからん、唯一太刀と氣合をはかる姿のチラと鏡にうつるを、於與志は見るより飛び退きて、『コハ御情なし父上よ、妾女なりとも武士の妻、いかで未練の擧動致さん、これ御覽ぜよ』といふより早く剃刀とつて衣ごしに、太股深く劈きて顔色だにも動かさず七太夫にも斯くまでとは思はざりし娘の氣丈に舌を卷き『天晴〳〵夫でこそ我娘なれ此上はいかで障げせん、心靜に生害せよ』と背くる顔も涙なる。
於與志は死所とさだめたる、一間に入りて正面に、白木の机、經卷球數、百八莖に煩惱の、羈はたゆる香爐の煙、親子は一世一本花、さして行手は死途の山、手に手をとらん我良人は、改名さへも如夢信士、手向の水や茶碗にも溢るゝ、親の恩をすて、佛に縁を結ぶなる割島田さへ艶らせて、憐に哀れ重ね着る御館よりの拜領小袖、うらなき忠義操の鑑、うつる時刻に氣をはげまし、唱名念佛三遍の聲を此世の名殘にて、見事にかき切る命の玉の緒、長くぞ傳ふ美談なる。

＊　＊　＊　＊　＊

風に折らせし菊一枝、色香もうせて秋寒く、手向の露も虫の音も、いづれ淋しき限りなれ。（完）

詩人ゲーテの母（四）

稲澤英子

十、悲憂の時

久しく病床にありし父ゲーテは、千七百八十年の七月廿五日に至り終に沒しぬ。是より前數年間の記事中彼に就て傳ふる所多からざるは、彼が長く病蓐にありしに由れり。又長き病は彼をして益々頑固執拗ならしめ此がため彼の諧謔、快活にして信仰深き夫人すらも、時には憂鬱に沈みしとさへもありき。想ひ見よ、夫人は十七の妙齢を以て廿歳も年長の人に嫁し、且つ氣嫌常に面白からず、怒り勝ちなる老人に仕へ、或は數年の間は病魔の爲めに犯されて、漸次憔悴枯死する者を看護し、特に病沒前二年間は一入悪かりしといへば、其命運も亦憫むべきものあるなり。幸にも老公爵夫人の慈恩の特に厚きありて、毎々書を寄せ、彼を慰藉し給ひ、又ウォルフガングの新作は續々世に出でゝ、盛名益々昇りにければ、母夫人は或は愛子が著述を讀み或はワイマルよりの音信を聞きて樂しみ、僅かに忍びがたき憂悶を慰めけり。

後良人沒してよりアヤー夫人の看護、苦勞の重荷は急に取去られたれば、身を獻げて働くの場所を失ひ、曾て混雜したりし家も、今や寂寥として人影稀れに、一子は煙波萬里去りて遠く、一女コルネリアは既になし是を以て夫人は憮然として當時の情を述べて曰く「寂々として孤情堪ゆるにかたし、若し我快樂を求めむと欲せば、わが家の外に於て他人に就て求めざるべからず。曾て熱鬧したる我家も今や寂寞として恰も墓地のごとし」と。然も夫人何ぞ自ら慰むるとを知らざらんや。常に自ら勵まして、此の悲愁を忘却せむとなしぬ。實に其述懐こそよき證言となりぬべし。曰く「月に盈虚あり、年に寒暖あり、人生に何にとて幸福の日

のみ始終打ちつゞくべけんや。故に今日此の日を常に感謝しつゝ送るは。此上なき幸福にして、かく思へば世を渡るも最も安し」と、其後夫人の氣色全く勝れたりけむ、「神は我に今日此頃、健康、愈快にして喜こべる心を與へ給ふを感謝す。我は擾騒混雑なる快樂を好むものにあらず。靜穏なる生涯を送くるこそ我が願ひなれ。將來の暗き事に付き樣々に配慮するは、これいらざることなり。又一人にて生活するにあらず、いとも貴き全智全能の御方は、常に我が側を守らせ給ひ、場合に應じて、必要なる幸福と慈愛とを下し給ふに拔目はなし」といひき。

十一、劇友アヤー夫人

觀劇は夫人が幼少の時より特に好める所なりしのみならず、きはめて、よく之を解せしが、良人沒してより後、閑暇も特に多くなりければ、觀劇の多かりしも怪しむに足らず。又夫人は甚だ能く之を批評するの才を有し、決して彼の俗人の觀劇を學ぶ者にあらず、又多くの俳優に交り、或は奬勵し、或は諫言し、或は保護し、或は救助せることも數々なりき。

彼の演劇を見物するや、其所作を見ては恰も目前に現場の實演せらるゝが如く、一擧手一投足皆感ぜざるはなし。故に或は嗚咽し或は笑呼する等外目にはいとをかしきことも屢々ありき。曾て夫人の劇を見るや、忽ち同情に堪へず嘘唏をく能はざりければ、隣席の婦人見兼ねて其袖を引き、是れは事實ならざるにあらずや、何とてかく嘆き玉ふぞといひしとて、大に之を憤りしこともありき。「ハムレット」劇の演ぜられし時にも夫人は好みて之を觀たりしが、シルレルの新作、特に子ゲーテの新作の演ぜらるゝに至りては、大に好むで之を見たり、就中ゲーテの作「ゲッツ、フフオン、ベルリヒンゲン」の演ぜらるゝや、其劇中ゲッツの妻は則ちゲーテが其母を書き出しゝ物とて、市中の評判は高く、

夫人の得意も甚だしかりき。當時ある人はいへり此の劇を見て始めて此の人にして此の子あるを親したりど。

十二、新舊の知己

頁人の沒後、母夫人が日常の生活に大なる變化を來したるは、自然の道理なるが、其の老公爵夫人又はフリッツ、シタイン(シタイシ夫人の末子なり)に寄せたる書中には、明かに其樣をかき付けあり、曰く「ウォルフガンクの、あさねを好むが如くに、私も亦た八時半までは寐居り候。起るや先づ細々しき家事又は其他の事務を整理し次には文書を認め申候。此の如き可笑しき應答を爲す者は私より外に無之と存じ候、私は一ヶ月中一度は必ず机の中を整頓し、秩序を立つる定めに候處、其を爲す間は絶えず抱腹絶倒いたし居候、其は机の中は貴賤、上下、信者不信者其々より寄せたる書狀散亂して、少しも位階の差別なく、恰も天國の如くにて、敬虔なるラバーテルの書翰は、不平なく役者グロースマンの傍に有之候。午後に至れば來客を受け候が四時に至れば悉く謝絶して、衣服を改め劇場或は友人を訪問し、九時には歸り申候此は私の平常の起居に御座候」と。

千七百九十一年二月三日皇太子誕生あらせられたりとの報、ワイマル公室より來るや、母夫人は前より少しも豫想せざりしとて、雀躍止む能はず、直ちに其喜びの情を敍し、祝詞を奉りぬ。其書中に曰く「妾の御報に接するや、欣喜の情、胸に滿ちて手の舞ひ足の踏む所を知らず、忽ち玉章を手より落し、暫しの間は少しだも身動きせず、全く感覺を失ひし如くなりしが復た急に全身煮らるゝ如く感じて、紅粉を二度塗りたるに等しく紅漲し、呼吸さへも苦しくなり其勢にて壁にむかひ皇子よ皇子よと連呼なしき、若し側に人ありて此の樣を見たらむには、全く狂せるものと思ひしならむ」と。

千七百八十四年の頃アヤー夫人は、老公爵夫人より多くの贈物を得たりけるが、其中には特に御眞像もありて之に付け玉ひし御書狀中に「この像は眞に貴夫人を愛し、又尊重する者を思ひ出ださしむる者なり」との御言葉さへあり。されば母夫人は此の贈物を得るや、歡喜おく能はず、直ちに感謝狀を認め、之を奉りぬ。されども兩夫人の音信は此後漸くに絶へ果てぬ。千八百〇七年に至り老公爵夫人の訃音到るや、母夫人はウオルフガングに書を寄せて云ひぬ、「我は吾等の敬し奉る老公爵夫人の崩去を聞きて、愁傷に堪へず、これが爲め我が有する美しき紀念は、今や一層美しき者となりぬ。誠に吾等は數年の間互に應答をなさゞりしとはいへ、昔日の交情は決して我が記憶より去るものにあらず、又凡て此の地にありて老公爵夫人の知遇を辱ふせる者は、皆其冥福を祈り奉らざるはなし」と。

十三、メクレンブルヒの皇女と母夫人

當時天が下をしろしめす皇帝ヨゼフ第二世は、千七百九十年二月廿日に崩御なし給ひければ、フランクフルトの市民は新たに皇帝を撰擧し、其即位式を擧行することのために忙殺せられんばかりなり。いよ／＼新たに撰擧せられたる皇帝の即位式擧行せらるゝ時となりければ、全墺、全獨の王侯貴族有志の人々フランクフルトに群集し、其多きこと星の如し。此の時ハンノーフエルの撰擧侯も亦た臨み玉ひしが、メクレンブルヒストレーリッツの二王女及皇子ゲオルグも之に同行なし玉ひてアヤー夫人の家に滯在せらるゝととなりぬ。是れ夫人の家屋の宏大なる爲とはいへ、王女とワクマル家との血族なるも其原因となりしや疑ひなし。皇女姉をルイゼと呼び玉ひ、後普國王の妃とならせ給ふ。實に佛國に勝ち獨乙國を一統して新たに帝國の基を開きし英武幷ひなき皇帝ウヰルヘルム第一世の生母にして、之を艱難の間に敎育なし玉ひし御方なり。妹をフ

リデリクーと呼び、後ハンノーフェルの女王とならせられぬ。當時姉宮は十四歳、妹宮は十二歳にて何れも容姿清婉にして氣品高く、且つ温和にして無邪氣の性質なりしかば、當時の人皆賞嘆せざるはなかりき。さればゲーテ家に滯在せらるゝや、アヤー夫人も年は老れども心は老いずありければ、彼れ此れ互に意氣相投じて馴れ親しみ、忽ち畢生復た斷ちがたき交情ぞ結ぼれける。

ゲーテ家に今も猶存する内井戸一つあり。一日二王女は之を見そなはし、いと珍らしきことに思はれ、特に姉宮は我等は水を汲み得るや否や之を試みむといひ玉ひ、母夫人の許を得て、意ふまゝに水汲みて遊び興じ玉ひしが、侍女等は之を見て、いと見苦しきことにて王女には相應はしからざる戯事と思ひ、王女をとゞめむとなしぬ。アヤー夫人はこの樣を見、いと面白からぬことに思ひ、直樣侍女等を强ひて居室中に導き行き外より鍵をかけて出でしめず、而して後共々に衣の全くしたゝるまで水汲みて打戯れしともありき。是れ今日傳へて人々の美談とする所なり。當時母夫人は云へらく、二王女貴しとはいへども、小供にいませば、此等の無邪氣なる遊を許すとも何の害かこれあらん、是れ小供の自然なる發達の順序なりと。

かくして王女、王子は母夫人の家に在りて、日毎に或は洋琴を彈じ、或は歌ひ、或は舞ひなどして心置なくいと快よく戯れ玉へり。又御逗留中は毎日正午に至れば、各一挺の肉匕を携へて、母夫人の食卓に來玉ひ、何にても供せらるゝ者は自由に自分の皿に取りて食せられたりと。然れば此の家に滯留あらせられし當時の快樂は、其後立身なし給ひし折に至りても少しも忘れ給はず、屢々言ひ送らせ給ひぬ。ルイゼ王妃とならせ給ひし後、王幷に妹宮と共にフランクフルトより程近かき温泉へ啓行あらせられしことありしが、直ちに迎

への馬車を立てゝ、ゲーテ夫人を召されしかば夫人は大に喜び直ちに伺候せしに、王妃は又三皇妹にも謁見せしめ、且つ懇に過ぎにし年の厚き待遇を深く謝せられたりしとなむ。

當時ワイマルよりも公爵アウグスト殿下臨席せられたりければ、夫人の歡喜譬ふるに物なく、夫人か其時の樣子を敘して子ゲーテに送れる書狀中に曰く「……さなきだに我は大によろこびてありしに、猶其上に誰の來ませしか、ワイマルの我が公爵！嗚呼神よ是れ何等の恩惠ぞや、嗚呼、公爵は汝につきて如何に美はしく又良きことを語り玉ひしよ、我は呉々も汝が此の頃の病の折は特の外配慮せられし事を涙ながらに謝し奉りしに、公爵も一際感動せられて是れまた我れに爲せしと同じ、既に廿年以來我等は行路を共にし重荷を分け負ひて進めりと語らを給ひし時は、我は感極まりて笑はむと欲して笑ふ能はず、泣かんとして泣く能はざりき、是れあるに尙ほ此の刹那王妃は我を次室に召し玉ひたれば行きけるに、いとも貴き寶玉をちりばめたる襟飾を取りて出で玉へり、而して慈けるよ、御手づから我が胸邊にさして賜はりぬ、我れは感謝の餘り涙にむせびて却て碌々謝するとも出來ざりき」と。

ゲオルグ皇子はメクレンブルヒ、ストレーリッツの公爵となり給ひて後も以前の事を回想して屢々書狀を下し玉ひたり、其中にも「卿が詩人ゲーテを生みし母なるは毫も怪しむに足らず」と稱したまひたることもありき。是れにても知るべしゲーテと其母が相分つべからざる關係を以て、世に立つは實に美譚として世に傳ふるに足るべきことを。當時母夫人は大詩人の母なるが故に、之を訪ひ、之に接して其偉人なることを知る者もわり。或は先づ母夫人に交はり其子なるが故にゲーテの詩を讀み、而して始めて大詩人と交を結ぶに至れるものもありき。されば吾人は亦吾人が着眼點となせし

其子の母たる夫人にかへりて之を觀察せんとす。

（未完）

急速

先生「急速とは何を言ふか」
生徒「人が熱き皿を下へおろす時」

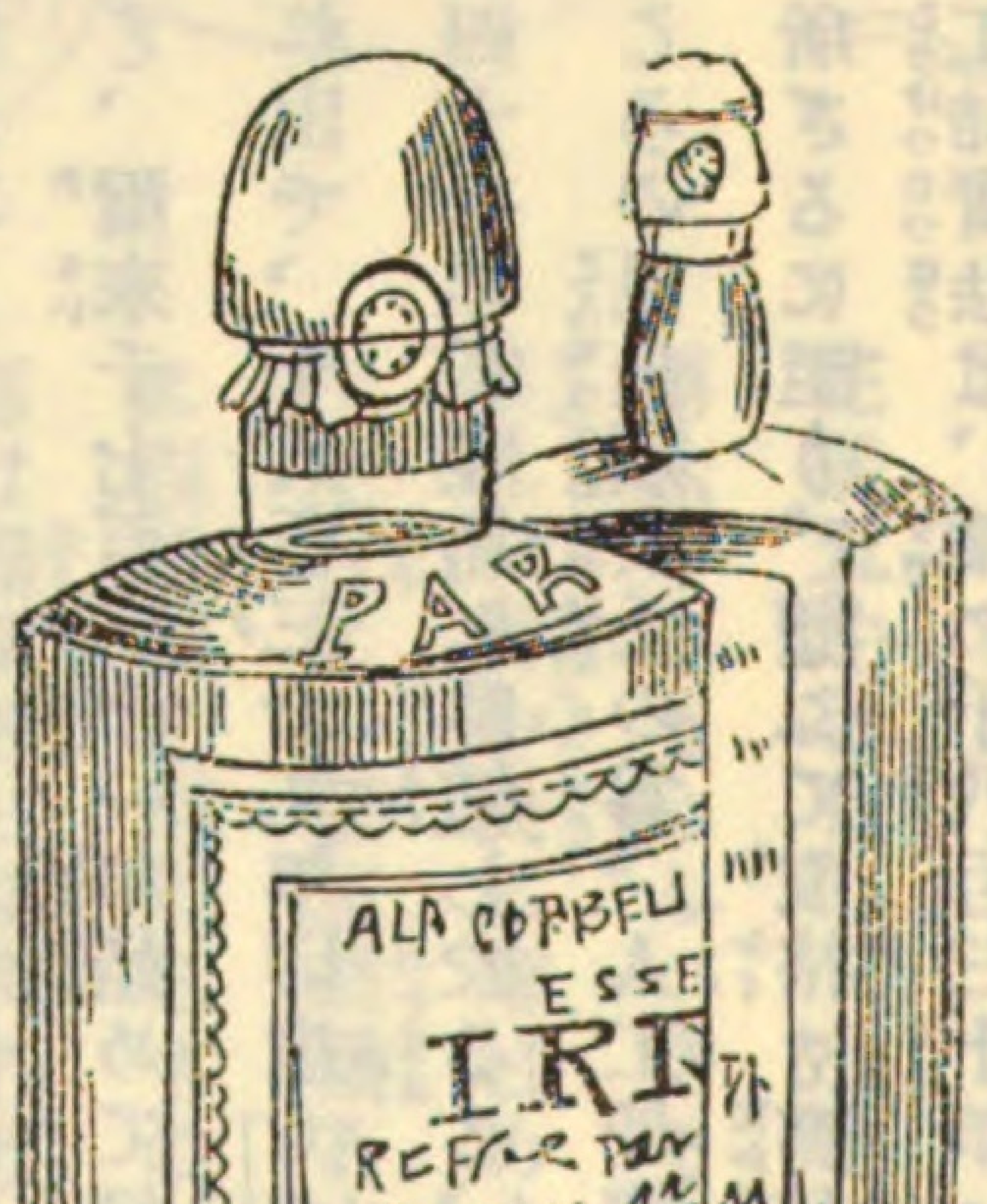
科學

香水の原料

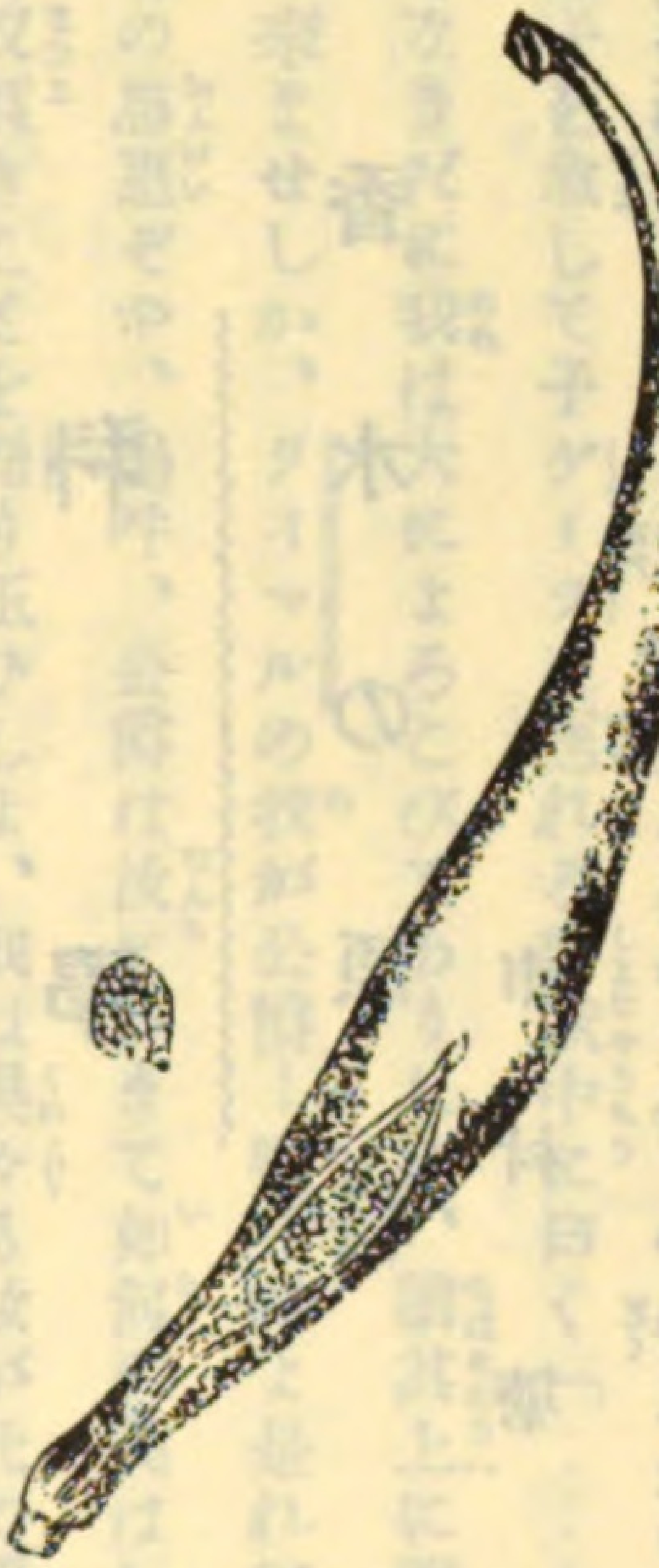
市村塘

本誌愛讀婦人諸君は定めし年の暑中に於て、特に夫の香水といふものを使用せらるゝあるべし、其種類も或は薔薇、或はイリス、或は麝香、或は丁子、或は白檀、或は梅花、等一々枚擧に遑あらざれども、概して所謂上等の香水には、必其芳香を快美ならしむる爲、ワニラと稱する植物の種子浸液を滴加するを常とし、諸君は香水を嗅ぎて薔薇にあらず麝香にあらざる一種高尚なる佳快の芳香を放つものあるを識り給はん、其芳香成分こそこのワニラに歸因するなれ。

ワニラと稱し、藥舖に販賣するものは、圖の如き角狀の蒴果にして、內に褐色の種子充滿せり、皆外國輸入品なり、元來此揮撥性芳香躰は往々白粉狀に結晶し果壁の內面を被包するとあり、ブッフホルツといへる獨逸の化學者はこれをヴァニリン(Vanillin $C_8H_8O_3$)と名けたり、此結晶躰はちと六ヶ敷く云へば、無色長方柱躰



をなし、七十六度攝氏にて熔融し、百五十度にて蒸化す、又百九十八倍の冷水、十一倍の沸騰水、五、六倍の酒精（十五度比重〇、八二三）六、三倍の依的兒に溶解し、石腦油には僅少、クロ、ホルムには莫大に溶解す、通常香水は純酒精溶液にして適宜の依的兒を加ふるとあり、

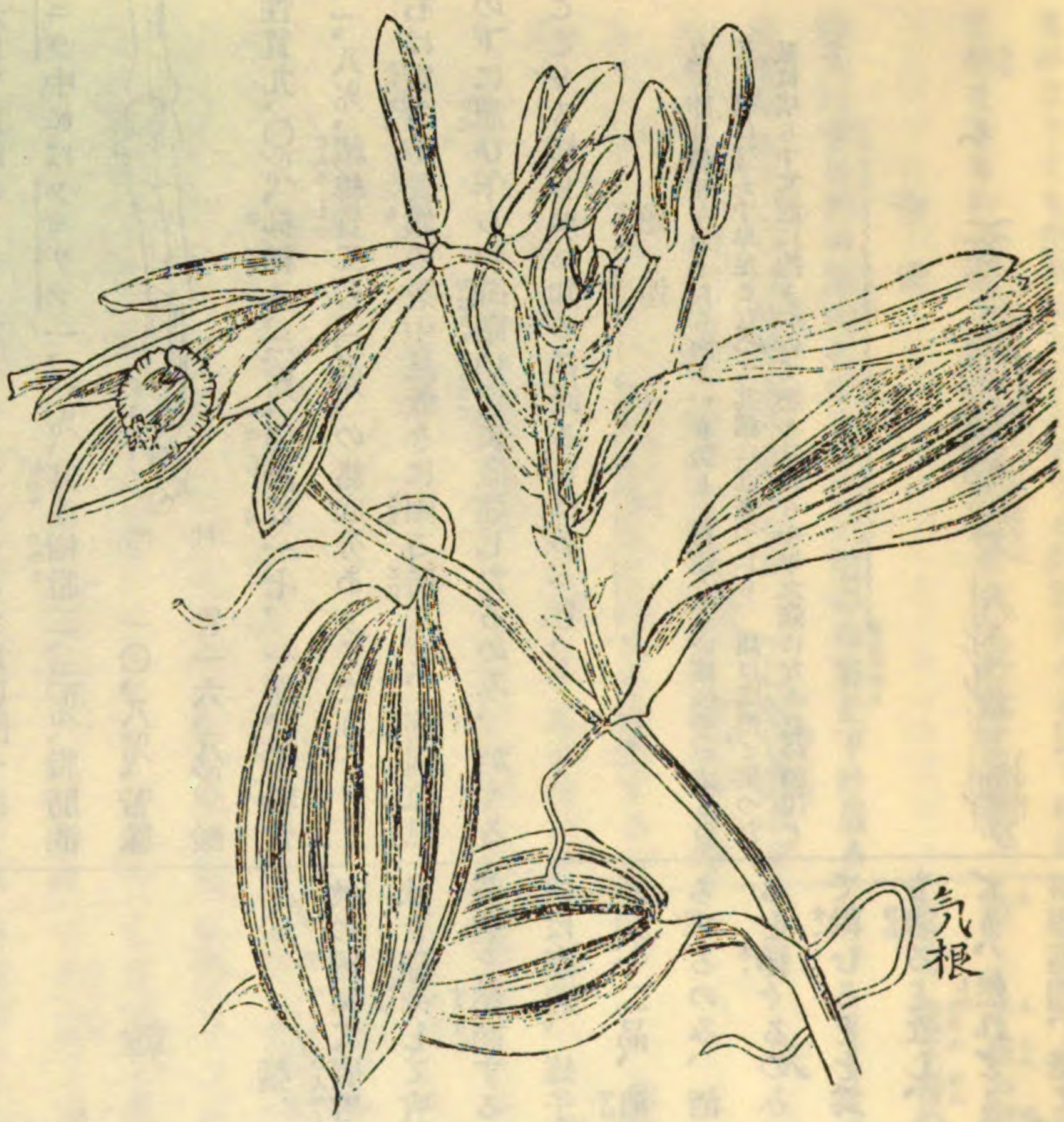


ワニラ莢果及種子廓大圖

然るにかく該品の藥舖にあるといふのは香水の原料たるの故にあらず、大に健胃藥、矯臭藥、矯味藥に用ゐられ、且つ汎く香味料に好供し得ればなり。

偖てこれよりワニラは果して如何なる植物の果實なるやに就て一言せんとす、もと此植物は亞米利加の墨西哥沿岸の温暖なる濕林中に野生せる蘭科攀援草本にして既にコロムブス亞米利加發見前に於て土人其果實を採り柯々阿豆の香味料に供したるとは歷史上明白なる事實とし、降て十七世紀の終に當り西班牙及佛蘭西にて培養を始め専らチヨコラート及煙草の香味料として用ゐたりと、爾來千七百二十一年始めて倫敦府の藥舖にも現はれ出で、千八百三十九年印度レウニオン島及び千八百四十一年瓜哇島に移植したるも、結實の媒介をなすところの昆蟲類欠乏の爲、人工受精作用を行ふの已むを得ざるに至り、隨ふて價格も高値となれり、尤も此人工結實法は、業に千八百三十年ノイマン氏の考案にかゝり、創じめ巴里府にて行へしものなりといふ。

圖は其全植物の模様を示さんが、殊は花部近邊を現はせり、通常濕林喬木の頂上迄、纒繞伸縮するものにて



葉の付元に對し氣根を出し親樹に接着し得るなり、莖は直徑三四分許頗る多肉多漿、葉は鎗形長さ五寸許、葉柄兩緣隆條ありて中間に凹溝あり而して莖に互生す、花は類黃綠色の花蓋五片を有し、長さ二寸餘あり、第六片ともいふべきものは喇叭狀を呈し、其中央に雌柱あり、其背面及び左右に一個宛雄蘂ありて、他は別に假雄蘂と稱するものに化せり、子房は圓筒形三稜角あり、受精後內に一對の三線條ありて、各々種子を負荷す、漸く熟すれば長さ九寸許、太さ五分程、外皮綠色堅固にして、內容は褐色の團塊を以て塡充し、中に小卵形黑褐色の光澤種子埋在す、

是即ち前記のワニラなり、フツフホルツ氏に隨へばワニラ中にはワニリン一、一%、其他樹脂一一、三%、脂肪油一〇、八%、苦味質一六、八%酸性質九、〇%、砂糖八、三%、護謨質一七、一%、澱粉質二、八%、纖維質二〇、〇%、の諸成分ありとなり。



雌柱

右は諸君が愛孃の暑中見置きに困る時など、庭園涼風の下に憩ひ乍らの御話柄迄に概述したるのみ、かゝることゝも知らぬは知るに優るとはいへじ、

邂逅

私が昨日銀座を通つたら向ふから美しい可愛らしい娘の子が來るので、私は覺えず早足となつて其娘に近寄つたら、娘は嫣然と笑つた私は堪らず其娘に抱きついて熟々見たら今年六歳になる私の娘でした



談叢

韓國の風俗

鷄林子

饗應

彼の國にて賓客を饗應するには我が邦の如く山海の珍味を陳列して賓客を飽醉せしむる等の事はなく、假令貴賓を招請するにも梨子、乾柿、栗子の類と豚、羊、或は家鷄、雉子、野鴨等の鮮肉、若しくは烹たる肉と魚類一二品、漬物二三品を一つ膳に載せたるものを持ち來るのみ、酒は我國の小き藥罐やうのものに盛りたるを捧ぐるのみなり、而して酒二三行位に至れば強いて勸むるとを爲さず、一瓶の酒旣に盡くれば又再び持ち來るとなし、此の習慣は頗る嘉みすべきが如くなれども、然れども馬食するは元來彼の邦人の特色にして料理萬端、總て僅かの珍味を食はんよりは假令味なき

ものなりとも飽食せん事を欲する風習なるを以て格別に味なきものと雖も腹の膨るゝ儘に食ふを常とせり。

巾着

韓人は常日其の腰圍に必らず二三箇の巾着を下け居るを常とせり、一は煙草を入るゝもの、一は賭博道具を入るゝもの、一は奴鏡、髮かき篦、煙管の煙脂取り等を入れ置くものとす、元來彼等甚だ容止を修飾するの癖ありて時々刻々隙さいあれば鏡に對して髮のほつれ毛を搔きあげるなり、本邦居留地の人彼等が腰圍の品を稱して韓人の七つ道具なりといふ。

家畜

朝鮮にては猫を飼ふもの少し、蓋し猫の繁殖甚だよろしからざるに由るといふ、而して牛は至る處の戶々家々に飼畜さる因て彼の邦俗一比喩を作りて曰く、猫の性たるや狡獪猾智、牛の性たるや從順勤勞、故に牛は日々屠りて食用に供するも入道其數を減ぜず、是に反して猫は屋內にありて主人の膝に養はれ、日々美食に飽くも子孫の繁榮を見ず、古語に曰く、積善の家餘慶あり、積不善の家餘殃ありと。

天氣の話(二)

雲(續)

TK生

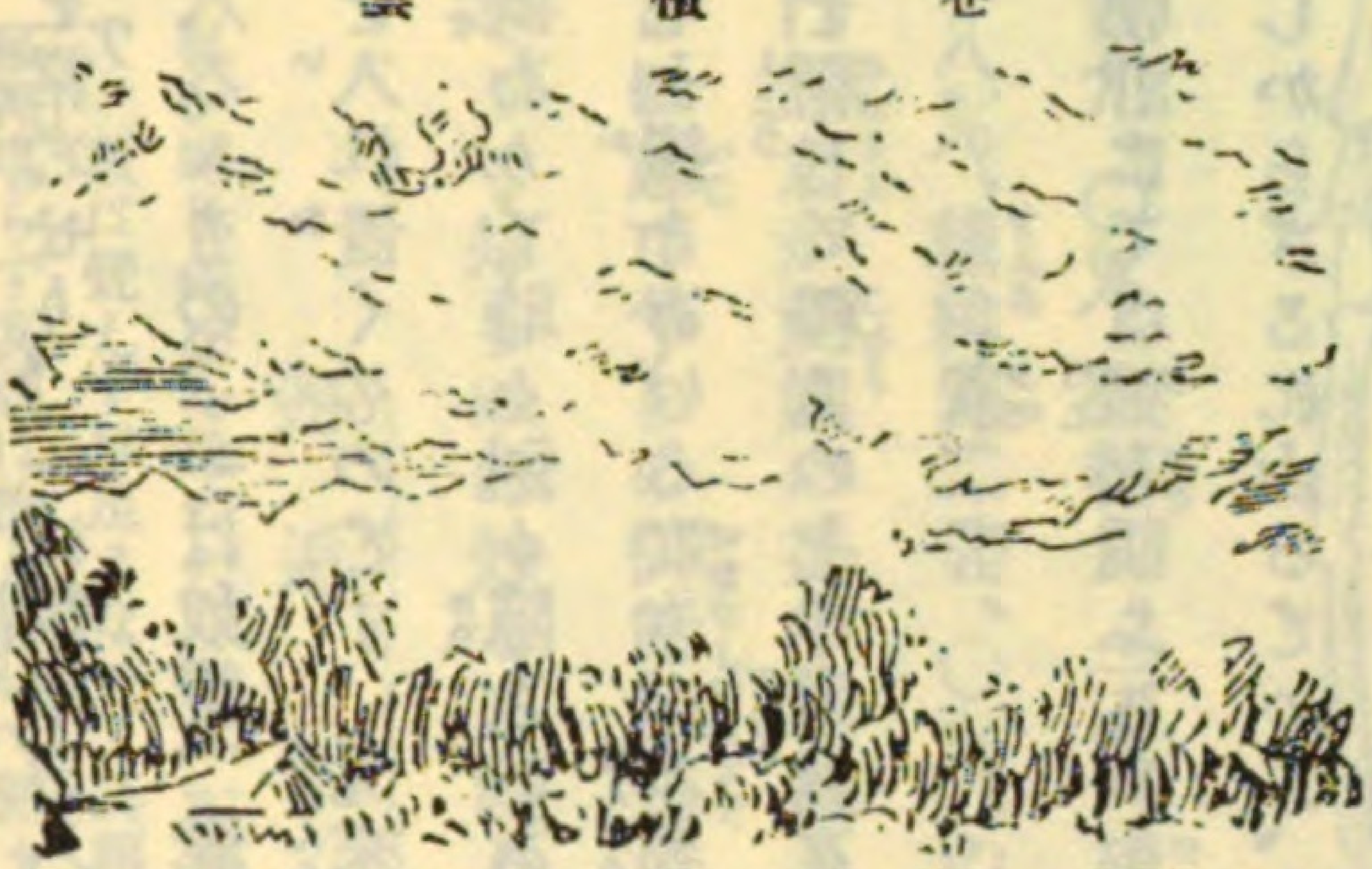
卷積雲

卷積雲といふは個々圓形をなして、相密接したる所の雲の集にして、雲と雲との間隙より青空を斑らに顯はすは此雲なり、こは前回に述べたる卷雲の形を變じで許多の圓き塊となり以て空を蔽ふに至りしものなり、英國にては此の雲の出現したる空合を鯖空といふ、蓋し其狀恰も魚の鱗皮に彷彿たるか故なり、大氣乾燥して炎天燒く如き夏の日には屢々此雲を見受くべし、此の雲のあらはれたる時は急に雨天とはならねど、永く

晴天のみ續くものにあらずと知るべし、又た雷鳴の前にも此の雲か極めて濃密に出現することあり。

巻積雲か地球の表面を離れて遙に高く懸る時は、通例二三時又は一兩日を經て雷雨來る、又冬の日此雲を高く見ることあれば、惡しき天氣を豫期すべし。

若しも此雲か濃厚にして其の縁に數個の角を有し、而して一直線に長く連る時は二三日の内に暴風雨來るべし。



巻積雲

綿の如き巻積雲か細に列びたる時は快晴の日續く、されど雲か濃厚にして其數許多に過ぎ且つ多少の巻雲を雜ゆる時は、空中に雷氣的作用を起し、風向に變化を生じ、夏日に於ては終に雷雨となり、冬に於ては烈風と成る。

巻層雲

巻層雲とは巻雲幷に層雲の二性質を有し、兩者の形像を兼ね持ちたる雲をいふなり、此雲は平面又は斜面をなし、其中央部は濃厚なれど涯端部に至るに從ひ次第に薄くなる所の雲なり。

此の雲が相連續して夥しく出現する時は暴風雨近きにありと知るべし。

月暈及び日暈の如きものは巻層雲の作用より起る空中の現象にして、惡しき天氣の來るべき前表なり。



積層雲

巻層雲の長き線が、水平面に沿ふて廣がり、其中央部少しく縮小するを見るときは必らず翌日は雨天なりと

ずっ

積層雲

積層雲とは巻層雲に積雲の堆積を交えたる雲の形にして、驟雨の前なぞには折々眺むることを得るものたり。

積層雲の現はれたる時は、其の季節に依つて或は降雨ともなり或は降雪とも成る。

積層雲と前の巻層雲の硯が、共に灰色をなして海上に現はれ、東南より西南にわだかまる時は、是れ即ち降雨の徴と知るべし。

積層雲の大なる硯が、東風によりて、東北及び西南方に同時に集合するを見る時は、速刻寒冷の風吹き來るものにて、或は又た雪とも變化するものなり。

亂雲

亂雲は雨雲即ち雨の落つるべき雲の形なり、此の雲は最初積層雲の虚空に廣がりて次第にその量を增すより起る所のものにて、色合も始めは黒又は薄黒なれど、終には一面灰色となる、此時は既に積層雲より亂雲に變じたるものにて、間も無く降り初むべし。

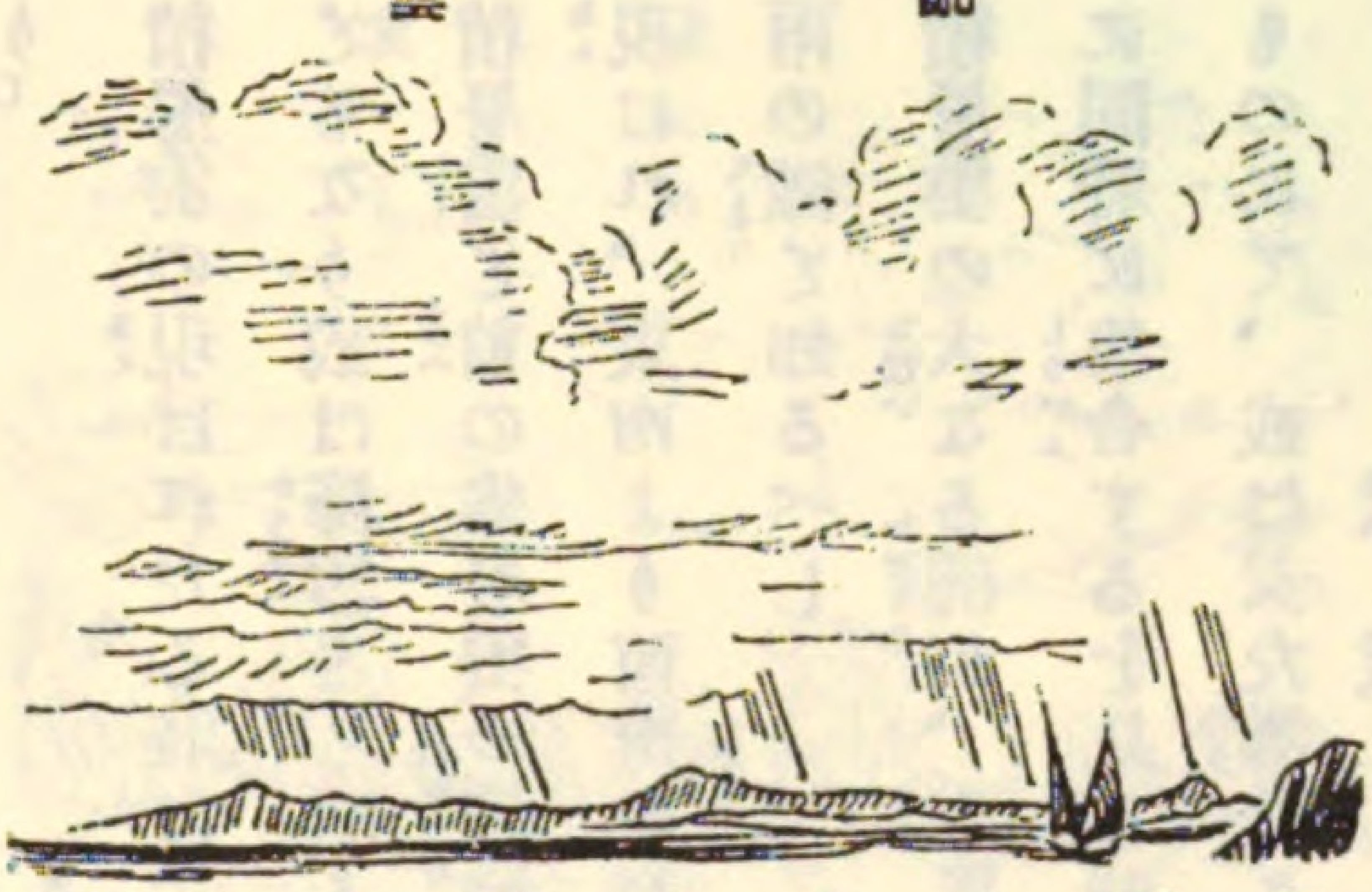
非常なる高所に巻層雲の一片が廣がり、その下に積雲が風の爲に吹き送られて次第に堆高くなり、而して兩者の雲が益々速に數量を增して四方に蔓延し、最後に一個の連綿たる灰色の硯をなして全く天を蔽ふに至る時は、雨沛然として降り注ぐ可し、然れども若し此雲にして分裂する事あれば降雨立ろに止むべし。

以上記載したるもゝの外に、尚諸種の雲相混合して形をなしたるものあれど、此等の雜雲は明かに分類すること能はず。

空中に高く吹き付けられて、漸次に積重る所の雲を見る時は、地上の空氣は如何に靜穩なりと雖、程無く雲の起りたる方より風吹き來るべし。

如何なる方向よりするも日沒に當り西方に黒雲の吹き

積むことあれば、必ず荒き天氣となる。
暗黑したる雲のあらはるゝは、霰の降る徵なり、若しその雲の上に靑き痕點を發見すれば、小粒の霰降れど黃色の痕點ある時は大粒の霰と知るべし。


亂雲

小さき雲が次第に其數を增す時は降雨となる、されど大なる雲が次第にその數を減ずる時は快晴の天氣となる。

空の色暗黑したるは、風の前兆にして、明るく光輝あるは晴天の前表なり。

雲の碎片（浮雲といふ）が大なる雲の下に浮べは風と雨の前兆なれど、若し此浮雲が唯だ獨り空中を駛走する時は風許り吹くべし。

東方の雲が大陽を蔽ふて日光を暗くすることあるも、決して惡しき天氣となるの憂なけれど、日没に當り薄黑の雲が西方に起りて、日光を遮ることあれば、必ずその日の內に降雨あり。

西方に雲の堤を築きて、殊に漸次に濃密となる時は、雨を催す徵候なり。

多くの雲が風の前に破れて、靑空を漏らす時は、晴朗なる天氣に復すべし。

虛空が雲を以て蔽はるとも、その雲若し高くして濃厚ならず且つ空氣靜穩にして晴雨計も高き時は、杞憂をなすに及ばず。

早朝及午前に於て一點の雲さへなく能く晴れ渡りたる空をあらはすといへども、晴雨計が高所を示すにあらざれば、信用は措かれぬものなり。

若し曇天が夜中に急に掃き去らるゝは、必ず善き事にあらず、却つて往々雨天となるものなり。

三　奇　人

四季阿彌

（一）醫師原芸菴（名善材父京都人芸菴來住江戸）

世の野暮醫者は藥を匙で商賣を立てゝゆけば、人參呑んで病氣は愈つても、肝心な身代めちや〳〵になりて明日からは路頭に迷ふもの少からず、身代も痛めず病氣も治すといふ腕なくては、醫は仁術などゝ大きな顔付せられまじ。此芸菴が耆婆扁鵲も持たぬ寶の匙あり、夫れはと問ふに、これなりと大口開いて舌を指しぬ。性來がかゝる男なれば、思ふとは遠慮會釋なく罵り散らし、人を笑はせて笑つて、仙家の妙藥此外にはあるべからずと、常に人に語れり。去れど家貧しくして米薪の代にも事缺くを見て、交を權貴の間に求むべしと勸むる友はありけれども、芸菴坊主頭振廻して『醫經本草などは學びも致しつれ、世智輕薄など申す事誠に不案内、左様なとは眞平御免下されかし』と嘲りて應ぜざりし。

又或時某侯芸菴を召して仰せらるゝやう『吾れ世に勝れたる醫師を求めて扶持せんと思ふなれど、酒屋は酒屋といふ事あれば其方に問ふなり、心當りに然るべきものはなきか』とあるに芸菴席をすゝみ『夫には上手なる醫師の候へど、唯其者は學術共に勝れたるも、性放縱にして酒を嗜み、貴人高家を憚らずして能く罵るの癖の候ふ』と答ふを聞きて、侯は其醫の所在を重ねて問ふに。芸菴自らを指して『其名醫は斯く申す私にて候ふ』といひ出でければ、侯にも思はず失笑せられき。

一富豪あり病に臥して醫を求むる三人、芸菴其一人たり。甲醫病狀を診して大柴胡湯を與へんといふ、乙醫肯ぜずしていふ、不可なり小柴胡湯を與ふべしと、互に固くとつて相爭ふ。芸菴笑つて之を制して曰く、

諸君今大小を爭ふ吾其孰れか理なるを知らず、唯思ふにこれ大柴胡湯にもあらず、小柴胡湯にもあらず、中柴胡湯を用ゆべきのみ。と甲乙兩醫呆然として問ふて曰く、吾等大柴胡湯小柴胡湯あるを知る、未だ中柴胡湯の方劑あるを知らず、乞ふ之を聞かんと。芸菴直に之に應じて曰く、中柴胡湯の方劑の如き、素より尋常庸醫の知るべき所に在らず、今其法を說かん、夫れ中柴胡湯といふは、先づ大柴胡湯をとり、一煎して其滓を去り、再煎して之を服するものなりと、二醫慚愧其奇智に服す。

一婦疾あり、芸菴之を診案して曰く、吾れ今一劑を與ふべし、去れど病婦をして之を服せしめず、夫をして之を服せしむべしと。其夫驚き且つ怪みて其所以を問ふ、芸菴の曰く、子羸弱にして慾事遂げざるに因すればなりと、夫其明察に感ず。

巨家一女あり欝症を病む、芸菴を請じて其診を求む、芸菴來り診して曰く、これ氣滯なり之を治するには宜しく劇場散を用ゆべし、先立役や女形や之を調合して一服とすと。女之を聞きて大に笑ふ、芸菴掌を拍つて曰く、劇場散の功驗既に斯の如しと。これ女が父母偏屈にして世上の人を好まず、妙齡の女をだも物見遊山に出す事なかりしに依つて、芸菴其女が病を獲たる所以となせるなり。父母大に悟り、花に月に芝居に其女を伴ひけるに、病月を踰えずして平愈せりと。

如斯して芸菴が名盛都下を動かすに至る、殊に傷寒の名手と稱せられき。

(一一)伊勢屋八兵衛 俳人號小知江戸人

八兵衛俳諧を以て名を當時に知られたり、神田庵の名今猶不世に傳ひて人の知る處なり、書を三井親和に學び、よく其神を得たり。八兵衛素富家に生れたりしが俳諧の爲めに產を破りて家次第に貧しけれども、更に之れを憂ふるの心なし、常に人に語つていはく「人は

幼な心を失はざるの心懸肝要なり、徒に高妙の理を論じて何の益する處あるや』と。則ち多くの兒童の玩具を求めて之を坐右に積む、風車あり、紙虎あり、藁馬あり、鳩笛、太鼓、獅子、犬張子等累々として机邊に充つ。八兵衛其間に在り吟咏以て自ら樂しむ、知人亦之を知りて贈るに玩具を以てす、八兵衛爲に喜ぶ。一日某公子を訪ふ、公子其貧を知りて贈るに數金を以てす、八兵衛之をうけて家に歸るの途上、走せて玩具屋に至り、悉く賜ふ所の金を以て玩具に換え、餘す所僅に數錢のみ。昔西行法師が鎌倉將軍より金猫を賜はりて、直に之を門外の小童に與へて去りし風流もかくやあるらん。

文化三年江戸大火あり、八兵衛が居宅も亦此災にかゝりき、門人走せ至るに八兵衛既に在らず、門人等互に相語つて曰く『師翁齡高くして猛火のがるゝに途なく不幸燒死せるに在ざるなからんや』と猶八方に人を發して之を搜索す。時に護持院が原の邊罹災の人群をなす内に松下一人の老翁あり身邊悉く玩具を積み、其間に箕坐して何をか案ずるが如し、近いて見るにこれ八兵衛なり。門弟問ふて曰く『師何をかなす』八兵衛從容として答ひて曰く『今俳諧百韻を批し居たるのみ』と更に火あるを知らざるものゝ如し、歿年九十二歳。

(三)賣茶翁月海 肥前蓮池人姓柴山名元昭

翁幼より髮を薙りて佛門に入り、龍山化霖に師事す、化霖は黃檗獨湛の從弟なり。化霖翁を伴ふて黃檗山に至り獨湛に謁す、獨湛偈を作りて翁が才幹を賞す、翁時年二十有二。師に奉待するもの前後十四年、師沒するに及ひて寺門を法弟大潮に讓り、京師に遯れて茶を賣り以て自ら給す。翁常に人に語つて曰く『佛徒の世に處する徒に袈裟の德に誇り、坐食して人の信施を煩すこれ我志に在らざるなり』と。

春は花下輕風を追ふて胡蝶に伴ひ、秋は紅葉林間に逍

遁して麋鹿と相親み、茗具を荷ひ席を提げて賓あるを竢つ、風流の士翁を愛し名づけて賣茶翁といふ。晩年に至りて岡崎に住し、携ふる所の茗具を悉く火に投し偈を作りて曰く『劫火洞然𤁞未燼、青山依舊白雲中』と、これより門を杜ぢ客を謝して世と相忘れ、以て其天年を養ふ、寶暦十三年七月十六日沒す、齡時に八十九。其茶室の壁に題せる詞及狂歌あり。

茶錢は黄金百鎰より半文錢、またはくれずして唯飮むも勝手、たゞよりはまけ申さず。

達摩さへおしで渡る浪花江の
流をくめる老の我身ぞ

孝女千代女

昔封建の世なりし頃肥後の國葦北津奈木の鄕野中村と云ふに藤十郎と呼ばれし貧しき一人の百姓ありけり夫婦の間に娘一人を產けしのみにて男の兒なかりしかは其娘年頃になりしとき某の村より次郎左衛門と云ふものを養ひ子として其娘を娶はせしが一とせ二とせ過ぎて其間に又た娘一人生れ其名を千代と名けぬ其後次郎左衛門は病の床に臥したりしが家固より貧しくて働かで居るさへ心苦しきに物のいるに氣兼して親里に引移り病を養ふ事と爲せり斯くて二とせ許經て妻も病み遂に黄泉の客となりたり其時娘千代は僅かに九歲其父母は六十の上なる齡なりしかば不幸の上の不幸にて一家の悲痛例えんに物なき程なれどさてあるべきにあらざれば村人の扶助によりて泣く〳〵野邊の葬式を終えたり。

斯くて千代女は僅か九歲の娘子なれば父母にあまえ物などねたるべき頃なるに天生の孝心ありて加ふるに家の不運身の不幸はひとしほ物の哀を知りし爲めか祖父に仕えて至孝にて其仕事を扶けて倦むの色なし想ふにかゝる家庭の壁内には春の長閑にして溫かく秋の晴や

かにして一片の輕霧なきか如く温情溢れ愛氣湧き貧窮恐るゝに足らず艱苦意とするに足らず天之れが爲めに感し人之れが爲めに動くべし。

家固より農を業とすれば祖父が田や畠を耕すとて野に出でんとするや千代は農具を其の小さき肩に荷ひて之を送り日漸く暮れんとするや再び野に出でゝ祖父を迎へ農具を荷ひ其の勞を慰さめなとし家に於ては祖母の仕事の助けをなす。

其後年漸く長しては更らに身を勞働に委ね或は自ら田畠を耕し或は他人に傭はれて一日の働によりて賃を得或は山に入りて木の實を拾ひ葛の根や蕨を採りしなどして祖父母に奉し又た自らを養へりき祖父も又た心慈けあるものなれば孫女のまめなる朝夕の勞働をいたはしくや思ひけん或日己れも山に伴はれ其仕事を助けんと云ひ出でたりしか老の躰には何程の助けにもならざれど孝子の心にはその慈け深き心感ぜられ又た其の心に逆ふは反つて宜しからざるを知り殊に天氣晴れて暖き日を選びて伴ひたる事あり又た祖父は馬を飼ひ居りていたく愛して居りしが其馬死たりしかは老心には一入あはれ感せられ力を落す事大方ならずありけれは千代女は如何にもして其心を慰めばやと思ひ糸を績く業や裁縫の事や其外晝夜手仕事心を懸け僅かづゝの錢を蓄へしか積れる塵の如く遂に馬を購ひ得て祖父の心を慰め得たり。

又た其後年凶にして五穀豐かならざる事ありしかば葦北全郡飢饉となり藩爲めに倉廩を開きて飢民を恤ひしが固より一人前幾何か高を定めたりき其一人前とても粥にして漸く其飢を醫する程なれば千代女は其施米を祖父母に奉け自らは葛の根木の實に飢を醫し居れり

父孫左エ門の親里も貧しくて別に扶くに人もなき故千代女の助を抑ぐ事となりたれば愈々困難加はりたれば人之に身を他人に仕え其賃を以て祖父母奉養の料に充

つべきを勸めたりしかど千代は祖父母既に老躰にして朝夕の介抱己れの外人なき事なれば如何で心安からんとて之を辭し益々身を勞働に委して其の疲勞を厭はず祖父母に對しては愈々順なり。

天は高くして感なしと雖もなどてかゝる孝婦を憫まざらん事は遠く熊本にある藩廳に聞え藩吏は之を君主に白し毎年米若干俵を賜ふの恩命あり茲に於て千代は益々孝心を深くし祖父母に朝夕の介抱を厚くしまた自ら負ふて寺院に詣るづるなどし其老を慰めしとぞ。

小說家「僕の近作を御讀みでしたか
女友「拜見致しました
小說家「どうでしたか
女友「面白うございました、御本を投け出すほどに



文藝

失脚

湖處子

修學旅行、探險旅行、今や凡一般學生の間に成さんとするに當りて、予が米人譚中より此の一篇をものせるは、一は之を以て靑年旅行家の參考に供し、一は之を以て聊かわが日の本族の膽力、聊か佗の文明を誇稱する所のヤンキー族等と異るとを誇らんがためなり。

マスクゴン、ベントテータル間に鐵道の開通せらるゝに至りし頃までは其線路にあたれるミシガン湖畔の地方は人家も稀に、立騰る炊烟の數も少なく、誠に荒涼落莫たる有樣であつた。

頃は八月某日午前十一時の事である。列車はモンタキューの停車場を發して北に走ると五六哩、則ち鋸輪機

關會社の前に至りて不意に其進行を停めた。車掌の報告するところによれば、俄かに機關の一部に歪違が來たので急に修復せねばならぬ、それには少くとも一時間半か二時間の猶豫を要するとのことである。そこで乘客の大半は各々客室を下りて、思ひ〳〵に散歩を始じめた。

數多き乘客の中に、シユニアスハー井ツトとて年歯は三十前後の識もあり才もある學校の敎員があつた。此度ペントヲータルの舊友より招かれたるを幸ひ、休假中の閑日月を日頃嗜めた釣と獵とに樂まむと仕度も匆々家を飛び出したのであるが、片時も早く彼地にと旅を急く心より、滊車の歩みさへ待遠く思つて居た彼にとりては、この二時間の猶豫は實に千秋の心地である。

彼は大に心をヂラして滊車を飛び下りたが、固よりこのあたりは土地柄見るべき處もなければ獨り群を離れて彼は森の中に分け入つた。

森の入口に花が咲いて居る、名は知らねど萬綠叢中に見るが珍らしく、ゆかしく、足を止めて思はず見わぐる梢に憎くや人ありとも知らず顏に一羽の鳥が頻りに花を啄て居る。彼は直ちに用意の小銃を差し向けた。鳥はそれと氣付いてか、バタ〳〵と羽音高く他の樹に飛び轉つた。其翼が梢に觸れて枝頭の花はら〳〵と散りこぼれた。彼はそれに眼もくれず、鳥の後を追ふていつた。鳥はまた逃げる、また追ふ、逃げる、追ふ、彼は遂に疲れた、鳥は嗤ける樣な一聲を殘して行方も知れず飛び去つて仕舞た。此時ふと思ひ出した樣に彼は後の方を顧みたが、鋸輪機關社の烟突は既に見えなかつた。餘程深入したらしい。あたりは森として眞夜中の樣である。彼はぢつと耳を傾けたが鋸輪車の音は聞えない。彼は時計を出して見た、そして午後には車がその運轉を休むといふことを思ひ出して自から慰

めた。彼は足を轉じた。
彼は來時の道を更に記臆して居ない。しかし斯うして辿り行くうちにはよし鋸輪機關會社の前とはゆかぬ迄も線路には必ず出るに相違ないと心に恃んで足を早めた。倒れたる大木、叢をなしたる荊棘、其他種々の障害物に折々行手を遮られては其度毎に道を轉せねばならぬので、眞直にはなか〳〵進むことが出來ぬ。
彼は道を急ぎながらもなほ獲物やあると眼は絶えず四方に配つていたが、森の中に幽々寂々で宛然死んで居るかのやうに思はれる。
斯くて彼は十分間を急いだ、二十分間を走つた、三十分四十分行けども行けども森は益々木深くなるばかりである。
彼は今しも倒れたる木の上に突立つた。そしてもしや隱道はなきかと八方を視索たが無い。森は厭まで一樣で沈靜で、唯騷ぐものは彼の心ばかりである。

が、彼は決して失望はしなかつた。失望する道理がないのだ。彼は學校の敎師である。ミシガンの地理は圖によつて諳んじて居る、彼は線路は東に方つていて此處からはそう遠くないとも知つて居る。西のかた五六里以内にミシガン湖のあるとも知つて居る。七八里南に行けばある殖民に達するとも知つて居る。其他此處より二三里にして一條の流があつて線路を横きつて湖に通して居ることも、北に行けば線路にも殖民地にも出ぬかはり、更に十二里可を進めばある部落に達することも精しく知つて居るのだ。
さりながら何方が東であるか、西であるか、南であるか、北であるか、雲深き空は更に方角を示さない、樵夫や獵男には道案内ともなるべき草や木も彼にとりては何の意味もないものである。
とは云へ彼は一定の方向をとつた、それが果して目的の地を指して居るか否かそれは判明らぬが彼はそう信

じた。機關會社は確かに其方角にあたつて居ると信じた。信じたから進んで行つた。側目も觸ずに。

間もなく彼はだら〳〵下りの坂道にかゝつた、坂の中腹を貫いて一道の小川か流れて居る、彼は足を止めて小首を傾けた。ハテ來る時にはこんな坂は上らなかつたが。

さては愈々路に迷ふたのだなと思ふ彼の心は益々波立つて來た。彼は急に踏み違へた道筋を思ひ辿らんと試みたが唯徒らに腦を攪き亂すばかりであつた。

此時夢の如く遠く微かに氣笛の音が森をかすめて聞えた。彼は其音したるかたを心あてとして只走りに走つた。

暫くして彼は更に明かに物の音を聞いた。それは午後の就業時間を報ずる會社の鐘の音である、彼は息の續かん限り其方に筈走いだ。

彼は再び一ツの流に出會つた、渡るには深し、飛ぶには廣し、淺みを見出すまでは是非この流れについて下らねばならぬ。

彼は水を掬ひて渇きを愈し、熱したる顔を冷し、よく氣を靜めて後方向を定めんと、達磨然とは坐つたものゝ、心緒亂れて兎角の思案も出です、次第に嵩まる恐怖の念のみ前め前めと彼を促がすはかりである。

とかくするうち森の中は次第に暗くなつて來る、彼は七時の晩餐を報ずる會社の鐘今か聞ゆると耳を傾けたが無益であつた。

黄昏のうちをさすらううち彼はまたもや小河の涯に出たが此時彼は饑と疲れとに氣根も盡きて早や一歩も歩けず、恐ろしくはあれどこゝに一夜を明さんと决心した。

この奧深き森の中にこの闇き夜を一人で寐らねばならぬとかと思へば心細きと譬へん方なく、物識だけに乘て讀もし聞もして居た猛獸怪靈一時に其相を現じて來

る。彼は急に兜衣より早附木を探り出して火を點じ、松の小枝を折り敷き、其上より大枝を蔽ひかけて其中にもぐり込んだが、闇きを照す星さへなきのみか、雲の空を葉越しにも見せぬ程大樹小樹頭上に枝を交へて居るので、暗さは暗し、あたりは閴として一葉もそよがず、心は次第に沈み身は九地の底に葬られしかと思ふばかりの寂しさに堪らず、またゴソ／＼とそこを這ひ出で丶、流れの涯、木立疎らなる處に床を轉したが饑と恐れとに血は益々逆上し、腦は益々冴えてトロリともせず、せめて何か食つたら逆上も下り、妄想も少しは消えて、寐むとも出來やうがさて何を以てこの饑を愈すべきか、勿論この森の中には食物は無いではない、充分にある。第一彼は兎を見た、小鳥を見た、其他彼が行く道の前後に隱見出沒した小獸は舉げて數ふべからざる程であつたが、擊ちとめたものは一つもなかつた。

此川には必定魚が棲んで居るに相違ない、彼はふと思ひついて用意の蚊針を流れに投じ今か／＼かと獲物を待てども糸を牽く氣はひもしないので、此度は朽木より昆虫をほぢり出し餌を代へて再び流に投じ、やうやうの思にて二足の魚を獲た。

彼が之によりて睡ることを得たのは少時の間で、覺めて見れば夜は益々暗く、何時の間に降りだしたか、盆を覆す大雨に着物はづぶ濡れにぬれ、五體冷却つて寒さは身も慄ふばかりなるに、風吹き起りて其聲忽ち遠く忽ち近く、沖の小島に寄せては返す大濤小波の音かと思はれる。

彼は闇黑の中を這ひつ丶辛うじて雨を凌ぐべき老松の蔭を探りあて、躰温を回復せん爲に顛けつ轉ひつして其周圍を環つた。兎角するうちに早や夜明近くなる、大氣は益々冷え渡る、饑と寒さはひし／＼と身に迫る之が爲め彼は口も利けぬやうになつた、歩くとも出來

ぬ樣になつた。
彼は今一度魚を獲んと試みたが、暫時の雨に川はいたく水嵩增し、浪高く、流れ急になりたるためか、魚は更に餌を嚙まない、詮方がないから善くないとは知りながら、彼は草の葉、松の脂を食つたが。其の報は的面で、初めこそ幾分か精氣も回復した樣に覺えたが、やがて胸燒け腹は俄に痛み出した。
かゝる苦しみのうちにも、彼の心は如何かして一刻も早くこの森の中を出たいと、絶えずそれ一方に走しつて居た。太陽は實に彼の道案内と云つてもいゝ。彼が志さす方は東である。それで太陽にさへ向かつて行けば決して方向を誤まる樣なとは萬々ない理である。
太陽は登つた。紅の光線は鮮血の如く黑雲の間より迸り出でゝ餘殘の露を照らす。然るにこの大陽は實に西北の方より出づるのである。心既に錯亂せる彼はこゝに思ひ及ぶことは出來なかつた。彼は其方に足を進めた。
此時彼は既に腰も拔け力も盡きて唯蹣跚と吹けば飛ばんばかりのさまで一町ばかりも歩いたと思ふ頃、また一條の流れに出た。これ迄來ても更に線路に出る樣子が見えぬ位なら寧ろこの川に沿ふて湖に出た方が得策ではないか。然り彼は確かにそれを得策なりと認めて道を轉じた。腹は益々痛み、神經は愈々疲れて、彼は放心したる人の如く道を歩いた。
ふと頭を擧げて見れば我はいつしか木の切株に身をなげかけて居る、流は何處に行きしか影だに見えない。かくふら／＼と夢の如く森の中を漂ふうち、彼は一つの小沼に出た、沼の少し彼方に凸處があつて其頃に小松、山毛、枝を交えて雜生して居る。其中より突然太鼓の音が起つた。我より外には人ありとは夢にも思はなかつた森の中に太鼓の音とは如何にも怪しいと聽けば聽ほど太鼓の音に相違ない。一躰何物の所爲であら

ふ。もしや狐狸の業ではあるまいかと思へば怖くなる怖いものは見たしで其中が覗きたくなる。彼は忍び足に近よりて葉越しに中を透して見た。

太皷は忽ち鳴りを停めた。暫くありてまた打ち始じめた。初めは急に次第に緩に。

鼓者は誰ぞ。人でもなければ狐でも狸でもない、鳥だ丁度矮鶏大さもあらうか、斑點ある翼で古木の株を頻りに敲いて居る。珍らしくもあり、可笑しくもあり。

彼は饑も疲も忘れて少焉之をながめていたが、ふと思ひ出して小銃を取り上げ狙を定めた、鳥は急に身を轉し飛び去らんと擬する。其機を外さずドンと一發火蓋をきる、漲きる硝煙、風を切る羽音。さては仕損したか、失望、々々、彼は後に身を倒して晞噓をはじみた日は將に暮れんとすれど、彼は敢て起うともしなかつた。

折しも彼は此方に近つき來たる重き足音を聞きつけ、愕然として身を起し、音する方に眼をすへ、待間程なく一群茂き樹立の中より悠然として現はれ出でたる牝牛。人ありと見て、さも滿足げにこなたをながめつ足を止めた。これ屈强と彼はなれ／＼しく牛の側に這ひよつた。牝牛は怪訝な顔をしたが、而も厭まで寛大で柔順で、寧ろ彼を待ち設けて居る樣に見える。彼は小牛の如く匍匐ひて、大く垂れたる乳房を啣へて、滿腹含んで牛を放ち去らしめた。

ア、この牛の後にさへ從いていつたら持主の家に行くのであつたにと、ふと彼が思ひついた時は早や牛の姿は見えなかつた。彼は急に其足痕をつけ行かんとは思ひしが、日暮れ、木の下道たど／＼しきに、それも協はず。是非なく其處に露宿して明日を待つことゝ定めた。

其夜彼は恰も死人の如く一夜を通して前後不覺に眠つた。目覺し時、太陽は既に高く上つてさながら彼を待

て居たかの様に、雲間よりさやかなる光を投げて居る彼は朝日を葉越に望みつゝとぼ／＼と歩き出した。

僅か二日ばかりの漂泊に彼の姿は見かゆるばかりに憔悴れ果てた。衣は泥土に塗れ、且つ綻び、顔、手、脛は荆棘に掻むしられてところ／＼に血走り、靴は何處で脱失したのか、露出しの足先よりは夥しく鮮血が流れて居る。

體は屈み、筋節攣りて彼は宛がら病兒の如し、少許のものにも躓づき倒れ、倒れてはまた恐怖の念に驅りたてられ、氣を勵まして足を進めたが、我は抑々幾程を歩ひたか、途で何に出會たか、それらは一切夢中で、唯我は太陽に向て進んで居るといふとのみ心に意識して居た。

午後にいたりて彼はすさまじい叫聲に驚かされた。忽ちにして森の魔神等、何處ともなく彼の周圍にどや々々と集ひ來り、突然彼を强攫らつて邪道の方へ連れ行かうとする。彼は殆んど狂氣の如く、悶き叫び死を以て爭つたが力及ばず、遂に悶絶してしまつた。

正氣ついてふと眼を開けば、己れは柔かき布團の上に橫はつていて、枕邊にはベントチータルの友が坐つて居る。

彼の友は當日わざ／＼停車塲まで彼を、出迎に行つたが、汽車は着いても彼の姿が見えないので、大に氣を揉み、色々に問ひ合せた末、友は彼が鋸輪機關會社前の森に分入つたといふ事をたしかめた。さてそれより一日を過ぎ、二日目となつても、彼より何の通信もないので、友は會社に行き、職工の手をかりて森の中を索捜し彼が流の涯に橫はつて居るのを見出して家に連れ歸つたのである。

さて後になつて考て見れば、誠に御苦勞千萬な話で森はそんなに廣くもない森の中を彼は汗血沫泥になつて二三遍ぐる／＼と駈け還ぐつたのた。アハヽヽと口を

開いて笑つて仕舞へばそれまでなれど、實地の地理に暗いものには斯ういふ間違は得てありうちで獨りハーウッド先生に限つた事ではあるまいと僕は思ふ。

秋の蝶

桐廼舍桂子

筒井つゝの昔も今も、男の心としいへは秋の空の、たのもしけなきものに、たくへつるぞうたてき、庭の敎をふみもならはぬ人は、あけつらうまてもあらねはそはおきて、おほかたの男ちふ男の心は、世のうきふしのしげかる折も、いさゝむら竹立騷く事もなくして、すくよかなるものなるを、女のひかみたる心より、とにも怨かくにもかなしみ、葉末を賴む露の身のつひに置處なき心地せられて、いたつらに消ぬるもあなるぞいと〳〵口をしき限りになむ、されは女の心こそなか〳〵にむつかしと、男はいふめれ、此處も憂世の秋ながら、染井の里の菊見んと、日毎につどふ諸人の、袂もあやに匂へるをあはれ、ゆかしと見しやいなや、十あまりなる男の子、ア、今日學校で蝶チヤンが貴郎の處の菊が咲いたら、束髮へ挿から一ッおくれつて、いつたつけ採て遣ふと、破垣のうちへ駈込で、おのかまに〳〵咲みたれたる、菊を見つゝア、何れがよかろう赤にしやうか白にしやうか黃色のか、蝶チヤンは何れか氣に入だろう、聞ておけばよかつたけ、いゝや蝶チヤンは十二でもおほきいから、白と極やうと獨吟つゝ白菊を折んとする時、是も十一二の女の子隣家の窓から首を出して、菊雄チヤン何を爲て居るの、ヲヤ菊をとるのいゝ花だ事ねへ、妾にお呉な、菊「ソレダツテ蝶チヤンに約束だもの　秋「ソゥ其樣ならいゝよ何時でもお蝶サンとばかり中能して、妾には菊も呉ないねへどうせ、お蝶サンは良家の子で美服を着て居るんだもの、妾なんざァかなやあしない、今にお蝶サンをお嫁

に御貰ひなさいよ、菊「秋チヤン其樣な事をいつちやァ可厭だよ、御嫁なんて大嫌ひだそして蝶チヤントそんなに中よし、ちやァないよ此菊もお汝にあげるから、學校へ行てそんな事、皆んなに話しチヤァ可厭だよいゝかひ、乾度だよ　秋「ァ、いはないから是から彼樣な意地悪とお遊ひでないよ、そしてけふは御母さんか留守で淋ひから、あたしの宅てお遊ひな柿や栗もあるから　菊「上つてもいゝかひ能とも〳〵と、二人は忽解て遊で居る垣根の外から、菊さん御樂といはれ　秋「ヲヤ誰か來たよと振向とたん、アらお蝶さんがと聞て菊雄はきまりあしげに　菊「蝶チヤン來たの　蝶「御邪摩さま妾菊を持て來てくれるかと思て、いくら待て居ても來ないから見に來たら、妾の約束なんか忘れて仕舞ふ筈さ、御夫婦て遊て居るんだもの、明日學校へ行て先生に言告てよ御目出たう、澤山御遊ひなさいよと、お秋を一寸後眼に見て歸りかゝるを、菊雄は狼狽ておしとゝめ、蝶チヤン御待よ困るナァ二人りで同樣事をいつて、そんな事を先生にいつけると僕は叱れるし、蝶チヤンと遊へば秋チヤンに怒られるし、詮方がないナァと、果はシク〳〵泣出したので流石の二人も、氣の毒になりしか右左から、菊チヤンお泣でないよう、今のは僞言なのよ御免よ、アレ御覽な菊の花へ蝶々か二ッ來て、面白さうに遊て居るからあたしたちも中よくしやうと、やさしくいへどお蝶お秋の、心の中はいかならん、菊雄は無邪氣に機嫌を直し、莞爾と打笑なから鳴呼女は可厭だ、種々な事を云て人を困らせたり驚かしたり。

實に六ケ敷は女心か

　露の間の命と知らで秋の蝶

　　いつれか菊に千代や契れる

童兒の星の夢

ディッケンズ作
國木田哲夫譯

曾て一人の童ありけり、彼處此處と徘徊して樣々の事を思ひぬ。此童に一人の姉ありて、これも亦た稚く、童が何時の侶なりける。二人は終日、逍遙ひて暮らすを慣とはなしぬ。二人は百花の美しき裡を徘徊し、大空の高くして碧なるを徘徊し、輝ける水の深きを徘徊し、此愛らしき世界を造り玉ひし神の善と力との裡を徘徊せり。

二人は常に言ひかはして曰く、地の上の童等すべて死失せなば、花や、水や、大空や、定めて悲しき事に思ふなるべしと。斯くて二人はかく信じ居たり。蓋し二人は惟へらく、蕾は花の兒、丘の傍を流れ落つる清水は水の兒なりと。又た終夜、大空にてかくれんぼする彼のいとも小さき光は必ず星の兒ならざる可からずと、されば彼等、花や、水や、大空の星や、若し人の兒すべて死去せなば、己等の兒の遊仲間なきを見て悲しむなるべしと。

こゝに一個の能く輝る星ありて、人々の床に就く前、大空に現はれ、寺院の塔に近く、墓地の上にて輝くを夜々の常とせり。二人の姉弟は惟へらく、此星は他の星よりも大に、他の星よりも美しと、されば二人は毎夜、窓に倚り手と手と互にくみて、此星を眺めぬ。先づこの星を見つけし者は、『私が星を見ました』と叫びたり。二人は此星の現はるゝ時間と現はるゝ場處とを能く知りしかば、二人同じ時に見つけて、二人諸共斯く叫ぶ事も度々なりき。斯くて姉弟は何時しか此星と親しき友となり、二人が床に就く前には必ず此星に挨拶せんとて再び窓に倚るに至りぬ。さて愈々眠らんとて頭を回らす時、二人は常に言へり、『神樣に御めぐみ星の上にあれ』と。

然るに姉は猶ほ稚きに病に罹りてもはや夜、窓に倚る事能はざるまでに衰へたり。されば童は悲しげに一人外を眺めて、星を見つけし時は床の上なる蒼白き顔の方に振り向き、『私が星を見つけました』と言へり、然る時、姉はほゝゑみつ、いともかすかなる聲にて『神様の御めぐみ、わらはが弟と星との上にあれ』と言ふを常とせり。

忽ちにして床の上には最早蒼白き顔無く、以前は見當らざりし小き墓、墓の間に立ち、童のみ一人、星を眺むるに至りぬ。童は眼に涙をふくめて星を眺めしかば星は童の方に長き光線を曳きたり。

さて此長き光線美しく輝き、あたかも地より天に至るべき光の道とも見えしかば、童は其淋しき床に入るや、星につきて次の如き夢を見たり。さて其夢に、童何處ともなく横はりて在りしに、人々の一群、天使達に連れられて光る道を上りゆけり、星は開けて光にあふるゝ大なる世界となり、其處には天使達群り住みて、今上り來る人々を待ちたり。

此等の天使達は、一齊に其輝く眼を轉じて今、星の世界に上り來る人々を見たり。光の裡に立ちし此等の天使の中、或天使は走り出でゝ、今上り來りし人々の頸を抱き、優しくこれに接吻せり、然る後、人々を伴ふて光の宮へと去りゆきぬ、其樣の如何にも幸福に見えしかば、童は床の上にて嬉れし泣に泣きたり。

されど、天使の中には、人々を伴ふて光の宮に立ち去らざりし者も多かり、其天使の一人を童は知れり。嘗て床の上にありて蒼白かりし顔、今や輝き渡りぬ、童は早くも其の姉上なることを知りたり。姉なる天使は星の世界の門近く進み出で、人々を此處に伴ひし天使の長に問へり、——

『わらはの弟は來たりしか。』

長は答へぬ。『否。』

姉の天使は彼方に立ち去りぬ、これを見て童は其手を擴げて叫びけるは、『姉上、姉上、私は此處に居ます、私を伴ひ玉へ！。』其時、姉なる天使は童の上に輝ける眼を向けたり。これ夜半の事なりき、星の光、童の室に射し込み、童の眼には涙あふれしかば、星は童の方に光の長き線を引きたり。

これより以後は、童、時來らば我がゆく可き處は彼處なりと思ひなして星を眺め、又た惟へらく、吾は地にのみ屬する者ならで、星の世界にも屬する者なり、何となれば我姉既に彼處にいませば也と。

其後、童の弟に一人の赤児生れしが、未だ物の言ひ得ぬ中に死去せたり。

斯くて童は又、星の世界を夢みぬ、天使達に連れられし人々、これを待ち受くる天使の群、凡て前の夢の如し。

姉なる天使、人々を伴ふ天使の長に問ふて曰く、――

『わらはが弟は來たりしか。』

長は答へて曰く、『弟は來らず、他の者來ませり。』

斯くて姉なる天使の手に赤児の抱かれしを見て、童は叫びぬ、『姉上、姉上、私は此處にいます、私を連れ玉へ。』姉は此方を振り向きてほゝゑみぬ、星の光、童の室に射し込み居たり。

童は何時しか、青年となりて、其學文にいそがしくなりぬ、一日、老ひたる下男、來りて曰ひけるは、――

『郎君の母上、みまかり玉ひぬ。奴、これを御知らせに參り候。』

斯くて青年は又、星の世界を夢みぬ。其樣すべて以前の夢の如し。姉なる天使は又た問て曰く、――

『わらはの弟は來たりしか。』

長は答へて曰く、『母御來り玉へり。』

星の世界は歡喜の聲にて滿されぬ、そは母來りて二人の小供と一處になりたれば也。これを見て、青年、其

手を擴げ叫びて曰く、『母様、姉上、弟よ、私は此處に居ます、私を連れ玉へ』と。人々答へて曰く、『まだいけません。』星の光、青年の室に射し込み居たり。

青年は何時しか、中年の人となり、其髪は灰色に變じぬ。深き悲に沈みて煖爐の傍なる椅子に倚りつ、其顔は涙の露に濕へり。斯くて星の世界を夢みぬ。

姉なる天使は長に問ふて曰く、――

『わらはの弟は來たりしか。』

長は答へて曰く、『否、彼人の娘御、來れり。』

曾て童なりし此人は、今新たに死せし娘が、人々に迎へられて美しき樣と變はれるを見、『わが娘の頭はわが姉の胸に倚り、其手はわが母上の頸を抱き、其足下には昔の赤兒あり。斯ては吾、わが娘と別れしと悲まざるべし、神は賛むべきかな。』

星は輝き居たり。

斯く昔の童は老人と變じ、曾てなめらかなりし顔には皺刻まれ、其背は弓となれり、或夜、老人は其床に臥しつゝ、其兒等、これを取圍めて立てり。老人は曾て其昔、童の時に叫びしが如くに叫びて曰く、――

『私は星を見つけました！』

人々互にさゝやきて曰く、『最早や死も眞近なり。』

老人曰ひけるは『げに然り。余が齢は衣の如くにわれより滑り落ちて、われ小兒の如く成り星の世界に移るなり。アヽ天の父よ、今君に感謝す、今日まで屢ゝ星の世界を開き玉ふてわが愛する人々を迎へ玉ひしことを。』

星は輝き居たり。而して今や此人の墓上に輝けり。

（完）

里　秋　風

茂川千種子

待わひし秋の最中の月影見てしより後は、とにかくに雨のみふりつゝきていとゝ、衣手のうら淋しうおほえ

しか、ひと日めつらに空の晴れわたりたるを、いたつらにいたつらにやはとて、すだのわたりにものしつるに、川浪は底に沈みてや流るゝ音の靜なるを聞つゝ、色つきそめし秋の田の面を見渡せは、世はゆたかなるまるしならむ、稻の穗は重けに伏して、荒浪のよするかとうたかはるそか中に、案山子のおいらかに立る影もをかし、遠近の畔にはうなゐらか、あらそひかほに蝗をおひありくさま、實におもしろき事にこそあれ、今しも人なき方に、旅の翅を休めんとて落ゐる、雁の一とむらは誰か玉章をかけて來ぬらん、なとおのか心の空に通はねは知るよしなし、そゝろにはかなき事を忍びつゝ、猶行〳〵てとある花園に入りぬ、こはゆくりなき心地せられぬ、我嬉しさもほに出し、尾花を始め女郎花大和撫子など、種々の花の今を盛りと匂ひ出たるに、葛の葉のうらみ貌なるまた哀れに見ゆ、げに秋の錦とうたはるゝもむべなり、まして奥には眞萩白はきの物思はしけなる姿には、いくばくの秋のあはれやこもるらむ、をそましき身には眺むるも、おもはゆくおぼえてそよと吹、秋風も心にまみぬるそ、かなしきや、

七種の花のにしきをきつゝ見ん
露けき秋をわひはつる身は

世の人の露けき袖にふれんとて
にほふかあきの大和なでしこ

花の香はよそにちらしてくずの葉の
うらふく秋の風ぞ身にしむ

小兒の世界

英國海權の礎

（一）ジャーヴィス提督

蘭溪

英國のネルソンとし云へば世界の人殆んど其の名を知

らざるはなし、特りジャーヴィスの名に到つては、世上之れを知るもの甚だ稀れなり。之れ豈にネルソンの英國海軍に於ける偉勳赫々たるもののあるに比して、ジャーヴ井スの功名之れに若かさるあるが為めか。然れどもネルソンをして海軍に大伎倆を揮はしめ、大功勳を樹てしめ、英國をして武威を四海に發揚せしめ、終に現世紀に於て世界の海上王として雄風四隣を壓するに至らしめたる大偉人―ネルソンをして眞個の大偉人たらしめたる所以のものは、全くジャーヴィス其人の訓練、宜きを得たるに由らずんばあらず。天下知名の英雄の事業の中には、必ず幾多無名の英雄の事業を包含す、天下の勇兵猛卒を見ば、併せて之を統率する大將の人物を見よ、子弟の善美なる氣風品行を見ば、併せて其師友の如何を顧みよ、吾人が今此にジャーヴィスの人物を諸君に紹介せんとする所以のものも其意蓋し此に外ならざるなり。


ジャーピス提督

千八百九十五年即ちツラファルガル大海戰の前十年、歐洲の舞臺に顯れ出てたる二個の大人物あり、一は佛のナポレオンにして他は則ち英のジャーヴィス其人なり。前者は正さに佛の大軍統督の命を受け、以て以太利を征し、後者は恰かも英國地中海艦隊の司令長官となり、以て海權保護の大任に當れり。

ジャーヴィスは千七百三十四年英國に生る。家貧なりしを以て、幼少より種々の艱難を經、様々の辛苦を嘗めたれば、其間に知らず／＼克己耐忍の氣力を養ひ、固く義務を守り、嚴に職分を重んずるの性格を錬りたり從て將來身を軍籍に置くの日に當りても、其士卒を統御する極めて峻嚴、苟くも假借する所なく、一たび自ら決する所あらば其動かざると磐石の如く、斷乎とし

て自己の信ずる所を勵行し、部下の士卒をして飽くまで其命令に服せしめ、苟くも違背する如きとあらば、容赦なく責罰し、往々嚴酷に過ぐるの觀なきにあらず之れ公務の上に於ける氏の擧動なりき。然れども其の平素私行の上に於ては、温雅にして人を容れ、時としては温雅に過ぐるとなきにあらず。要するに彼れはネルソンの如く愛を以て部下を率ゆるにあらずして威を以て士卒を服せしめたるなり。

彼れは此の如きの性行を以て英國地中海艦隊に司令長官となれり。

彼は其統督せる艦隊をして他の艦隊の摸範たらしめんとを期せり、而して遂に其期圖を成就せり。彼れは其部下に良艦長を有せり而してネルソンは實に其一人なりき。然れども彼が其艦隊をして豫期の如く、他艦隊の摸範たらしむるまでには、幾多の大困難を經驗せり。而して其大困難中の最大困難なるセントビンセントの大海戰に於て、始めて克く自己の志望を成就するを得たりき。之れが爲めに從來英國艦隊が一朝事あるの日に於て、克く他の艦隊に當り得べきや否やの大疑問を解釋し得たるに止まらず、更らに一歩を進めて、英國艦隊をして眼中敵なしとの自重自信の念をも發揮せしめ、世界をして英國艦隊の名を聞て震慴せしむるに到るの礎を定めたり、其功豈に偉ならずや。

（二）セントビンセントの海戰

此時に當り、地中海に於ける英國の位地如何と云ふにナポレオンは、一歳ならずして、三萬六千の寡兵を以て能く六萬の澳太利軍を驅逐し、其威風既に以太利全半島を壓し、餘勢の及ぶ所漸く地中海に於ける英國の勢力を凌がんとし、之が爲めに英國地中海艦隊は當時の根據地たるコルシカ島を撤去せざるを得ざるに到り加ふるに、西班牙は英國に向つて益敵意を挾み、佛國と同盟して大に英國に當らんとするの兆候を示せり。

況んや西班牙の海軍は當時歐洲最强の位地を占め、軍艦の數五十隻を超えんとせるに、顧みてジャーヴィス提督の率ゆる英國地中海艦隊を見れば、僅かに二十二隻の軍艦を有するに過ぎず、而かも其中七隻は提督マンの手に屬し、本艦隊を離れて遠く一千哩の外なるカーヂスの港に在りしが、卑怯にも自國の海軍の到底西班牙海軍に敵する能はざるを臆測し、逸早く本國に向て歸航するに到れり。是に於てジャーヴィス提督の統督する地中海艦隊は、殆んど累卵の危きに在り。英本國政府も其艦隊を全く地中海より引揚げしむべきや否や、之れを決するに苦みたる程なりき。されど剛膽不屈なるジャーヴィス、いかでか之れに向て一歩を讓るべき、毅然として心潛かに西班牙艦隊を擊破して、英國艦隊の權威を地中海上に立てんと決したりき、當時ネルソンの如きは本國政府の躊躇するを見て憤激して曰はく、『之れ實に英國の尊嚴を失墜するものなり、英國海軍は優に以て世界に當るに足るの實力を有するこを知らざるか、予や遍ねく各國の艦隊を歷覽するに、サー、ジョン、ジャーヴヰス閣下が率ゆる如く將校兵士忠勇にして能く輯睦せるものあるを見ず、現司令官は必ず吾人を功名に導かん』と。

時維れ西歷一千八百九十七年二月十四日午前第五時英國艦隊地中海を出で丶、方さに葡萄牙の南端セント、ビンセント岬の冲に在り、濃霧太西海上を蔽ひ、迷濛咫尺を辨ぜず。忽ち一隻の葡萄牙軍艦あり、疾走して來りて英國艦隊に告げて曰はく、『西班牙艦隊今十二哩の外に在り、將さに來りて貴艦隊を襲はんとす』と、戰鬪準備の信號鐘は忽ち甲板より甲板へと響き渡りぬ物凄き沈默は瞬時にして破れ、物をも言はず疾走して各其持場に就き、又は彈丸硝藥を運こぶ忙はがしき響は起りぬ、此時英國軍艦總數十五隻、旗艦はヴイクトリヤ號(當時の軍艦は帆前船なり)にて、ジャーヴィス提

督司令長官として之れに乘じ、チルソンは艦長としてキァプテン號に在り。午前六時三十分天既に明け、濃霧亦漸く散ず、と見れば二十七隻西班牙の艦隊、威儀整然として西南海上に顯はれ、其勢既に英國艦隊に迫れり、旗艦はサンチシマ、ツリニダッド號と稱し、提督ランガラ之れが司令長官たり。是に於て英國艦隊司令長官ジャーヴィス提督は直ちに令を傳へ、陣形を變じて一列となし、西班牙艦隊の風波漸やく荒らきが爲め分れて二分隊となり、隊形亦少しく動搖せんとするの色あるに乘じ、猛然疾驅して其中間に闖入し、敵艦をして協同の運動を爲す能はざらしめ、且各艦に號令して一齊に發砲せしめたり、此際に於ける英艦隊の運動の機敏にして操縱の自在なる、風波の荒きにも拘らず、毫も隊形を亂すとなく、優勢なる敵の艦隊を見て、更らに畏怖する所なく、整々堂々として進撃せし手際は實に一世の耳目を聳動するに足るものあり、殿整なる平素の訓練茲に其効力を顯はし、靄然たる上下の一致茲に其實を示し、平素嚴烈に過ぐるジャーヴィス提督も自から賞賛して措く能はざりしと云ふ。西班牙艦隊は此勢を見て忽ち避易し、既に開戰第一着に英艦隊の分裂する所となり、各隊互に首尾相應ずる能はず、少しく狼狽の色を顯はし、二三の軍艦の如きは自國に向つて脫走を企つるに到れり、此時既に午後一時に及びぬ、チルソンは殿艦より第三番目に在りしが、西班牙艦隊の一分隊英艦隊の背後を廻りて、他の一分隊と合せんとするを見、兩隊合併せば大事或は去らんとを慮かり、旗艦の遠くして之れを察する能はざるにより、斷然其號令に違反し、他のエキセレント號ブレンハイム號と共に奮然挺進して、西班牙分隊の前を塞ぎ、奮戰して其勢を挫き、直ちに敵艦サン、ニコラス號を突きて之れを乘取り、更らに大叫して曰く「戰若し勝たずんば只だウエストミニスター、アベー（墳墓

の意）あるのみ」と部下の下士水兵を率いて敵の最大艦の一なるサン、ジヨセフ號に亂入し、西班牙の將士水兵皆慴伏して爲す所を知らざるを見、劍銃を收めて其降を許るし、遂に其軍艦を捕獲せり。提督ジャーヴイスはネルソンの命令違反を責むるとなく、却て其處置機宜に適し、勇氣の比類稀なるを稱したりと云ふ。斯の如く西班牙艦隊は全く大敗して勢收拾すべからざるに到り、英國艦隊は更らに四隻の西班牙軍艦を捕獲し、凱歌を奏して英國の萬歳を祝し、全國をして將來海上の覇權を世界に確立するの基を開かしむるの大名譽を荷ひたりき。之れをセントビンセントの役と云ふ、役了りて提督ジャーヴィスは貴族に列し男爵を授げられ、三千磅の年金を賜はりて、英國海軍と共に功名を竹帛に垂れ、ネルソンは海軍中將に昇進して、ツラファルガル海戰大勝利の吉兆を茲に示したりとなん。

無邪記

桂陵

○

母樣の御留守に八重ちやんと三郞が御掃除をはじめた。八重ちやんは姉樣冠りして奥の御椽側へ雜巾掛けをし、三郞はシャツ一枚になつて箒を抱きながら御庭を掃いてた。けれども其の掃くのが掃くのではなくて引きづるばかりだからして何時まで經つても奇麗にならない。其の中に三郞は箒を投げ出して、沓拔へ水を掛け出した。八重ちやんも初めの中こそ、三郞困まりますねなんて、さも御母樣ぶつて居たが、終ひには自分も下りて來て一所に御雜巾を掛けて、そして其の上へ座つて二人ニコ〳〵して居た。

○

御隣の蝶ちやんは八重とは一つ違で、極く仲の善い友達だ。或る時二人で上野へ遊びに行くと云つて途中ではぐれた事がある。八重は間もなくで歸つて來たが、蝶ちやんは何時まで經つても歸つて來ない。御祖母さんが大層御心配なさつて市藏を見にやつたら、其の中に一人でポカンと歸つて來た。蝶ちやんマア何處へ行つてたのと聞くと、妾象を見て來たのよと云ふ。何樣して見て來たのと云ふと、何樣もしやしないワ妾見て來たんだワと答へて、如何に問ふても要領を得ない。此の時蝶ちやんが何樣して象を見て來たかと云ふことは、今に至るまで我々兩家の疑問である。

○

蝶ちやんは御祖母樣ネ、何故つてえば齒が無いんだものをと、僕が或る時からかつたら、それから蝶ちやんは僕を見ると何時でも口を結んでしまう。どんな事をしても決して開けない、强て開けさせやうとすれば直ぐ泣き出して家へ飛んで行くがそれでもまだ開けない。其の癖又ぢきにノコ〳〵やつて來る。

○

三郎、そんな御惡戯をしてはいけません、御よしなさいと云つたらハイと云つてよすものですと云ふと、三郎はすぐハイつて奇麗に御返事はするが、惡戯はなか〳〵止めはしない。

母樣、徳川家康と西郷隆盛とは何方が強いの、太閤秀吉と楠正成とは何方が強いのと云ふて、三郎は毎晩御母樣を困らせる。それは時代が違うからなんと云つて聞かしても其の時代と云ふことが解らないから無益だ。うるさがつて何方も強い〳〵なんて御仰らふものなら、それこそ袖を引張つて御定りのヨウ〳〵〳〵がはじまる。是非とも彼方か強いとか此方が弱いとか云つてやらなきやならぬ。秀吉や隆盛の中はまだいゝが父樣とベチなぞと來ては流石の母樣も余程御困りの樣

子だ。

○

榮様が琴を御はじめなさつたら、蝶ちやんも是非習はなけりやならぬと云ふて、だましてもすかしても承知せぬ。とう〳〵姉様の御古を修繕して貰つて、そして御稽古の時には何時でもその側で譯の分らぬ事を歌つてる。すると今度は家の八重ちやんがそれを見てジヤ〳〵ばり出した。仕方なしに市藏の手細工で琴の形をしたものを拵へて當てがつたら、それから二人して毎日〳〵琴の合奏だ、そしてその度ごと榮様が仲へ這入らないと承知しない。

○

八重ちやんの琴が御終ひになつた頃、次郎が學校の友達を連れ込んで樂隊をはじめた。無論自分がリーダアで僕の籐のステツキを揮て盛んにそれを振り舞はして居た。大太鼓には物置から唐紙の古を持ち出して來て何様からくつたか兎に角太鼓の音の出る様にし、小太鼓には初は金盥を用つて居たが調子が高くて外のものが何んにも聞こえなくなつたものだから、流石のコンダクトルも大弱りで、とう〳〵御廢止にしてしまつた。コルネツト、トランペー、バリトン、アートホルン、皆一様にブリキの喇叭で、バスの代りに竹へ紙を張つて用ゐ、トライアングルには鐵の火箸、シンバルには洋燈の笠を用つた。そして學校から歸るも書の始末もせずに裏へ行つては叩き立てる。あまり騷々しいからと云つて家を追ひ出したら、それから同勢十一人往來へ出でやつて居る。ア、今も横町で盛んに叩き立つてるが、アレでもアレが四百餘洲だそうだ。

五重塔

「阿母さん〳〵ごとゆうの塔さいふから五十も重ねてあるかと思つたら一、二、三、四、五——五つしかないねえ

小説

女流記者

金子春夢譯

（下）

其後二月を閲て女流の記者が煖爐の火の前に立つて居る折から、急に戸が開いて例の若い婦人が突入して來た。

御許可を待つことが出來ないで上りました、貴下御聞ですか、今朝夫の人が婚禮した事を、貴下どう思召す、眞實でせうか、ア、、貴下私を助けてくださいまし。

と處女は兩の手を衝き出した。

まあお座んなさい――、さうです其事は全く眞實で。

と主婦から平氣で答へられて、

さうですか、ア、、厭だ、厭だ、私はどうしたらようございませう、そして貴下は夫の人へ、あれから何とか仰しやいましたの。

と悶ゆる女は年上の手を捕えた。

いゝえ、私はそれから遇ひません――はい勿論談話もしません――が、私は決心した事をしたのです。

と何か意味有氣に答えて一心に火の方を凝視めて立つて居る。

人の評判を聞きますれば、其女はほんの小供で、たつた十八、そして夫の人はたつた三時間見合をしたばかりであんな事になつたと申しますよ、眞實でせうか、貴下。

さうですよ。

なに、夫の人は今度の新婦さんを眞に可愛がるんぢやない、新婦の位があるのとお金があるのを見當に

婚禮をしたといふ評判ですが。
主婦は急に向き直つて、
貴下は夫の婚禮について何を仰しやる權利があるかは知らないが、夫の人を知つてるものは私より外に一人もない積です、何も位や金が欲しいばかりでもありますまい、夫の人は十人に勝れた人物です、全く新婦さんの淸くて美しい處を見込んだらしい、どんな男でも一度見たら惚々しますよ、若くて、そして美しい、それで目出たくなつたので新婦さんの家族では大悅び、まだ小供でもこれから追々世帶に慣れたら、此上ない妻君となりませうよ。
そんなお話は廢して頂戴、私はもう燥々して聞いては居られません。
と若き婦人はどつかり椅子に座つて、
眞實に其女は夫の人の配偶になつて、そして子供が出來ませうか。
さうです。
と年上の婦人は急に動き出して、
どうせ直ぐに赤兒が出來て、阿母さんの胸に赤兒の頭を押しあてゝ乳を呑ませてさ、他所から見ると羨しいほど歡樂なのはこれからです。
休なく動いて煽り立てるやうにいふ。
其新婦さんは實に罪な人ですね、私は其事を考へると死んで行くやうに思はれます、私の指は冷なつてます、死にさうです、貴下は夫の人のたつた一人の友人と仰しやつても、貴下は御存知ないです。
主婦は詞柔に、しかも急調で、
それでも其女が今度愈々新婦さんになつてやがて小供が出來る事などを考へると、貴下はちつとも其女に對して優しい心は起りませんか、私はさうでない出來るなら一度でも其新婦さんに抱きついて身體に觸れて見たい、世間で評判の通ほり眞に奇麗です

よ。
ます〳〵おだてる。
私はとても遇へません、遇つたら直ぐに私は死んで仕舞ひます、今日夫の二人はどんなに幸福でせう、夫の人はさぞ新婦さんを可愛がりませうねえ。貴下は夫の人が幸福であることを欲はないですか、そして貴下は全くこれまで夫の人を愛して居たのですか。
と若い婦人を見下した。
處女は兩手を顔に當てゝ、
それが恐しい、ア、世の中は眞暗です、これから此の苦痛が段々増して行くばかりでせう、それを思ふといつそ死んだ方が得策でございます。
主婦は火を見ながら立ち、其の時、靜で仁恕のある調子で、
世の中は見る物、聞く物といふが、すべて眞暗だと思ふ事が折々あるのです、思案に餘つた時には、誰しも死ぬより外に分別がないやうに思ひ込みますのが常です、併しじつと辛抱して時節の來るのを待つて居ますと、自然に運が開けて來る、今までの事は不運にしろ、もうそれはお仕舞になつたのです、時節は貴下の思ふより早く來るに相違ありますまい。
いゝえな事、迚も私は運は開きません、私は又、一つ物を愛したらどこまでも渝りません、忘るゝ事は出來ませんの。
だが情愛ばかりが人間の目的ではない、他に爲る事かありますよ。
さうです、貴下にはさうでございませうが、私は夫ばかりです。
それはさうと、貴下はもう行かねばなりません。
との主婦の言に客は立ち上つた。
私は貴下へ此事を打あけましたので幾許か心が靜り

ました、私はお宅へ上がらないと死んでしまつたか知れません、貴下は私を助けてくださつたのです、此御恩は決して忘れません。

と室より外へ出て行かうとする、主婦は處女の手を捕えて引止め、

今少しお話し申したい事が‥‥。

何でございます。

貴下は私の言つた事がお分りにならないかも知れないが、貴下、世の中には戀の失望よりもそつと〳〵恐しいものがあります、世の中は夢、又人は夢想をして居る事は誰でもありますが、貴下もそれを實行しても御覧なさい、追々これから年が經つと貴下はかう言ふ事がありませう、各人に自分で自分の遊事さへして居れば、他から世話をしないでもそれで遊戯は出來る――今貴下は足の下から地盤が去つて行くやうに見えまうが‥‥

一寸語を止めて、

そんな苦しい事は私にもあります、若し他の婦人がこんな場合に貴下に救助を求めに來たらば、貴下は私が貴下に對するやうな事をなさるでせう、私は貴下へ對する處置は忠實を盡した積りなのです。

處女は喜の色顔にあらはれ、

私は貴下の仰しやるやうにいたします、貴下は眞に善良の方だと思ひます。

善良――貴下ばかり、ほゝ、どうぞ又入らつしやい。

嘸貴下の仕事を妨げましたでせう。

いゝえ、なに決して、では左樣なら。

若き婦人は立ち去つた、主婦は椅子にもたれて膝をつき、恰も小兒が鞭を懼れて啼きも叫びも爲得ぬやうに歔欷をして涙を呑み込んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

一陽來復、再び春は來た、例の女流記者は後に燃え盛

れる暖爐を控えて机の上に急はしく筆を走らす、丁度自由保護貿易の可否を論ずる社說を書いて居た。一分の休間なく筆を急ぐ折から、召使は一束の到着書翰を持つて來た、女流は書きつゝけながら、小使に今十五分間待つて呉れと言ひよ。と言ひつゝ持ち來た書翰を瞥見したら、其内に目についた一通の書翰がある、婦は筆を擱き、手早く封を切つて讀み下せば左の文面。



一筆染しあげまゐらせ候不相變貴下樣には御健に御暮らし被遊候事と存じまゐらせ候扨貴下樣には定めて妾が先年參上の砌種々と御敎くだされ候事御記憶と存候御敎訓の通り時節を待ち居り候ひしに運めでたく前週羅馬にて氣高き心すぐれし人と婚禮の式を擧げ候故乍餘所御悅び被下度候妾等唯今フロレンスに滯在いたし居候處妾には見るもの聞くもの樂しく覺え御面會の節の妾の情はほんの娘の馬鹿らしき夢にて今こそ醒め果て申候妾の良人は妾が曾つて眞實の情を盡せし人にて耻かしながら其人は他々の男子達に出來間じきほどに妾を愛し申候妾は早く夢の醒めしを喜び居り妾は最早嫉妬の念も消え失せ何人も愛らしく思ひ候妾は直ちに英國へ歸朝の上一刻も早く御目にかゝり種々御禮申上度存候貴下樣には相變らせられず筆硯益々御

勇ましく人民をおたすけなされ候はん妾は女の身は味氣なきものと思ひ候事が今はうらはらにて女こそ生れて幸福のものよと悟り申候貴下様にも此美しき春の日を樂しく御過ごしと存上り／＼可祝

い　ー　子

主婦は讀み終り默つて立ち上り火の方へ歩き始じめたが、再び讀み返へしもせず開いたまゝ手に握つて火焔を見つめて居る。

彼女は唇を兩方へ引きゞめて如何にも殘念だといふ顔色で、ぢり／＼其手紙を引き裂いて、一片づゝ手から落し、卓子の方へ歸り、筆を執り上げたものゝ、まだ唇を引きゞめて居たが、暫時して双の腕を原稿紙の上へ横え其上に額を押つけてすや／＼睡眠に就いたやうだ。

忽ち戸を開くる音に頭を擧ぐれば、小使は社說の出來上るのを待つ。

記者は急に筆をおつ取り、

一旦事實を知る時は保護貿易の利益上より墺太利殖民が取りし政略は容易に理會せらるゝ也。

社說を書き終つた。

家政

話のくさ／＼

情　　　黃花女史

氣がつかぬと云ふは情なきなり。眞實此方に思ひやりがなければ一寸したところにも氣はつく可し。

或日某夫人を訪ひて、其良人の病後の容躰を尋づねしに、「お蔭様ですつかりなをりましたが、ドウも、先日なぞは散歩するといつてつまづきますし。此頃着物の裾が大そう速く切れますので、まだ足なみが不斷のや

うにまゐらぬかと思ひます」と答へられぬ。裾の切れるをつぶやく人こそ多けれ。思ふて此處に到る者幾人ある可きや。平生のことも思はれていと床かしく覺へき。

母の着物

は家中誰よりも最もまさりたることそのぞましけれ。母親が質素にするは子供の手本ともなりてよきことなれど、また己れは兎も角も子供は立派にしたきが親の情にはあれど、さればとてお母さんなんかはどうでもいゝと母自からも云ひ子供にも思はせるは誠に無分別のことといふべし。母は如何なる場合にも衣服身のまわり整然として一家の女王たる威儀を失ふ可からず。子供を奇麗にしたきは無理ならぬことながら、序を亂し禮を失することとなき樣に心す可し。殊に娘の着ふるしなどを便利のために母のものに轉用するなどは宜しからぬことなり。

（周圍の感化）



（軍人の家庭）

區　別

更に大切なるは所持品の區別なり。夫のものを妻が濫用し、母の所持品を娘が濫用するやうにては一家の取締覺束なき事なり。殊に母の所持品例へばハンケチ、しよいあげ、帶どめ、傘などを娘子供に用ゐしむるは、不用の時は何でもなき事のやうに思はるれど、其ものをおろそかにするは其物の持主をおろそかにするの始にて、即ち附屬品に對する不遜は其持主に對する不遜を生むものなれば、同く一家親子兄弟の間にても人我の區別を明かにし、亂雜にならぬやうなし置く可きことなり。區別は即ち敬なれば。

下女悪口

悪口は云ひ易きもの、別して下女如きもの丶悪口はうかと口走るものなれど、主婦たるもの丶云ふまじきは此れなり、然るに大抵は此つ丶しみなきのみか、甚しきは此下女に對して彼下女の悪口をなし、新しき下女に向ひて先の下女の悪口する者もなきにあらず。其身其家の品格をおとすは勿論これを聞く下女もし愚かならば好むで他人の短所を發く奨勵となり、賢ければ主婦を侮り、然らざるも先の下女が斯く云はれる程なれば自分の上とても同様なる可しと思び込みて氣を悪くするは自然の人情なれば、此點は別して主婦たる者心せざる可からず。たとひ下女悪口を話しかくる事ありとも、人は誰も短所長所あることを敎へ、決してとりあふ可からず。同情は大切なれども馴る丶はよからず。別して新しき下女には屹としたる家風を知らせ置くこと必要なり。

周圍の感化



(學者の家庭)

小兒の我欲

小兒六七才の頃は兎角他人の物を欲しがる僻あるものにて、人の玩具をそつともつて歸るとか、隣りの垣根の竹を引拔くとか、他處の花を摘むとか誠に有勝にて、親の最も細かに注意を要する時代なり。

フランクリンの言に「少なく有てる者は多く有てる者よりも廉潔なり」と云ふことありて、斯る僻は貧しき者よりも却て身分よき者にあり勝なり。身分よきもの丶子供は人を人とも思はず、物を物ともせぬ風ありて「是れ位なんだ」といふ氣にて、思はず貪るやうになりて、人次第敎育次第にては此が増長して我となり不廉となり、盜癖ともなりて救ふ能はざるに至る。此時期には主婦の敎育も一入注意を要するこ

となり。

牛肉汁（ビフチーの製法）

病人には食物の精撰が肝要なれば、善く意を用ゐて吟味したるが上にも吟味を行ひ、一點も疎忽ありては宜しからず　されば己一人の意向に任せ自分勝手に物を調理なし、無理壓制を以て病人に之を強ゆるなぞのことゆめ／＼あるべからず、種々の食料中先づ牛肉汁は最も滋養に富み、精神を興し病力を殺ぐの藥劑なれば病人には必適最良のものなれど、これとても其の製法及使用を誤る時は、何の利益にも成らずして終るべければ、些かたりとも油斷手落等のこと無く、委しく研究致し置くの必要あり。

周圍の感化



（隣者の家庭）

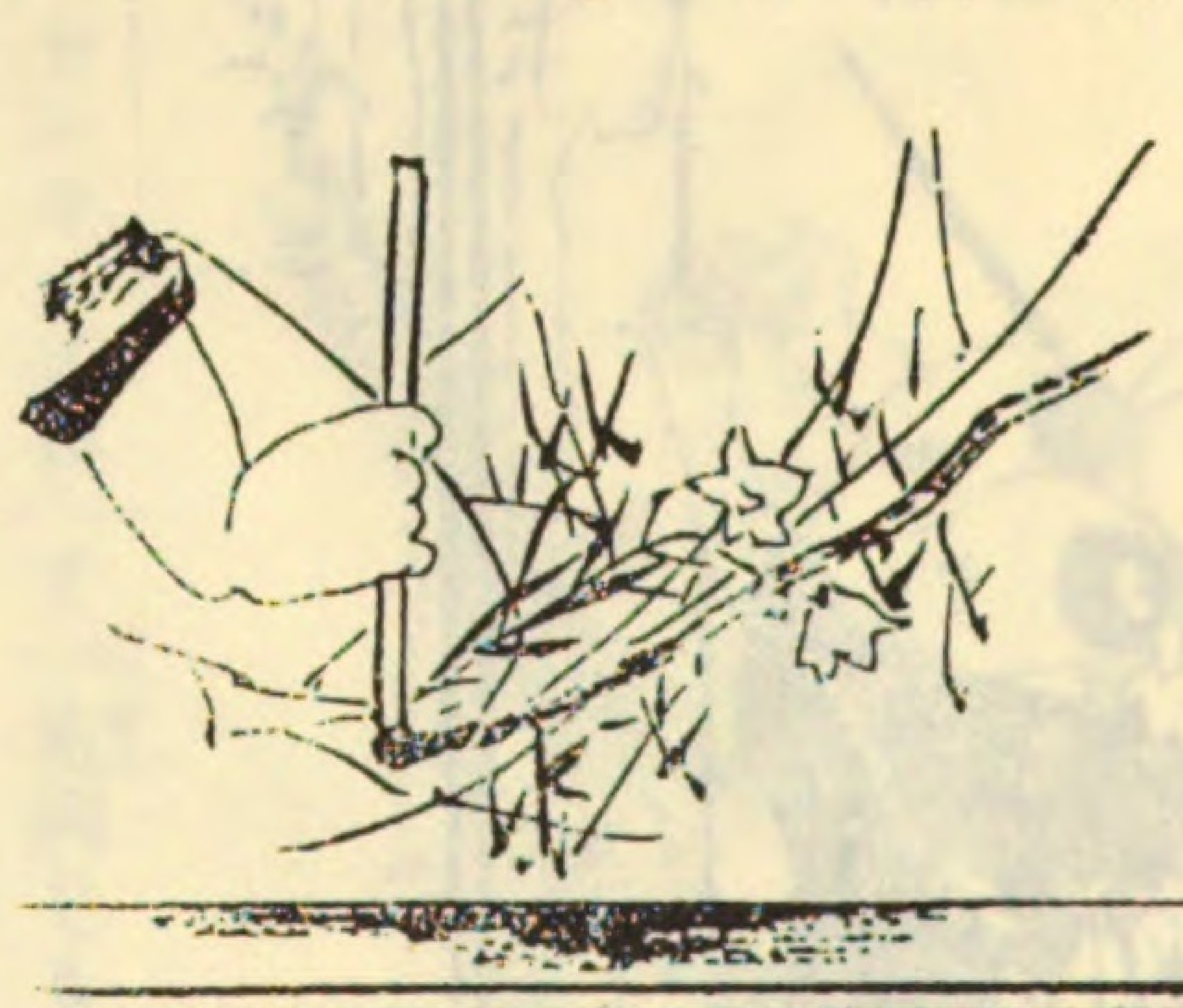
沸騰せる牛肉汁は腐敗せる牛肉汁なり。　こは牛肉汁の製法に關するの注意にして、決して忘るべからざるの確言たり、牛肉を湯に煮立たゝても、滯り無く調へ得らるゝものゝ如く考ふるものも往々に有りといへども、それは甚だしき謬見なり、其故如何となれば牛肉汁を沸騰する時は、大切なる肉の滋養分即ち蛋白質を液中に融解せしむる能はざるのみならず、却てこれを凝固せしむればなり。

かゝるが故牛肉汁を製せんと欲せば宜しく次の三個條を守るべし、第一、先づ牛肉を取りて極めて細に刻むべし、第二、次にこれを冷水中に入れて少くとも半時間は其儘浸し置くべし、第三、水は決して沸騰せしむべからず。

牛肉汁の製法

脂肪及び皮を截り去りたる牛肉一斤を取りて細微に刻み、瓶に冷水（清浄なる雨水を能く沸騰せしめて、再び冷却したるもの最も宜し）一斤を入れて、其の中に此の刻みたる肉片を浸し、次に其を善く攪雜ぜ、而して一時間を經たる後固く蓋をなし、又た外の鍋に冷水を盛り、此の瓶を漬け、文火上に置きて二時間許り鍋の水を徐かに煮るべし、而してこれに鹽を少しく加味し、漉器に掛けて漉し上ぐべし（布漉にても善し）。之を病人に供する前に至りて、適宜の温度に暖むるは毫も差支へなし、澱粉は其まゝ服用するが宜し、許多の滋養分は其中に含まれ居るものなり。

周圍の感化



（齋家の家庭）

炙牛肉汁

前法の如くして、丁寧に製し上げたる牛肉汁を、瓶のまゝ、適當の温度を有する竈の中に二三時間入れ置くか或は又た終夜冷竈の中に藏め置けば則ち炙牛肉汁を製し得らるゝなり。

牛肉汁の速製

先づ細に刻みたる牛肉一斤を、冷水二合五勺に鹽一撮み程混合せたる鍋の中に漬け置くべし、若し濃く造らんと思はゞ、水を少くするが善し、而して十分間を經たる頃、其鍋を爐爐裏又は火鉢に掛け、漸次に熱度を加へ、よく注意して華氏百六十度以下の温度に保ち、全く其の上に登りきらぬ樣になして十五分又二十分の間屢々攪亂すべし。

醫學士ハビー氏處方の牛肉汁

美味の牛肉汁を造らんと欲せば、細かに切りたる牛肉三斤、韮三つ、葱一つ、小さき胡蘿蔔一つ、和蘭陀芹の種一つ、野菜(芹の如き)一把、鹽一茶匕、菌蕈(菌類より製したる液汁)半茶匕、清水三斤、等を調のへて前記の如く製すべし。

其他の製法

醫學士ニツショルム氏は牛肉汁の製方に就き次の如く述べたり。

先づ薄き牛肉九十目を取り、皮及軟骨を去り、一寸平方に切り、水桶に冷水六勺五抄を入れ、其中に此肉片を漬け、砂糖小量を加へて一時間許そのまゝになし置け、こは水中に肉液を吸出さしめんが爲めなり、

周園の感化



(縫裁好の家庭)

而して其次に水桶より肉片を取出し、更に肉片を冷水二合五勺を注ぎたる瓶中に入れ、又た鍋に熱湯を沸かし、其中に此の瓶を入れ、而して二時間を經過せる後、再び取り出して冷汁七勺許を瓶に注ぎ、而して又た瓶より肉片を出し、それを木鉢に入れ、何の汁にても其中に混合しつゝ麵棒を以て能く衝砕すべし、倘ほこれに蕃を加へて味を付くるも善し。

と、次に又た同氏は、

「かくの如くして調製したる牛肉汁は、肉塊のまゝ籠にて煮立て、又文火上に熱湯の鍋を掛くる等の方法に優ること萬々にして、遙かに多くの滋養分を含むべし。」と斷言せり。

鶏肉羹

牛肉の代に雞肉一斤を鍋に入れ二合五勺の冷水に浸し、第一製方に於て説ける如くなせ、これには若き雛鳥よりも老雞を用ゆる方滋養を多く得らる、骨は能く砕き肉は細に切らざる可からず、而して後水に混づるが法なり、又た飯粒、大麥等を加味するも差支なし、殊に大麥は味を美くするものなり。

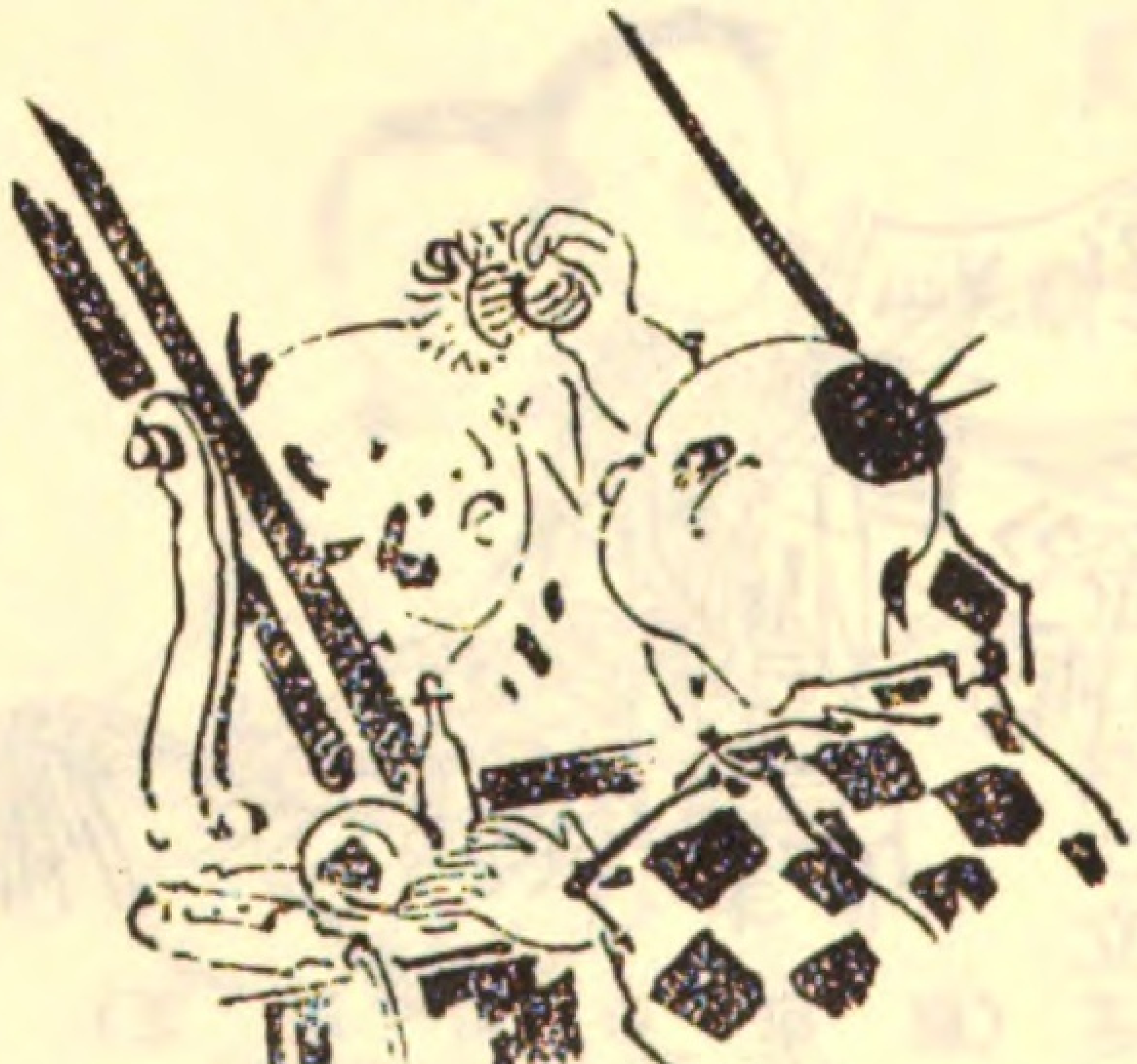
牛肉汁と其用法

牛肉汁は奇功ある所の興奮劑なれど決して食物の代用を為すべきものならねば、看病人たるものは宜しく其心得ある可し、依て醫學士ミルナー、ホセルキギル氏が嘗つて此件につき論じたる其一節を茲に抜錄せん。

「牛肉汁は食物ならず興奮劑なり、病人羸弱の身躰に唯だ牛肉汁のみを與ふるは、恰かも石塊を呑ますが如く其無慈悲たること言ふに忍びず、興奮性を有すると共に、口腮、胃腸に能く適應するは此の牛肉汁に上越すもの無く、實に貴重の藥料なれど、單に食物として之を考ふるは大なる誤謬にして、それが為め滋養も滋養とならず却て人を殺すの毒となること往々あり、ナポレオン大帝が歐洲大陸に血を溢らせし時、一萬の病者は實に此の牛肉汁の惡信に依つてあたら命を落としたるもの丶如し、牛肉汁を食物として見るときは、飢渇の旅人が砂漠中に發見せる川流の蜃氣樓に於けると一班同じものなり。」

こは餘り激烈過ぎたる論なりといへども、牛肉汁を沸騰して滋養力を減殺し去る如き無識の人々に對しては確に適當なる教訓なり、又た牛肉汁のみ善きものと妄

周園の感化



（おしやれの家庭）

信して、他に牛乳、雞卵、粥等のあることを知らざる如きものには、最も有力なる警策なりと云ふべし、然れども亦た牛肉汁は同氏が言ふ如く、しかく用少きものにあらず、病人に供しては屢々命の綱となり、又は惡熱解散の火箸となるもの此の藥劑を措いて他に求む可からず。牛肉汁は能く精身を奮興し、身躰の組織を補ひて消化を早くするが故、雞卵、牛乳、麵類の如き柔軟物を始め、麥、麵包の如き乾硬物に至るまで胃中の消化を活潑になすの大功あり。

英國ロイヤル、ソサイテイ會員ウイリヤム、ロバート氏は、牛肉汁及び食物の消化につき貴重の敎訓をなしたる人なれば、玆に其人の言を錄すべし。

居園の感化



（芝居町の家庭）

「貴重の滋養品なる牛肉汁に就き、一般世人の間に甚だしき謬見行はれて、肉の滋養分は沸騰したる煮汁中に悉く融解するものと考へ、而して肉の纖維は滋養分を取り盡くしたる渣なりと思ひ、犬猫の食料になすのみならず、甚だしきに至りては無用無値の廢物として塵溜に放擲し去るものさへ吾人の往々目擊する所なるが、斯の如きは實に惜むべきの濫費といはざるを得ず元來肉類の性質として熱湯中（華氏百六十度以上の沸騰水）には決して融解するものにあらず、此の融解したる牛肉の成分中には、肉の精粹分鹽分、及び膠分の小量を含むのみにて、其外には含有するもの何も無けれど、殘餘の肉屑にも亦た多少の滋養分を保つものなれば、決して徒に棄て去るに及ばず

此の肉屑を擂鉢にて衝碎し、それに鹽か又は醬油を適宜に加味する時は味善く喫せらるゝのみならず、尚ほ且つ消化善き滋養の食品となるなり。

複雜の世と和樂の家庭

恕　哉

世の中の進歩するに從ひて、益々人事の複雜紛冗を極むるに至るは、自然の理なり、未開時代の生活は、至つて單純なれども、文明社會の生活は、頗、多岐なり、故に別言せば、人智の複雜なるは社會進歩の證據と謂はざるべからず、社交の單純なる時代にありては、政治も單純にして文學も亦單純なり、從つて其人々の腦髓も單純なれば、例へば小說の如きも變化少なくして平坦なるものを好めるも、社交紛冗にして人々の腦髓複雜となるに至らば、多岐多端千變萬化の趣搆を喜ぶに至るは、文學發達の史例に徵して明白なりとす。

周圍の感化



（遊藝好の家庭）

斯く社會は進むにつれて復雜となり、人事は益々紛冗となる、而して此世に生息するもの、誰れか其複雜紛冗の外に立ちて安閑たるを得べき、必、世と共に上下し、人と共に躍らざるを得ず。されど人の情として、身は如何なる複繁紛糾の境に投ずるも、常に平靜和樂の別世界を喝望して止まざるべし、一週間に一日の日曜日を樂み、一年に一度の芝居行を望めるが如きは實に人の至情なり、されば此複雜紛冗の世にありては、各自の家庭を以て平靜和樂の別世界となさゞるべからず、男子が終日外にあり紛糾なる競爭の繁務に身を投じて働き、一日の業を了へて家庭に歸ると同時に、爰に始めて平靜和樂の境に遊ぶの思を起さしめ、一日の

勞苦を慰むるの天國たらしめざるべからず、家の外は如何に風暴み雨激しきも、家の內は波立たず風起こらず、和氣靄々、家族團欒の樂みを堪へしめざるべからず、これ家庭の眞價なり、この家庭を有するの人は、外にありて複雜紛糾の競爭界に勝利を占むることを得らるべく、內顧の憂あるものは、到底外に向ひて充分の力を伸ぶること能はざるべし、これ世の複雜となるにつれて、益々和樂の家庭の必要なる所以なり、予は嘗家庭の和樂を幇助するの一法として、家庭と音樂との關係を述べしことあり、而して家庭和樂の主動者は、實に一家の主婦なり、西哲の言に、男子の精神を勵まし氣力を加へ、疲勞を慰むるものは家庭の婦人なり。この家庭あればこそ男子も外にありて、勇氣を以て働くことを得べけれ、一日の業を終り家庭に歸りて、和樂に愉快に、其日の苦を忘るゝことを得るは、家庭の賜なりとあり、嗚呼何時の世か家庭の和樂の必要ならざる、されど殊に複雜の世に、この幸福なる家庭を喝望するの甚しきを見る。

研究的破壞

小兒は一つの玩具には三日とは持たぬ通癖あり、飽きて放棄するか、破壞し去るなり、小兒の心には常に新しきもの、奇らしき物を求むると同時に、其不思議なる理由を知らんと欲する念慮なり、此世に產れ出でたる人は其始めは凡ての事物悉く奇蹟に見ゆるなり、大人が日月星辰の理由を知らんと欲するが如く、小兒も亦彼等の周圍にある事物を明に知らんと欲するなり、一つ玩具が破壞せらるゝ理由は、たとへば一個の笛の玩具あり、彼は如何にして美妙の音聲を發する源を知らんが爲めに、火箸を笛に衝き込みて探り、これにて滿足する能はず、彼は笛を叩きこわしても其理由を究めんとす、こは憤怒其他のために破壞するにあらずし

て研究的破壊なり、されば小兒が器具を破壊するは普通の事なれば高價なる玩具を與ふるよりも、破壊しても惜からぬ新らしく且つ珍らしきものを與ふるは小兒の心性を發暢せしむる一法ならんか。

松茸の料理

今や松茸の相場は百目五六十錢にして、到底素人の家にては常用し難きも、これから秋の雨ごとに澤山市場に現はるに至るべし、さて松茸は何料理に用ゐても此上なき材料なるか、柚子かけなどは最も面白かるべし其法は適宜の松茸を蒸してよき程に切り、或は紙につゝみ小し濕し、之を熱灰の内へ埋めて炙き、取り出して引裂き、暖氣のさめぬ内に柚子を二つに切りたるものを添えて出せば、柚子の生醋をしぼりかけ食するなり、又ざつと湯煮して醤油に柚子の絞り汁を入れ、これを松茸にかけ食するもよし◉結び海老、鯛の切身などに取り合せ松茸の皮を剝きよき程に切り、焙烙の内にて鹽蒸にし三杯酢をかけて食するも又一法なり、濱町ときわ家の名代料理◉揚松茸は生にて笠とも縱に薄く切り、根の方を丸くきり取り、一枚づゝころもかけて胡麻油にてあげ柚子の生醋醤油を添えて食膳に供す◉普通に三杯醋と稱する食法は松たけの莖ばかりを薄く短冊に切り、目笊に入れて熱湯をかけて水をきり、小鉢に盛り三杯醋にて食す◉又普通の蒸松たけの製法は生松たけを丸のまゝ笊に入れて程よく蒸し、引き裂きてわさび味噌或は山椒味噌或は生姜醤油の藥味を用ゐて食すべし◉松たけ飯は隨分松たけを要するものなれど、出盛とならばこしらへ玉へ、たとへば米一升に各二勺量の酒と醤油とを入れ、松茸を短冊に切りて飯の出來上るを待ちて打ち混し炊くも宜しく、又普通飯の出來上る時、五目飯を製するやうに、別に松たけを味淋醤油にて味をつけ、飯を平鉢へ移す際かきまぜる

も宜し。

牡蠣飯

これも昨今の流行料理なり、能く洗ひあげたる牡蠣を能く水を切り、飯には少く鹽を入れちと強目に仕立て煮え立つ時牡蠣を入れ、飯櫃へ移す時、かきまぜるなり、鰹煮汁の清汁を飯にかけ淺草海苔を揉みかけて食すべし。

火鉢と灰

新しき火鉢は其使用悪しき時には、くるい又はひゞを生することあり、火鉢に限らず凡て新しき物は破損し易きものなれば注意を要す、殊に手あぶりの如き炭火に接近するものは殊に然り、火鉢にくるいを生ぜぬやう炭火をよき程に埋めるは言ふまでもなき事ながら、新しき火鉢に藁灰を入れるは火鉢の保存の上に甚だ悪し、矢張炭灰を用ゆべし、石灰は美にして且つ炭火の保もよろし。

鐵瓶

鐵瓶と言へば先づ龍文堂と稱すれども價の高き割には地鐵宜しからず、目下東京にて指を屈するは名越製なれど價貴く且つ產出多からず、普通に行はるゝは板橋附近河口製なり一圓以外なれば最も多く行はるれど、鐵瓶は成るべく古く使ひたるものを撰むべし、鐵瓶は一日として欠ぐべからざるものにして、品の新しきが故に鐵氣出づるは衛生に宜しからず、急に鐵氣を止めんと栗をゆで或は其他の方法を用ゆれども开は姑息の策にして、鐵瓶其物のために宜しからず、矢張能く使ひ慣らして内に湯垢の生しある古物を求むに如かず、併し近來は狡猾の世なれば大道店などにては鐵瓶の内側に白味を施し湯垢なりと瞞着を試ろむるもの多し、

此道に慣れざる人は信用ある古道具店にて古鐵瓶を求むるか、左なくば新物を求めて三個月間も湯を沸さば自然に鐵氣去る、但し水道の水を用ゆる時は一年乃至二年を經過しても鐵瓶の內側赤色を帶ぶれど憂ふるに足らず、三ヶ月以上丹精せば次第に鐵氣はうすくなるなり、惣して鐵瓶は其外側を摩擦して大事に取扱ふと同時に使用せぬ時は、內側はから〳〵と干しあげ濕氣なき場所に置くべし、外面に水をざんぶりあびせて火にかけるは妨なきのみならず、却つて面白き光澤を添ゆるなり。

寒さに向ふにつき

黑田生

追々冷氣となる爲めに自然ものうしくなるは免るべからざる事なり然し朝は其の日の吉凶に關係するものなり諺に一年の事は元日にあり一日の事は朝にあり故に人は懶眠するを禁ず、そは朝は人の心も自然活潑なるが故に腦髓を使ふ人には最も適當したる時間なればなり。

先づ朝は早く起き下婢に命令の權を取るべし世人時として只々眠たき間々に遲くまで床の中に在り殊には記者の經驗によれば處女には朝寢する人多し此の寒さに向ひて此習慣を直さゝれば後來大なる不利益を來たすべし。

人により己の衣服を夜具の間に挾み甚しきに至りては炬燵にて衣服を暖め又は足袋を穿ち或は襯衣を附けしまゝ眠りに附く人等あり是等は最も身躰を健康に保つに害あることとなり故に是等の事は最も愼むべし。

我が國の人は往々襟卷なるものを用ゆ此れは宜敷からず第一習慣性と成るものなり一度是を使用し暫時たりとも是を卷かざる時は空氣に觸るゝ時は咽喉病となる者多し故に使用せざるを可とす記者は如何に寒氣強き

とても是を使用せし事なし故に他人の如く風邪となるも頸部に「フラ子ル」の如き物を卷ずとも僅の解熱劑例へば「ザルチルサンソウダ」、二グラムを頓服し「エンサンカリ」の含嗽劑にて全癒し餘病を引き起せし事なし世の婦女達は我が子の愛に溺れて襟卷等を用ゐて通學せしむる者あり此の愛は未來大害を來す者なり故に注意すべし。

深窓に生長する淑徳圓滿才學欠くる處なしと云ふ女子も雖も其身躰軟弱なれば決して完全なる婦女と云ふべからず何となれば女子は夫の爲めに家政を取り又兒女を設けて此を保育するの大責任を帶ぶ其れに身躰軟弱にして氣候に侵されやすき時は如何に父壯健なりと云へども其の小兒は必ず强壯ならざるは醫學上證明する處なり故に婦女は身躰を强壯になすを務めざるべからず。

勞力する婦女は却て强壯の者多く深窓に生長する者は壯健なる者少し是れ如何なる理なるか他なし運動の不足と新鮮の空氣を呼吸せざるとによる。

運動を適當になすには其位地身分によつて同じからずと雖ども朝早く起き書齋の障子其の他を能くはゝきを以て掃除するも其の一なり然しなるべくは毎日少くとも一時間新鮮なる空氣中に於て歩行すれば風邪に犯かさる事を防ぎ又殊に神經の爽快を保ち得。

寒氣甚しき時は動ゝもすれば居室をしめこみ是れが爲め炭酸瓦斯なる恐るべきものを生じ發病する事あり會堂等に於て往々頭痛を覺ゆるはこの瓦斯の作用による故に朝必ず障子等を明け開き空氣をして新陳代謝せしむべし又最も注意すべきは夜分寢に附かんとする時洋燈を消す時は必ず一旦窓或は障子を開き瓦斯を外に出すを忘するゝなかれ又寢室は濕氣を含むは宜敷しからず其の床は頭を西の方に向けて臥す樣にすべし草又は花等を花瓶に挿して寢室に置くべからず又霧の深き時

又は曇天には窓を開らきおくべからず夜具布團等は晴天には必ず日光に干し濕氣を去り清潔なる事に注意すべし寢衣は必ず清淨なる物を用ゆべし。

寒中水を用いて洗濯等を成す時は皮膚のあれる事あり併し雨水を用ゆる時は此の憂なし是を得る能はずして井戸の水を用ゐんとする時は硼砂を細末にして少く加へて用ゆべし。

皸及び皹の生したる時は「アンモニヤ」水を塗るべし皮膚甚しく糜爛する時は亞鉛化軟膏を塗擦すべし。

皹の豫防には「グリスリン」と「アルコウル」を和せ此れに微量の苛性曹達を加へたるものをよく瓶に入れ木栓を成し置き用ゆべし此の藥劑は人により白粉下に用ゆる者あり何れにしても皮膚のあれを防ぐ効あり。

寒氣甚しき時大氣に觸れ皮膚の「ほてる」事あり此の時必ず炭火にて煖むる事を成すべからず手を以てよく摩擦して後微温湯に入れ漸々にその暖を取り決して急に暖を取るべからず若し此を守らざる時は一局部凍死して其の機關の用を成さゞるに至る事あり。

烟草

我國に始めて烟草の輸入したるは慶長年間とかや烟草には「ニコチン」と稱する物質を含むを以て痲醉劑なり「ニコチン」は諸神經を害してその作用を失はしむるものなり神經の最も鋭敏なるは舌なりと犬の舌のさきに「ニコチン」の一滴を滴らせば犬は必ず直ちに斃れん千八百八十九年米國紐育府にて十六年未滿の少年にして喫烟するを禁するの規則を發布せり。

我が國にても學衆院始め府立尋常中學生徒に喫烟は嚴禁せり而るに近來は却て小學校の生徒にして喫烟しつゝあるありこれ小學校教員の不注意なるか又々父母の不注意なるかは知らざれど今にして之を矯正せざれば大害を釀すは天日を見る如し。

佛國某の實驗によれば卷烟草工女の烟毒の皮膚に入り墮胎せしもの實に多しとかや。

獨國某曰く喫烟の少年は生涯中に受くべき快樂幸福の五分の一を失ふものにして又少なくも生年の十分の一を短縮するものなりと。

始めは往々頭痛眩暈胃疾を感ずこれ腦神經ははやくも毒物を喫しつゝあるを知るなりその知らせを省みずしてその量を增し毒の上に又毒を加へ終に天壽を害するに至るとにして之を注意せざれば人命は增々短縮して人物更になくなるに至らん先づ手近に世の母たるものに注意を乞ふ。

烟草を喫する人は三度の食はやめても煙草はやめられぬと云ふ位習慣のものなり記者元來喫烟を望まず記者幼少の頃府下の某塾舍にあるときその塾長は烟管の吸口に半紙をあてゝ喫煙しその紙を示し曰く喫烟は此如き毒物を吸ふものなり益なくして害あり云々その時の忠告は今も猶腦髓にありて喫烟を望まずこれも亦習慣性なり世の母たるもの小兒の喫烟するは嚴禁せられたし。

ある人は非常に喫烟を好む一日重炭酸曹達一「ツヤミ」嘗めて喫烟せしに俄に喫烟を望まざるに至りたりと云ふ記者實驗せざれば眞僞は證さゞれど喫烟家は一たび試み玉へかし。

定義

書物は沈默の演說、婦人の帽子は高尙的滑稽、塊は群集の車、露は大氣の狂氣、茶は酒の妻、太陽は地球の衣裳仕立屋、醫者は人間の救助浮標、電信は電光的文法

近着紹介

◎日本女禮式大全　坪谷善四郎氏著　日本橋本町博文館

上下二卷に分ち總論婚姻出產敎育奉仕交際身じまひ諸藝の心得製造手藝心得家事經濟心得の十編五十一章よ

り成り劈頭には百人首作者傳女今川女子訓女小學女大學いさめ草六德和解女五常訓今後の家庭女孝經介婦のいましめ家訓主婦の心得家庭遊樂消息文例文章用語やまと言葉料理法等古今諸家の手に成りしものを收む所謂女禮式は冠婚喪祭進退の禮儀のみに非ず容儀精神併せ得て知悉すべき一切の心得を網羅せり之を女子大鑑と名けてふさはしきものなり女子が世に處して行ひ知るべき事項は此書を坐右に置きて家事折々の暇に繙かば施して誤なかるべし特に表裝の美を凝らしたるなど淨き机明き窓の邊に具へらるべく書肆の用意ぬけめ無しといふべし(和裝二冊函入一圓洋裝一冊七十五錢)

◎家庭讀本紅葉の錦　落合小中村兩氏合著　日本橋本町博文館

敦盛阿新丸蘭丸師賢高德正成淸正の傳記を收む靑葉の笛の聲あはれに、日野の若草芽のたふしき森の嵐の風情いさぎよきなど讀みもてゆかば感深きほど家庭の敎へ草に恰好なる讀本なり(價十八錢)

◎書法自在　野村累軒氏編　日本橋本町博文館

日用百科全書の第二十三編なり支那の書源より書法の傳流日本に系統を繼ぎたる由來を叙し本邦書の流派を説きて書道、筆法各論、書道心得を細かに述ぶ、劈頭には書に關する奇譚逸話格言等を網羅し一讀して書道上の知識は悉し得べきものなり(價二十錢)

◎かなのてほどき　小野鵞堂氏　京橋區南傳馬町吉川書店

全編上下及附錄の三帖より成り第一帖には平假名の變躰より又變躰中より混化せる三樣に書き別け第二帖には古今和歌集を擧げて諸變躰の變通應用を示し附錄には色紙短冊手紙等の書式も書き別けあり特に鵞堂氏の書は優美なるものなれば女子の假名を習はんとする者にはふさはしき好書帖なり(全三冊價六拾錢)

今號は都合により寄書百珍の欄を略す
次號問題は引續き『健康算』とす

訪問

野口小蘋女史

女史名は親字は清婉、小蘋と號す、弘化四年大坂に生る、父松村春岱は阿波國麻植郡喜來村の人にして大坂に出でゝ醫を業とす、幼より繪畫を好み十三歳の時父に隨ひて加越濃諸州を歴遊し尾張名古屋に寓せしが偶々父春岱を失ひ母と閑居せり、文久年間京都に抵り南宗畫家日根野對山を師とし大いに其技を練磨せり、明治四年始めて東京に出で詩を岡本黄石翁に學ぶ、同十年近江の人野口正章氏へ嫁し、夫と共に甲府に在る事五年、同十五年重ねて東京に出で内國繪畫共進會に疎密二幅を出品し「區中の殊異なるもの」との褒狀を得、同十七年第二内國繪畫共進會に濃淡二幅を出品し「區中の優異なるもの」との褒狀を受け、同十八年東奥宮城に遊び同十九年東洋繪畫共進會あり兩皇后陛下行啓の際御前に於て揮毫の榮を蒙り同二十年工藝共進會より銅牌を受け、二十一年秋、筆を載せて上州に遊歴し、同二十二年華族女學校教授に囑托せられ、二十三年五月第三回内國勸業博覽會に西王母の繪畫一幅を出品し妙技二等賞を受く（其褒告文に曰く、描法正健にして板實ならず、賦彩温厚にして筆澤あり手姿端麗容光人を照らす妙技甚だ嘉賞すべし）同年十月日本美術協會繪畫展覽會には審査員に推擧せられ又同會へ秋草七種の圖を出品して二等銀牌の賞を受け、同二十四年日本美術協會々頭より審査員たるの勞を謝し銀盃一個を贈與せられ、同廿六年日本婦人會の囑に應じて野州鹽原天狗巖の眞景を寫し米國シカゴ世界博覽會に出陳して褒賞を受け、爾來其技駸々として進み且つ揮毫を怠らず、毎年開會する美術展覽會に出品し、巾幗者流を以て獨り拔んでゝ堂々たる畫伯の間に交り銀牌を受

けれり、昨廿九年秋季美術展覧會に西園雅集圖の大幅（幅三尺五寸丈六尺五寸）を出品して、繡天翠濤の間群客雅游を恣にす、全幅の位置皆徴據あり能く此大作を


野口小蘋女史

爲す且つ用筆精熟着彩鮮潤なりとの褒賞を得二等賞銀牌を受け而も其筆頭たり、これ女史の略歴なり。
女史は繪畫に於ける天才の人なれども拮据精勵の功今日の大成を致したるを疑はず、女史は童年の頃より今日に至るまで疾病にあらざる限は、一日として筆を休みし事なく、繁忙蒲柳の質に堪えがたきも勉めて事を貫徹するの氣風あり、されば女史は負けぬ氣といふ精力、妙齢の頃にも顯著なりき、女史十五歳の頃、醫家勝田三雪の家に遊びしに偶々座に二三の客あり、談の繪事に及ぶや、女史曰く妾不敏と雖も一晝夜に千張を畫くを得べしと、座客之を難しとす、女史曰く能くすと勝田氏快と呼び起つて倉庫より唐紙を出し一枚を八葉に裁ち、立所に千紙を作す、諸客曰く、我輩座に在りて之を撿視するは頗る困却の事にして且卿蒲柳の質爲に身體の疲勞を來すなからんやと北堂亦傍に在り諫めて已まず、是に於て晝夜を徹するの議を廢し、更に時辰器を以て十二時間を計り、二日にして之を了せんことを約す、翌日早朝より毫を揮ひ黄昏に及んで罷む某氏傍に在りて捺印の勞を執れるに揮毫の神速殆と纔

承に違あらず、第二日の午後日尙ほ高きに千葉の畵悉く成る、諸客手を叩いて嘆賞し、これより女史の名聲一時に嘖々たり、昔浪花の西鶴一日に二萬三千句を發して二萬翁の名あり、女史の逸事と古今一對の佳談ならずや、これ女史が達筆の致す處なるも、不撓不屈の精力を存せずんば焉ぞ能く斯の如き大事を作すを得んや。

女史は美術に刻苦したるのみならず、浮世の辛苦をも嘗め試みぬ、曾て名古屋にある時、父春岱病に罹り親子三人旅中にありて藥餌の料も亦辨する能はざる事もありき、女史病床に侍るの餘暇筆を揮ふて僅に其の料を支ふを得たり、父沒して後は母子二人閑居し、一枝の筆によりて衣食せり、然るに女史容貌の淸秀なると家嚴が鍾愛に餘りに衣服美麗を極めしと、今や母子女姓の生活を侮り、汚名を以て之に加ふものさへあり女史之を聞き、形を飾り容を修むるは女流の爲に倣ふが故のみ、苟も一藝を修めて世に立たんと欲するもの豈裝飾姿色に由らんやと、忽ち羅綾を廢し釵を捨て髮を束ねて復た脂粉を用ゐず、一種特異の容姿を爲し齡二十二三に至りて再び女裝に改めたりといふ、此間世路の辛酸察するに餘りあり、女流にして世に處するの至難なるを知るべきかな。

女史が其技の大成したるは偶然の結果にあらず、女史は今日一般の敎授の如く機械的に技藝を習ひしにあらず、幼より其嗜好に任せて書帖を摸寫し自づから發明工夫を用ゐたり、女史が京都に出で、日根野對山翁に就きし頃は、已に一家を成して世評女史に許せしもの多かりき。

女史亦書齋に呻吟して空想を畵くを欲せず、常に好んで漫遊をなす、曰く美術は造化自然を師とするに如かずと、良人と共に東海、東山、北陸の地を跋渉し、所歷の名山大澤、藉つて以て雅趣を啓發す、所謂風月を

展開して詩料に添え、江山を裝點して畫圖に歸す、則ち天地の粉本に則り自家の工夫精研によるものなれば女史が山水畫に秀逸せるも亦偶然にあらず。

女史の畫風は南宗に屬すれども所々北宗の趣を加味したる點なきにあらず、氣品高尙なるは女史の特技にして、往々剛勁の筆、軟媚の態を見ず、優に男子を凌ぐの致あれども、深く點撿せば纎手に成る處亦蔽ふべからず、方今都下に南宗の名手に乏しく女史と比肩すべき畫家は野口幽谷氏、なるべし。

女史が幼より今日に至るまで繪畫を以て一貫したりしは、家庭敎育其宜しきを得たること多きにあるべし、父春岱女史が四歳の比痘瘡に罹り病蓐にありて筆紙を請ふに任せ早くも女史の嗜好と天性とを看破し爾來斯道に赴かしめ毫も束縛するところなく益々誘掖奬勵したり。

繪畫の外女史は詩及書に巧なり、書は幼年の頃父に學び父沒して後書法帖に依て自づから研究し楷書は顏眞卿を慕へり、妙齡の頃京都に於て小林卓齋の門に入り漢藉の敎を受け詩は東京に於て岡本黃石に學びぬ、其詩二三を錄す。

題畫

秋滿江樓上。詩思倚曲欄。水光兼月色。
併入繡帷寒。一星遙岸煙。十里歸舟客。
疎鐘沈入雲。月與蘆花白。漁笛一聲起。
沙灣繫小舟。芦邊夜潮上。雁影月俱流。

春寒

日養踈慵掩碧紗。窗中只怯峭寒加。
園梅凍殺鶯聲澁。却見枝頭舞雪花。

黃石先生席上分得小字

前樹雨巳過。遠渚雲猶遶。依稀垂柳邊。
隱見畫樓小。
風葉晚蕭々。落陣懸樹杪。天遙過雁高。

江濶去帆小。

女史眉目研秀擧止洒脫の風あり、人に接する温和にして且つ言辭に妙なり、吾人は甕江川田氏が女史の東遊を送るの序を引きて其人物を見るべし。

閨秀之能文墨者。大低言語動止類丈夫。覺而目可憎。獨小蘋女史則不然。女史善畵山水。兼工花卉。而其詩之與書。亦頗有可觀者焉。今玆甲申夏。將携彫管東游。請余致書於沿路文士爲之先容。余不肯執筆曰。子婉々不挾藝傲物。人皆見其可愛。不見可憎。何用先容爲。雖然子試告人以此言。則其不先容之效。或愈於先容。亦不可知也。女史拜謝。乃書以贈別云。

女史一女あり小蘋と號す、亦母に學んで畵を能くす、門人にも秀逸者多し。

恐しい鞭

先生「心をつかふ人は何で働く
生徒「頭で
先生「然らば勞働する人は
生徒「手で
先生「然らば私がお前達を教授する時は何で
生徒「恐ろしい鞭で

和洋禮式

日本禮式（婦人の態度）

我國の禮式は活花、點茶等の如く數流數派に分れあるにあらず、足利時代以降斯道にも數派を生したれども現今日本禮式として一般に行ふべきものあり順を追ふてその要領を記さん。

（一）途中行逢ひの禮

途中行逢ひの禮式に三樣あり、即ち目上の人が目下に對する禮、同輩の人の禮、目下の人より目上の人に對する禮是なり。

先づ同輩の人の行逢ひの禮を言はんに、途中にて相知

れる人に行き逢ふ場合には、双方より徐々に進み其の間の二間の距離位とならば双方左へよけ斜に向ひ遇ひて(其距離一間半)禮拜を行ふべし、禮拜は素より途中の事なれば立禮にして、姿勢を正し兩腕は眞直に延ばし指先の膝蓋骨の上に至るまで手を下げて禮拜すべし必らず膝を折るやうの態度あるべからず、膝を折るは誠に姿勢の見苦しきものなれば暮々も注意すべき事なり、又手も膝蓋骨を過ぐべからず、同輩の禮の眼目は玆に存するものと知るべし



又頭を下げるにも頭だけひよいと下げるは頗る不躰裁を極むるものなれば胴と共に共同の運動をなすべし、こは立禮のみならず、座禮にも頭のみ下げて襟元を人に見するは失禮なればなり。

目下の人が目上の人に行き遇ふ場合には、目上の人の姿を見るや、少し早足になりて出迎の態度を取り、其距離二間にも至らば大きく一足引きすざりて同輩の拜禮の姿勢により先方の通行を待つべし、目上人其前に來らば指先を膝蓋骨より少し(丁度掌の膝蓋骨にかぶさる位)すべらして拜禮すべしこは最敬禮にして貴人に對する場合のみと知るべし、但し餘り手を膝より下へ卸ろし過ぎるも、却つて禮に適はざる嫌あれば此邊最も注意を要す、先方過ぎ行ぎなば元との姿勢に復し(同輩の拜禮)一間位の距離となるまでは其處に立ち止り、それより歩行に移る。

目上の人が目下の人へは、右の場合の通行の際、先方が最敬禮を施せし時、少しく頭と共に體軀の上部を前に出し拜禮を請て過き行くべし。

西洋禮式（男子の態度）

途上

途上に於て男子が爲すべき一の規則といふは、人殊に婦人に行き逢はゞ右方へ避くることを忘れ又怠るべからず、何となれば婦人は途上にて右方へ避けて自個を保護するゆゑ、男子も之と衝突せぬやうに注意し右へ避けて婦人のために道を開きやるべし、これは男子が纎弱なる女流に對して爲すべき義務なり。

群集せる市街に於ては婦人の後にありて諸人の押し來るを防ぎ及ぶだけ婦人を保護する義務をも有すれども決して男子は其手を婦人の腰邊に觸るべからず、一手を婦人のどちらかの肩の邊に置けば十分なり。

知人と行き逢ひたる場合には婦人は帽子を脱せず（年長者或は貴人の外）唯點頭するのみにて可なれども、男子は帽子を脱せざるべからず、すべて男子は婦人に對しては年長者或は貴人に於ける場合に等しく何事も先方の承諾を得るといふ處に心を用ゆべし、又男子の態度は決して婦人を無視することなく、其間を待つかの如き趣あるを要す、內氣にして交際になれざる若き男子は知己の婦人に出遇ひて知らぬ顏して通り過ぐるものあれども、かゝる擧動は婦人を輕蔑せしものと誤解せらるゝ事あり、然れども婦人を赤面せしむるやうなる粗暴の擧動あるべからず。



握手の禮は婦人より手を出すまでは靜に待つべし、これは年長者又は貴人に對する場合と等しく、先方より手を出さば輕く拜禮して握手すべし但し腰をかゞめて低く拜禮をなすは國王陛下が、皇太子殿下へ對する場合と知るべし。

社交一斑

流行案内　　流行子

冬衣の案内

追々冬物を仕立つる時節到來したれば、此の冬に流行すべきものを豫報し置くべし。

男子用外套

には鳶合羽が第一位を占む、これに三種の形あり、一を英吉利形といひ、二を普通形とひ、三を角袖形といひ、此内最流行を極むるは英吉利形にして、こは後に帶も襞も無く誠に淡泊したる形なり、此形は所謂黑人向にして、澁味を好む人に愛用され、銀行員會社員の類は殆ど皆な此形を着用す、次に流行するは、普通の鳶形にして即ち後に帶と襞の有るもの一般を通じて行はるれど、そろ〳〵地方に隱居するの傾向ありこれに續いては角袖形なるが、後に襞を付けたるものと、側に襞付くるものとの兩樣あれど、注文多きは婦人の合羽同樣襞の無き方なりといふ、而して此形を着用する人は四十以上の老人にして壯者には甚だ不向なり。

偖て以上三種を通じて流行の地質をいへば、第一鐵、鼠の霜降繻子綾羅紗、第二同斜綾、第三黑紺の斜綾、第四黑紺の珍綾、第五縞羅紗及び縞蘇絨、等なりとす、今假に第一の鼠霜降繻子綾の表に茶のブラシ（天鵞絨の毛の長きものをいふ）か又は古代小模樣の繻珍の裏を用ゐ背に襞を付け形を英國形に好まば四十圓より四十五圓位なるべし、次に霜降の斜綾の表に、紺甲斐絹の裏を用ゐ形を普通の鳶に好まば十七圓より二十五圓位までにて調へ得られん、次に茶の無地羅紗か黑の綾羅紗の内にて甲斐絹の裏をつけ角袖の襞無しに作らば十四五圓より十七八圓位なり。

婦人外套

次には例の吾妻コートなるが、數年前白木屋にて創案せし以來大に世人の嗜好に叶ひ昨年來より頓に一般の流行を來たすに至れり、偖て本年流行の柄合は黑紺の格子綾及び紋織綾羅紗等を以て最上なるものとす、次には鐵、鼠の斜綾羅紗にして、裏は無論無地の甲斐絹を用ゐたるものとす、又結び紐は表に相當の梅結びか早蕨結が一等にして襟は被布形を善しとす、その價格は大抵（上）二十圓（中）十五六圓（下）十圓前後なり。

洋服

フロクコートの地質は黑は縞絆綾羅紗及無地羅紗の表に、黑の綾絹を裏

になし、袖裏に縞の綾絹を用ゐたる、三つ揃ひのもの(價格三十五圓)第一位を占む、次に上着は右のまゝにて、袴だけ黒地の立縞に撰まば何れの場合にも着し得られて調法なり。

次に、モーニング、コートは上着を黒紺の太綾か又は珍綾或は鼠霜降縞絆綾羅に好み、袴を縞羅紗の朧氣なる中立縞になし、裏に上毛繻子か又は綾アルパカを用ゐ、袖裏を縞の綾絹にしたるもの最もよく、襟幅廣く胸側狹やかにヅボンの膝を太くし先端を細くしたる形着して頗る引立ちよし(三十圓前後)

脊廣の形にては兩前形最も盛に行はる、其の地質は黒紺の玉ヘル、厚地メルトン、鐵の霜降蘇絨等にて三揃に仕立つるか、又は袴のみ堅縞のスコッチに好み裏を上毛繻子になし、價二十圓より二十七八圓位のもの多く流行す。

次にオーバー、コートは總ての場合に用ゐらる、樣さて無地羅紗を撰ぶもの多きが如し、裏には綾絹(これにて二十四五圓)又は毛繻子(これにて十五圓より二十圓)を用ゐるを耳さす、此形の丈は餘り長からず又短からずして、膝より一寸程下がりし格構を昨今の流行なりさす。

ロンク、コートは防寒用衣服なるが、表を黒紺茶の駱駝織玉羅紗に造り、裏を格子縞の縞セルになし、獺の皮を通し襟さ袖に付けたるもの(七十圓)最上等なるが、裏を茶ブラシにし或は獺の皮にしたるも可なりに流行すべし。

女　羽　織

縮緬第一にて、色は黒七分、小紋二分、色物一分の割合なり、而して紋は黒縮緬ならば三所紋六分に對する五所紋四分の割合、小紋及色物ならば三所紋八分に對する五所紋、僅に二分の割合なり、紋の大きさは五所紋にて八分より九分まで、三所紋にして七分五厘より八分までとす。(二十圓)

第二には黒の紋羽二重の五ヶ所紋着く(十七八圓)、第三老人向には七子綾の三ッ紋を撰むべし、色は八分通りは黒を好めさ、壁鼠、新利久なぞも可なりの賣口を有す(十七八圓)。以上婦人の羽織さして無双仕立にするものは無幅黒なるが、脊裏の摸樣には、籬垣に菊、稲穗に雀、朧月に秋草、等宜しく、妙齢の乙女には紅葉狩、源氏摸樣、亂れ牡丹なぞ可愛氣なるもの專ら流行すべし、胴裏は何れも純子にして顔織摸樣付が珍重さるべし。

男　子　の　羽　織

無双羽織には第一紋甑精、第二羽二重、第三縮緬、第四京七子、第五八王子七子の五種ありさす、色は無論黒にして、紋は九分より一寸一分ま

でを五ヶ所に染め出し、脊の摸様か富士に上り龍、桐に鳳凰、大極殿又は金閣寺の眞像、雨後の松月、雨中の筏舟、忠臣藏七段目、元祿踊り、湊川三界讃、三笠山に月、等の歴史、風俗又は風景を寫せしもの最も流行す。

縞羽織には唐貴織流行の第一位を占め、殊に澁味を好む人にはこれに限るが如し、これに次ぎては結城紬、甲州紬(俗に唐糸織といふ)等もよく胴裏は紺甲斐絹一般に向けども、鐵無地の純子專ら流行す。

毎年十一月十五日は男女共小兒の祝賀日なれば、皆な競ふて綺羅を飾り合ひ宮參りをさすことなるが、今年流行の衣裳は大抵次に記す如くなるべし。

男子五歳の祝衣

二枚襲の上着は羽二重を黒の熨斗目模様二つ紋に好み、下着は同地質を澁柿、濃玉子、新千歳、壁鼠、等に染め、之を無垢に仕立つるなり(無論上着の裾廻しも之を用ゆ)、而して襦袢は白縮緬に雲龍又は竹に虎、牡丹に唐獅子、或は柿色に白の破格子と崩牡丹、又は御納戸地に眞垣の菊を染め出せしものを胴と袖に用ゆ、帶には繻珍、又は博多の錆茶地、漂色の寶繋ぎ等の古代模様を好み、袴には仙臺平の鬱金糸の入りし亂立縞を撰み、而して羽織を紋鹽瀬にするか又は羽二重になし、若しくは又た縮緬を黒の五所紋の無双に染めて、着せば可憐高尚優美温雅なること此上なかるべし、借て着物の熨斗目模様は、地色を白茶か澁柿、又は澁利久になして、模様に霰格子、古代鶴、古代河原、龜甲繋ぎ、寶崩し、養老の盃等は白木屋に於て注文の多き品なり(七十圓)。

女子の七歳祝衣

最上は縮緬の三枚重にして、次は同じく紋付の二枚重か又は幽仙のかはり裾の二枚重なり、又其次には御召或は糸織の甲斐絹裾の二枚重なり。

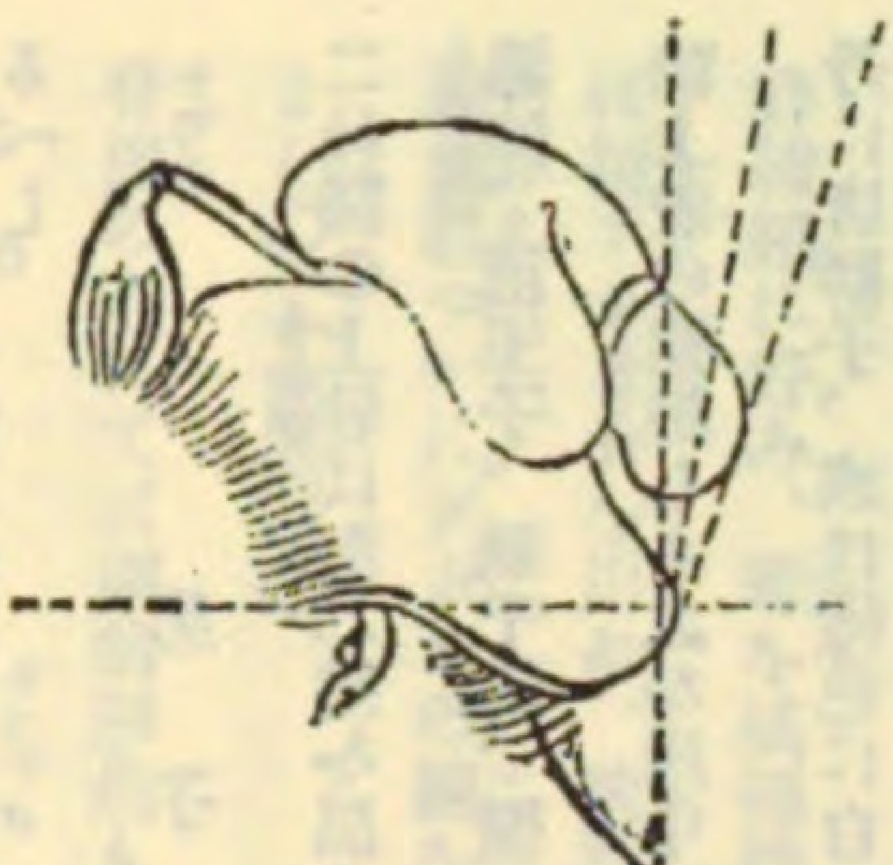
三枚重　上衣に藤色、鳩羽鼠、黒、古代紫、等のボカシ模様を用ゆ、但し黒及古代紫なれば白茶か澁利久にぼかし藤色及鳩羽鼠ならば澁葉柳か鴨川鼠にぼかしたるが最も良し、模様は無論裾と袖にあらはすものなるが、下着二枚を上着と友模様にするか又幽仙を無垢にせしものを好む

次に帶は厚板錦、蜀江錦の黒に兜に紅葉、眞向菊、寶來山、菊水、御簾に菊、瀧に松、等を撰びて上帶には紋縮緬、又は鹽瀬を特に上帶丈に染めしもの、色は鬱金、淡紅、紅、赤なぞの内を求むれば申分なし、以上一組の價上等百三十圓、中等百圓、下等七十圓位なり。

二枚重にして帶を糸錦又は繻珍に(七十圓より四十五圓)するもよく、次きにお召又は糸織の二枚重にて帶を木國錦にするも一般中等以下の少女には多く行はる(三十五圓以下二十五圓以上)。

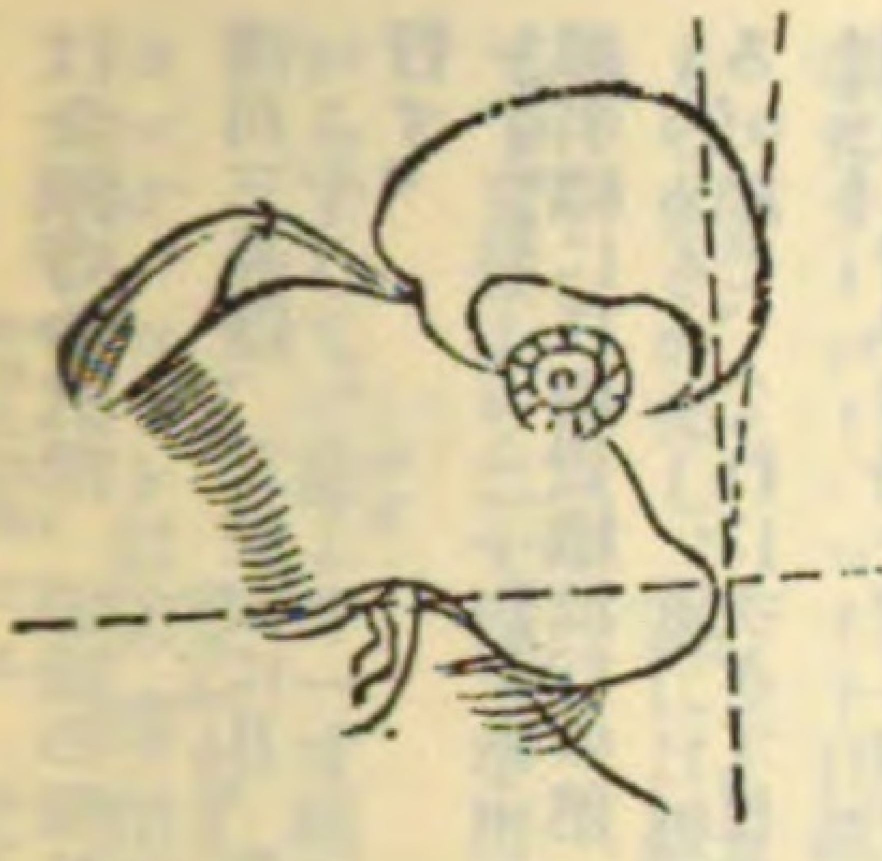
日下の髮風

夏向髮風は至極輕淡なるを好み洗髮の櫛卷か、油氣なしの束髮か、精々銀杏返しといふ所なるが秋風立ち初めては髮のほつれ毛を風の柳の糸に



島田髷

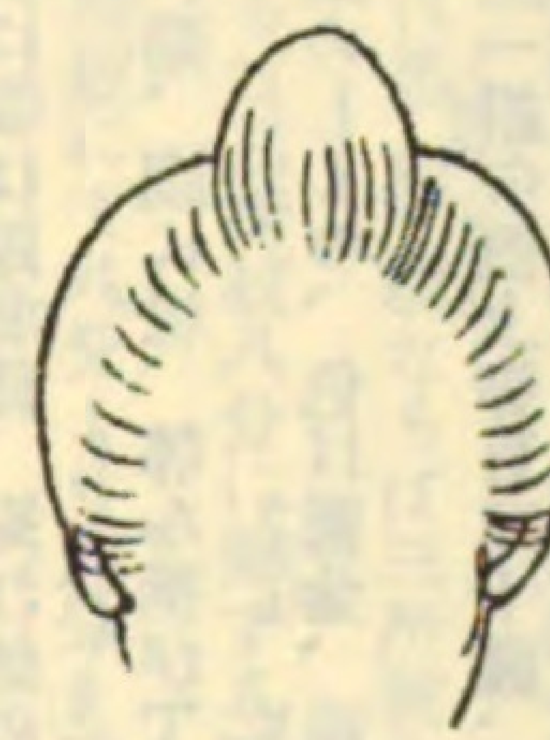
任せ置くも如何しければ綠の黑髮これから一入美しかるべしさて髮の具の復古と等しく髮の風も次第に昔の風に復へるの傾向あるは必らずしも人心が復古的保守に傾きたる現象にあらず、古來日本の昔風には三百餘種ありしが明治に至り細君は丸髷、處女は島田と限れるやうに甚だ單純なりしがば人心の倦厭を生じ何か異つたものとの好みより昔の髮風を



丸髷

彼れ是れと結び試むもの多し、されば今日種々の髮風が目につき何だか世の好尚が復古するやうなれど忽ち之を見て國粹的と化し了れりと斷言すべからずたゞ古風の內にて新しきものを求むる好奇心に出づるのみ。

島田は品格能き中高流行すれど文金風は好ます、つぶし島田は一部の社會に行はるゝのみ、近來ゆいわた能く見受くるが野暮の風でも趣あり



長髮長顏

八百屋お七か白木屋お駒といふやうな中以上の商家の娘が絞りばなしの帶上でもしたなら似合へど髮屋の娘までが此風あるは頗る不似合なりめうと掛島田はいちは普通の島田にして前がつぶしになり毛にて其上を綾なしたるものなるがこれも弗々見受らる。



短髮丸顏

丸髷は矢張結婚早々の細君の大一番盛に行はれ、形に歌舞伎形、牡丹形、雀形勢力を占む、丸髷に似たる勝山（手柄を見せず根を低く結ぶ）は藝妓等の道樂に結ぶ。

銀杏返し桃割、唐人髷孰も大振、髷のふつくりしたる風、此三は十四五歲より十七八迄盛に行はれ二十を越せしものすら桃割を結ぶ、これは近來若造りの結果か。割からこは年增の師匠社會に見受くる處なれど近來槳三を結ふもの追々

見受く、意氣がりはおたらい、おさふれ等おばこ相變らず。天神は目切廢れたり、輪なし天神は卑しき髮風なるが藝妓社會の洒落に結ふ、おしやこなども見受くれど是等は決して學ぶべからず、松葉返しは久振年增の女に見え、三輪も可なりに行はる。十歲以下の女の子に樂座下又は蝶々髷中等以下に流行し、上等社會にちご髷廢れたり、銀杏に毛をかけて女夫と稱するもの流行す。惣して鬢はつまりし方なれど今春までのやうに吊し猫のやうにぐいと引つめたるにはあらず幾分か緩になりたり。髱も詰りし方にて今髱と髷との角度を示せば、髱の尖端を起點(垂直線の足)とし島田髷の下端には百度位の鈍角を爲し、丸髷の下端には九十五度位の鈍角をなす、即ち髱は島田よりも丸髷よりも引詰り、又下にさがらず髱の尖端と耳朶の附根とは直線を爲せり。前髮は其人の顏の長短(長顏には短く丸顏には長く)により或は鬢の長短にもより、長ければ大きく取り、短ければ少さく取つて次第に大きくし、又雁金のある人は太くとり、なき人は細く取れど、總して前髮は細く起り奥へ行くに從ひ銀杏葉形に廣がり、髷の上端に比し五分方も低き風流行す。

冬帽子

山高は矢張り舊來の形にて差したる變化なきも今春までは山低く鍔も極めて狹きこと流行したるに反し鍔の鍔に廣がりたる觀あり(山は矢張り低し)色は黑第一等にして焦茶も可なりの人氣代價は二圓五十錢より四五圓の處需用者多し中折も舊來より山低く鍔廣がりしものを好む色は黑、濃茶、紺茶等最も人意に投ぜり價は一圓五十錢より四圓、其他中折はの變形にてちよこ形と稱するもの大に流行す、色は紺に限れるが如し此流行は重に商家の手代又は一部の書生社會に持て囃やさる鳥打帽は頭部のまろくふつくりしたるホーク止め相變らずの流行色合は黑か紺にして縞物は皆無の姿なり地質はブラシと綾羅紗との二種を最も多く見受けらる(代價五十錢より一圓五十錢內外との由)

七寶燒

七寶燒は其始め西洋より舶來せしものなるが今は却つて日本特有となり我國の製品能く西洋人の嗜好に適すれども未だ日本人一般に普通せず、目下行はるゝものは無線七寶、有線七寶、消線七寶の三種にして如何なる器物にも應用しあり、此道の熱心家京橋區彌左工門町近藤七寶商店にては髮具其他婦人の日本的裝飾品の製造に目下考案中なりと。

雜　錄

近時小說に於ける女性（下）

當年無邪氣に水車の見廻り、畑耕作綿打の賤が手業に餓えず凍えず、父と二人樂しき家庭に其日送りゆきし可憐なるお瀧はあらぬ際に戀初めて、愛しき我が子は生みながらその子を育て難く、夫には添ひながらそれと共に棲み難きに至り、さてはあはぬ昔の戀しくもあるらん身の上となりぬ。

露伴子の筆之を描きてことに情感に富み、讀者の同感を惹くこと深し、元來此の如き純潔にして眞情人に迫るの女は今の世には稀なるべし。稀なりと雖もまた絕えて無きにはあらず、讀者須らくお瀧の品性境界を仔細に點撿して、依りてその運命の歸する所を視ば、蓋し之れを現實社會人生の上に感得する所少からざらむ、貞松院の重春に對する教訓、若しくは重春の繼母伯爵夫人樟子の隱見せる性行等露伴子の筆は少からぬ訓戒と反省とを讀者に供す。「つりあはぬは不緣の基」といふ俚諺あり、重春とお瀧の上に於て此消息を窺ふべし。坪井逍遙子の作に、此着想もて描きたるもの「妹も脊鏡」あり、子が作の傑出なるもの、水澤達三といふ書生と魚屋の娘お辻とを配せり、結撰周到人情の微に亘りて諷誦に足ると雖も、お辻の性格はその市井の女、多少世情を知るの傾向ありて、お瀧の純潔無垢の同感を呈する多きに如かず。吾人は女性の讀者が、此お瀧の上に於て、必らず人生の一面を了得すべきを信ず。若し桃水子の「夏蟲」に至ては、當に大に輕々しき放逸なる戀愛心が、一旦の過失を招き、千悔萬恨また竟に回すべからざる境に沈淪する運命を處女の性行に視るべし。

幼なうして母を亡ひ、父も其砌より病に罹り、保養の

為京都なる嵯峨の別莊に隱れ、其身は藤浪男爵の未亡人なる叔母夫人のもとにありて、慈愛をうけ、二十の妙齡となれる美人梅園子爵の女妙子。從兄弟の緣より末は洋行留學中の藤浪の一子夏雄の妻と定まれる身なるに、同じ從兄弟の義ある山の井男爵の子春雄といふ放蕩の末女をとらかす惡念を顏の美しさに蔽ひ、狠の心を羊の衣に包みたる輕薄兒に戀ひ初め、夏雄歸朝後叔母夫人と三人打拉れて京都の父の病を問ひて其臨終の遺言により夏雄と結婚式をすませし身の、墓參の歸途春雄の誘ふ所となりて竟に其手中の人となり、貧苦を市井の間に嘗めてなほ且悟らす、やがて知るものに見出されて藤浪家に引もどされしが其懇切深情に感じ良心の痛苦甚しく慚愧の念は精神を激動して狂に近く雙眼を自ら失ひたるも、しかも情緒を春雄に絕つ能はず。厚き看護に癒えたる頃また春雄の誘ふ所となりて再び市井の窮巷に困むの身となりぬ。此間夏雄は梅園子爵の遺言を守り、眞情流露妙子の罪過を咎めず、既に一度その全權公使の赴任所に伴はんとせる程なり、かくて二年の月日は過ぎぬ。春雄は遂に妙子を捨てたり。妙子は始めて其惡を知りぬ。知ると雖も既に遲し。

春雄の底意を、知邊とせるお若に聞きたるとき、胸もはり裂くばかりなる妙子、はては眼を閉ぢ首を低れ、死したる人の如くなりけり。春雄が幻影は朦朧として眼前に映りぬ。されど今まで悄然として哀れみを乞ひしに似ず、凶獰の狀恐ろしく、冷眼に妙子を睨め、笑つて眞紅の息を吐きぬ、同時に顯はれし幻影は、良人藤浪夏雄にして、いつに變らぬ溫和の相貌、汝が最も慕ひし人は、果して汝を害はざりし乎、汝が最も疎みし人は、果して汝を惡まざりし乎、と今尙諭すごと懇なり。彼に向ひては悔やしさに泣き、是に對ひては忝けなさに泣ける妙子。嗚呼妾は玉を捨て石を抱き、正を去て邪に就きぬ。慈愛なる養母に背き、篤實なる良夫を欺き、家を辱しめ、親戚を辱かしめ、延て同族を辱かしめたり。世には淫奔の女子も多し、而も妾に如かんものゝあるべき乎。と思ひ去り思ひ來り、恨凝つては腹も立ず、悲み極まりては淚さへ出ざりけり。

妙子の心の聲は思はず叫べり、「母上さまお許し遊ばしませ、私が是までの罪過、御勘辨の出來ない處を、亡父樣の遺言に免じて、元々通り夏雄さまの、嫁に遊ば

して下さいましたのは、お慈悲とも、お禮の申上げやうはございません」とさらに春雄に對する滿腔の恨事を獨語し終にまた他の一眼を傷盲せしむ。かくて妙子は零落果敢なき女按摩となりぬ。一日橋場近き新しき別莊に呼びこまれて。其夫人に歎待せられ、強ゐて抑留せられ、室を與へられて長く住まるべきに定めらる。錦裀絹蓐、妙子は堪ゆる能はずして辭し去らんとするも許されず、即ちおのれの緣由ある人の家なるを知るとゝもに、慚愧の念深く怏々として寢食も安からず、遂には重き病ひに臥したり。看護厚きに伴ひて病一層重く、人事不省となりてまた蘇せり、既にして起つべからざるに至り、強ゐて看護したる夫人の名を問ひぬ。

答へは妙子が最も親しき聲をもつて與へられぬ「妙子さん私の聲は分つて居やう」「ハイ」湧き出づる淚を呑で、覺束なくも答ふれば、「汝を永く看病したのは、元の小藤冬子さんです、(妙子の摯友、)又汝が最も愛して、返報に最も酷い取扱を受た人は、同伴の女に擬塞られて、發狂の上死だことが、今日電報で知らせて來た、」妙子は輕く首肯きしが更に青く透き徹る程、痩せ衰へし双の手を伸べ、一は夏雄の手に加へ一は冬子の手を把て、覺束なくも笑を含み「お母樣に、イーエ彼の叔母樣に、どうぞおわびを」言畢って再び語らず永眠の人とはなりぬ。

是を「夏蟲」の要となす。之を「新羽衣物語」に比するときは、彼の自然渾成なると異に大に不自然なるところ多し。妙子が敎育あるにも似ず、許嫁の夫あるにも拘らず、如何に美男なればとて、如何に巧言なればとて、春雄に戀ひそむるの因由動機、作者の描きたるところにては足らざるの感あり。隨て讀者をして同感をなさしむるに缺くる所も生ずべし。されど、戀愛の發動は、時來らばすべての障害を除きて、其機を生ず、戀愛に爵位なく、階級なく、王侯なく、道德なく、義理なく、毀譽榮辱名利無し。此等のものは唯その戀愛を羈絆し牽制するに止まりて、遂に之に依て戀愛を滅却することと能はざるなり。故に桃水子の描く所、もとより足らずとするも、此點より推究するときは、強ちに不可と

すべきにあらず、則ち妙子の如き女性の現實に無しと斷ずべからざるものあり。「戀に上下の隔て無し」とは、淺薄なる俚諺なれども、此意を擴充して戀愛を推考せば、蓋し淺からざるの理を含む。まことに戀愛は勢力なり、罪過に對するの勢力なり、道德に對するの勢力なり。恐るべきものは戀愛なり、敬ふべきものもまた戀愛なり。人生運命は一面に於て常に戀愛の作用に由來す。「夏蟲」は所謂戀愛の勢力を罪過の上に現はせるものなり。吾人は其續物の窠臼を脱せざるの筆弊ありて、間々小說たるの自然を損し、結構の形似痕跡あるを認むと雖も、之を以て其描きたる着想の在る所を沒却すること能はず。讀者は宜しく妙齡の處女が戀愛の發動の爲に、罪過に沈淪し易く、而して運命の非を招致することあるの點に留意すべし。

小說を看る須らく着眼を要す。作意を捉へんことを要す。これ情感に同じ易き女性の讀者に在ては、最も緊要の第一とす。今の作家に望む所諸種の點に於て元より少からざれど、家庭に小說の入ること多きを顧みて、吾人は其美文として價あると共に、また感興を供すること高雅に、安慰を給して穩秀に、哀で傷むに至らず、樂んで淫に至らざるの製作を希望す。家庭よりして小說を排斥するの聲を高からしむるは、決して文學上の慶事に非ず、又美文界の福祉には非ざればなり。

此他中谷無涯子の作「このてがしは」は家庭小說として讀み得べきものなれど、今は之を畧す。

世界第一と誇れる北米合衆國（下）

◎水路　北米合衆國水路の盛大なるは、以て國勢の一斑を窺ふに足る、第一に有名なるグレート、レーク（湖名）は面積九萬四千一百方哩を有す、即ちニウヨーク、ニウ、ゼルシー、ペンシルベニヤ、及びデラウエーア等の諸州を併せたる大きさにして、地球上淡水の總量

三分の一はこゝに堪えらるゝといふ、次に倘ほ一百九十六の湖水あり、その面積は遙かに前者に劣ると雖も亦た要用の水路を搆成す、其他に六十五の河流を有す何れも百哩以上の長さあるが、就中最大なるものはミシシッピー河にして、その水量は全歐陸の諸川を合したるものに等し、而して此河の長さは舟揖の便ある土地のみにても、二萬哩以上に達す、是れ地球周圍の哩數五分の四に相當する所なり、オハイオ河の船賃は世界の各所に比し最低廉のものなりといふ。



◎合衆國の郵便　郵便事業は其國人民の進歩文明に伴ふ所のものなり、合衆國の如きはその盛大賑盛なることと恐く世界に冠たる所にして、郵便局の數のみにても七萬〇三百六十を有す、合衆國に次ぎて盛大なるは日耳曼なりといへど郵便局の數は僅に三萬三百七十二に過ぎず、全世界に於ける書狀の總數は八億萬通の大數なるが、合衆國のみにて實にその大半數を占む、人民の書狀を總計する時は、大英國、愛蘭、日耳曼、佛蘭西、西班牙、瑞典、露西亞の諸國を合せたるの大數に等しく、而して叉た郵便物通路の延長を算する時は、四十五萬四千七百四十六哩に到る、是れ地球より月球に往き再び歸り來る大距離を示す所のものなり、此の隆盛なる郵便事務の經費を撿すれば、一年間（一千八百九十六年より仝七年に至る）九千一百八十一萬九千五百五十七弗の多額に上る即ち政府は一人につき一弗三十錢を下賜せる割合とな



る、而して年々每一人が送達する郵便物は平均一百二十五件なり。

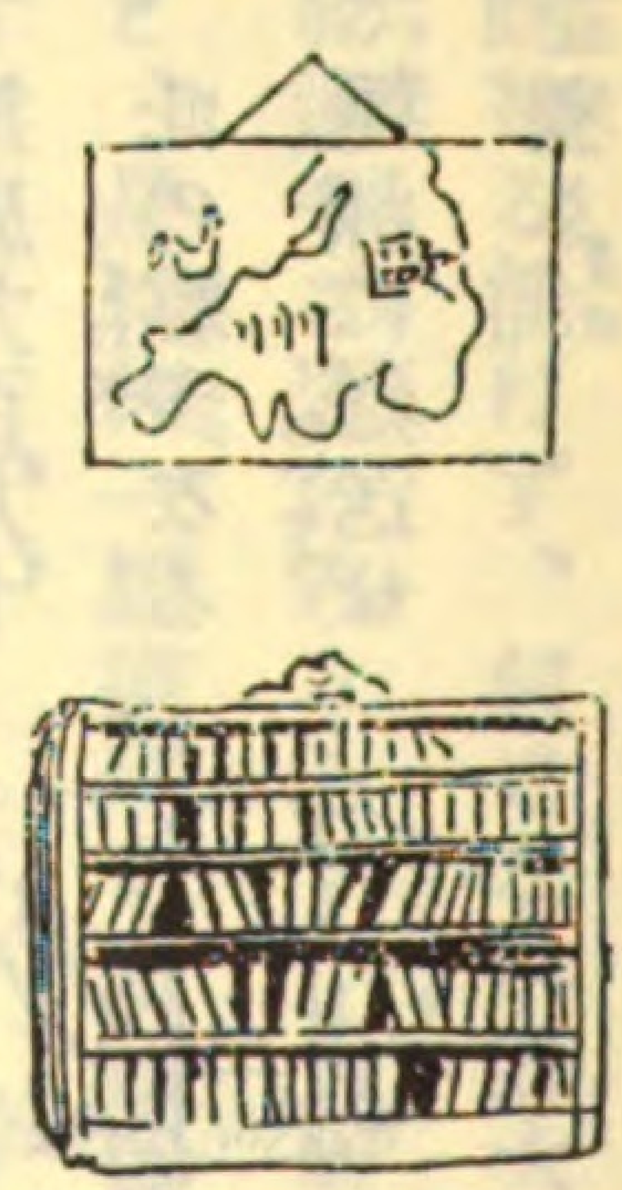
◎亞米利加の學校　亞米利加文明の榮譽とする所は學校の整頓にあり、住民總數の二割三分即ち一千四百五十一萬二千七百七十九人の多衆は、國内各所に散在する公立若しくは私立の學校に通學せり、日耳曼は教育事業のよく進步したる國なれど、人民の通學するもを計れば僅に總人口の一割九分を有するに止まる、それより英、佛二國の如きに至りては、唯だ一割六分半の小數を保つのみ、又た亞米利加の修學年期は他の諸國に比し頗る長しといふ、合衆國の學生にして私立學校に通ふものは唯だ僅かに其の八分の一位なれど、



英　獨　米

英國に於ては私立八分の五公立八分の三を占むる割合なり、千八百九十年公立諸學校の經費合せて一億四千萬弗以上に上り、平均一生徒に一千百五十弗を費す割合にて、千八百六十九年より千八百九十年に至る二十一年間に學校新築費に一千萬弗を增加し學校經費に四百萬弗を增加したり。

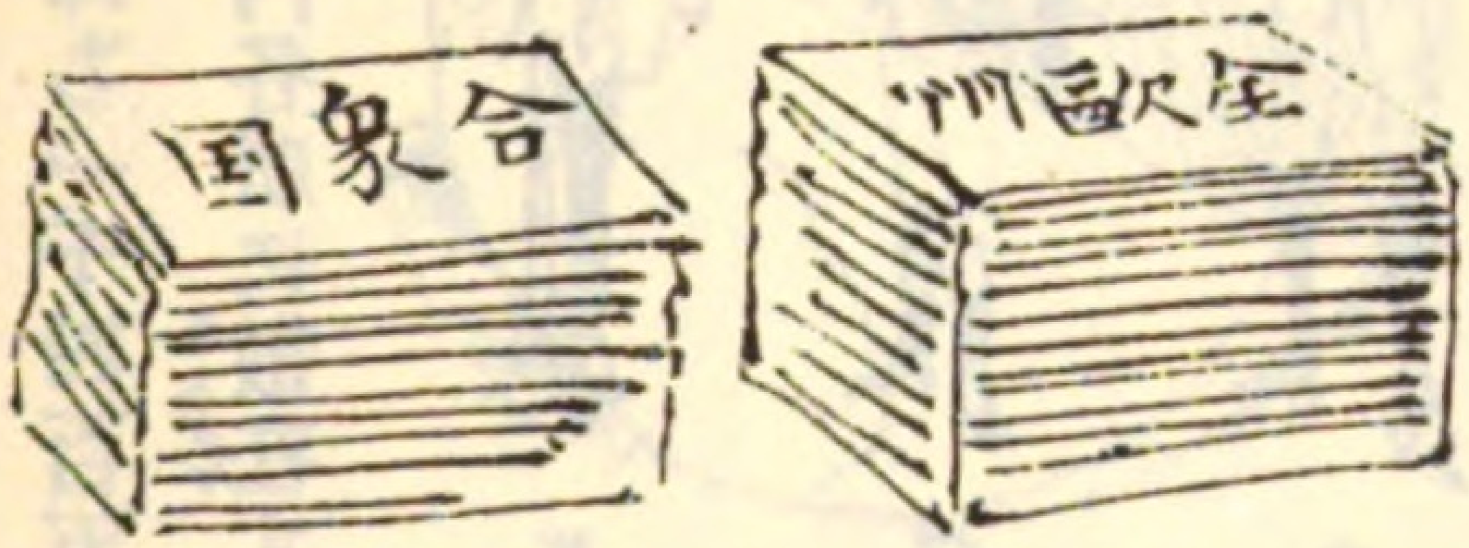
◎國立圖書館　世界中如何なる國を見ても、北米國合衆國の如くよく進步したる圖書館を設けたる所あらじ、當初三千八百〇四ヶ所の公立圖書館を有して、其藏書僅に一千卷なりしが千八百八十五年以來益々進步增殖を致し一千八百九十一年の頃には八百十七所と一千二百十一萬一千二百八十卷の書籍を



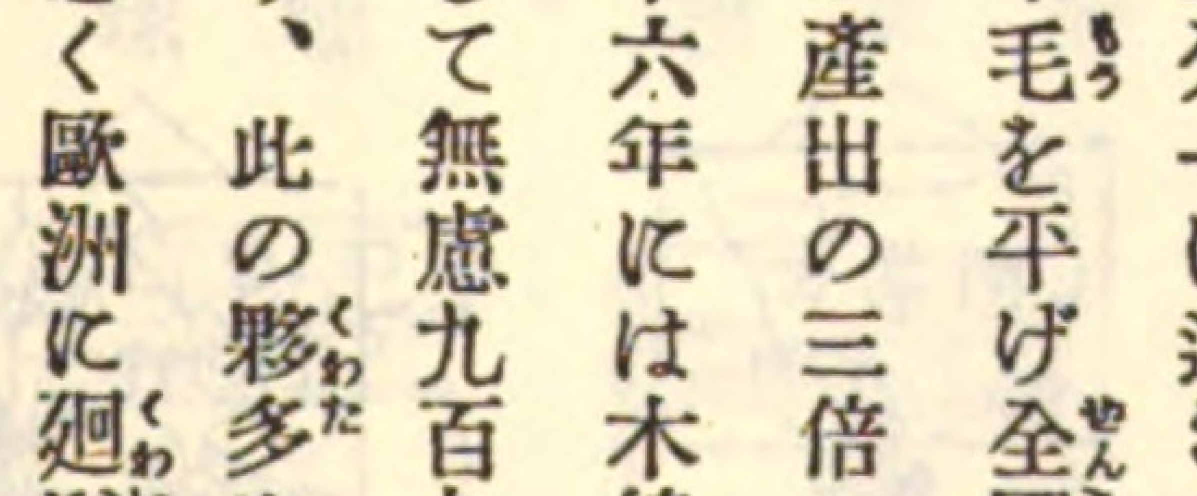


増加するに至れり、其他單に學校附屬の圖書館のみにても一千二百萬巻を藏めたれば全歐洲諸國の圖書館を合併したるものにも遙に勝れり。

◎新聞雜誌　全世界の新聞雜誌の數は四萬一千種なるが合衆國のみにて、此の多數の半部即ち一萬九千八百五十五種を占有す、然るに歐洲諸國に於ては日耳曼五千種、佛蘭西四千一百種、英吉利四千種等の少數に止る、米國より毎年出版さるゝ新聞雜誌の數は實に三十億に上るといふ、ニウ、ヨーク政府の機關紙のみにても、部數に於て、赤道以南の諸國に凌駕せるものを日々發刊す、故に合衆國の出版の書物を一直線に並ぶる時は地球を廻るの帶となり新聞及雜誌を積み上ぐれば頭上に聳る山岳となり、又之に用ゆるインキは河流となり鉛字は以て橋梁となる、されば合衆國人民の如く書物の供給に豐富なるもの決して他邦には見ること難し。



◎世界の木綿　全世界木綿の產額五分の四は合衆國一手にて之を耕耘す、現時合衆國に於て既に開懇せられたる地は僅に總面積の三分一に過ぎざれば、農業者の力に依て不毛を平げ全國皆な穰地となる曉は、其の產出の三倍の巨額とならん、千八百九十六年には木綿の收穫未曾有の盛況を呈して無慮九百九十萬一千包の巨額に達せり、此の夥多なる木綿の三分の二以上は悉く歐洲に廻送せられて、無數の紡績業者を養ふ。



◎寺院　乾燥無味なる統計表といへども、之に依つて蓋し驚くべきもの多く存すべし、一千八百九十年の統計表に從へば、寺院の總數十四萬二千五百二十一にし

て、これが院友たるもの二千六十三萬八百六人の多數即ち全人口の三分一を占む、而して寺院の幅員を測れば全人口の三分二を容るゝに足れり、祭禮祝日の節は老若男女手を携へて皆一齊に寺院に詣り、廻廊棧敷の差別無く椅子を列ねて群集するも、決して雜遝擾亂等を起すことなし。

◎日曜學校　日曜學校の生徒は世界を通じて二千〇二百六十八萬九百三十二人を有するが、合衆國は唯だ獨にて其の半部即ち九百七十一萬八千四百三十二人を保てり、然るに英國は六百九十七萬九千九百十三人の生徒を有するに過ぎずして米國の次位に坐す、若し米國の日曜學校生徒をして悉く一處に並べて、四列に作り列と列との間を一尺五寸づゝ開きて、一哩の距離を進行せしめば、全隊總てが目標地に達する迄に、百十五時間即ち二晝夜十九時間を費すべし。

時報一束

◎女子大學の位地　女子大學の設立首唱者成瀨仁藏氏は大坂ホテルにて演說せる要に曰く、或る論者はいふ設令今日女子大學設立の必要ありとするも、今日之を大阪に創設するの必要を認むる能はず、何となれば大阪の教育は未だ充分普及發達せざるのみならず、大阪の境遇は教育に有害なりと、是れ亦一應道理ある議論なりとす、吾人は元來關東に一校、關西に一校、九州に一校、都合三校の女子大學を設立して、之を日本女子教育の三大中心點とし、以て其上進改善、及普及を謀らんと欲するの素志を懷くものなるが、之を創設するの順序は通常の塲合より之を云はば、先づ東京より着手し、順次關西九州に及ぼすべきを以て當を得たるものなりと信ず、然るに日本の教育は殆ど東京に吸集さるゝの觀あり、是れ日本教化の爲めに決して賀すべきの慶事にあらざるなり、敎化の中心は成るべく之を地

方に分配せざるべからず、而して關西に於て京都の如きは既に京都大學の設立せらるゝあるも、關西の小惱若くは大惱の地位を占めたる我大阪に於ては、商工の發達頗る神速にして、其の機關も近時大に整頓せしと雖も、尙ほ一の敎育中心點あるなし、一の敎化中心點あるなし、是れ實に我大阪の風俗が實利に偏し、人情が浮薄なりとの惡評を招く所以に非ずや、夫れ然り、敎育機關の發達、三府の中最も進歩し居らざるを以て却て女子大學を設立し、關西に於る敎化の中心點を造り、以て風俗人情を改善するの必要を認む、勿論一方より之を論ずれば、四圍の境遇善良なる所に學校を設立すべきは、敎育學者の定論なりと雖も、亦一方より云ば、學校は社會を敎育し、社會の腐敗を淸むるの力を有するものなれば、腐敗せる社會には却つて學校の必要を認るものなり、故に素より吾人必ずしも大阪の社會は腐敗せりとは謂はざれども、或論者の曰ふ如く大阪の社會が果して、一般の敎育機關を損傷するに有力なりとせんか、却て益大阪に女子大學設立の必要を感ぜずんばあらざるなり、且つ社會遇境の善不善、良不良は到底比較的のことのみ、東京の社會境遇は善良なれども、大阪の社會は不善不良なりと云ふ者あるも是れ只五十歩百歩の差異のみ、東京の社會境遇必しも有効にして、大阪の社會は悉く有害なるもののみにあらざるなり、若し論者の說を嚴密に實行せんとせば、深山幽谷の地に學校を設けざれば、能はざるなり、是れ到底言ふべくして行ふべからざるの說なり、設令へ其の境遇に一害ありとするも、亦た一利なきにあらざるなり、夫れ今後の日本社會は桃源の神仙社會にあらずして多事多忙の活動社會なり、而して日本帝國中社會が最も活動し生命に充滿せる處は日本國中大阪を以て最とすべし、大阪は實に今後に於る日本社會の活動の本源にして又中心なり、然るに活動社會に生存せる

者は活動的ならざるべからず、而して其の活動的の人物は活動社會に於て之を養成せずんば得べからざるなり、彼の翠簾深く垂れ籠めたる裡に人となりたる柔弱なる女子は恰かも煖室中の草木と一般未だ鍛錬足らざれば活動的社會に於て何の貢獻する所も無くして終らんの恐あるべし、加之教育法其宜きを得なば却て弊風悪俗に感染せざるのみならず、其不良の境遇に對する反動の結果は大に健全なる良心を養ふを得べきは吾人の既に經驗する處なり云々◎女學校設立の建議　過般私立富山市教育會長より富山縣知事へ高等女學校の設立を建議す。◎家事專修科　女子高等師範學校にては去九月より家事專修科を置き家事衛生、家事經濟等の學科を講修せしむる由◎岡山孤兒院　孤兒六十名は先頃日向國高鍋に移住せしが、右は機織散髪精米其他の事業に從事せん筈にて精米塲には同地精糖會社跡を六百圓にて購入し又た岡山本院と移住隊間の交通運輸の便に供する爲め百二十石積の和船一艘を借り入れ米麥其他食品は一切岡山より廻送すと◎九州大學設計　文部當局者中九州大學を熊本に設立せんと兼て計畫しつゝありしが先頃同地方を巡視し歸京したる文部技師久留正道氏は專ら同大學新築上につき設計中なりと◎平安孤兒院　下京區堺通り四條上る八百屋町同院の新築工事は目下八分通り落成し先月中には略ぼ工事を終るべき見込故昨今堺町に於て養育中の孤兒二十六名は竣功次第同所へ移轉せしめ今月中旬頃に竣工式を行ひ漸次孤兒を募集する筈なりと去月迄の寄附金は六百九十五圓八十錢に達し倘山階宮晃親王殿下よりは「徳義」と記したる額面を下賜せられたりと◎京都大學　應用化學機械工學二科志願者六十餘名を得愈去月十一日より授業を開始す。◎歌合古儀の復古　醍醐天皇の寛平以來宮中に於ては御代々多少此の御儀式行はせられしが維新以來中絶せしが京都向陽會にては點取

互撰を復古し古儀の歌合を再興することとなり判者則武正副、尾崎宍夫、順川信行の三家順番にて去月十八日今出川御門内桂宮邸にて初めて行ふことなりしが當番判者は則武翁にて水邊秋來、夜松風の二題なりと◎那須原孤兒院曉星園の近況　園主本鄉定次郎氏令閨より我社に來れる來信に曰く「良人儀先日無據處要用にて岡山まで參る途中汽車中にて大に咯血致し爲めに靜岡にて滯在療養致居候次第にて種々取込居り御返事延引致候段御免し被下べく候本園は當時男子は農業を專ら勉め幸に麥二十俵餘馬鈴薯三十俵も收穫致候蜀黍の如きは毎日夥しく收穫食用致居候へ共何分諸相場高貴の際四十有餘の家族衣食萬端容易ならぬ困難にて良人も此際まで同情者の御賛助を受けて今日に立至り候事故是よりは城を枕に討死すべしと常に相語り申候商業部には呉服店も當時閑暇女子は凡て冬着洗濯裁縫に多忙を極め申居候一人の女子は當時暑中休暇にて函館女學校より歸園致居候良人も今日頃は歸園可致筈にて歸園の上は大改革を行ふ筈委細良人より申上候（下畧）

◎日本摸範教會　神道的基督教家として有名なる海老名禪正氏、今回佛教的基督教家として有名なる岩本善治氏と計り學生の淵藪たる本鄉臺に日本摸範教會なるものを設立し全くミツシヨンの手を離れて日本的基督教を宣傳すべしと云ふ、而して其の黑幕は同志社々長横井時雄氏、仙臺の押川方義氏も亦一臂の力を借すべしと聞く◎閑谷神社　備前國和氣郡閑谷神社は芳烈公を祭祀の處なるが祭祀以來二百年未だ修繕を加へたることなかりしに今度舊藩主池田侯爵より之を修繕することゝなり丸瓦平瓦を古形に模し其製造方を同郡伊部株式會社に注文したる由◎金谷家塾　同塾は地方女子の東都公私立學校に遊學するものゝ寄宿を許し朝夕其父兄に代りて監督し傍ら英漢數簿記學を教授するの目的を以て麹町區飯田町六町目廿三番地に設立せり

塾主は經濟學者故金谷昭氏の未亡人金谷錠子なりと。

交詢

◎第五十一問（肥前堀江君へ） 感冒の豫防法は其法二三にして止まらず候得共毎朝冷水に浸したる手拭にて全身を摩擦し皮膚を强からしむる時は容易に風邪に罹る患尠し、又平生餘り厚衣の習慣をつけ置く時は卒然寒氣に遇ひ忽ち感冒の災に罹ること注意すべき事なり

◎第五十二問（紀伊秀子君へ） 東京にて下女の奉行約束は大抵三ヶ月なるが故に別に出代りの期と申すべき期節なく、三ヶ月を一期とす、奉行口入は日本橋區芳町附近に尠からざれど、眞に見習の爲め奉行ならば東京にて中等以上にして清潔にして嚴格なる家庭に入り込むこそ得策ならめ

◎第五十三問（ＪＨ君へ） ランプの口金のはづれたるを接合するには素人には明礬を火に鎔かし乾かぬ内に急速に接合すべし

◎第五十四問（同君へ） 經濟學專門の學校は神田今川小路に東京專修學校あり、毎月講義錄も發行致候

◎第五十五問（大坂森川君へ） 本誌第八十五號に『妾の理想』の一文を草せし某女とは匿名にして本社も其姓名を知るに由なく候

◎第五十六問（神奈川すゑ子君へ） 「ランプ」の「ホヤ」のこはれたる時は「そくい」（米粒を押し潰して製したる糊）に白砂糖を混じたるものにて接合せば容易につがるなり

◎第五十七問（新潟鈴木君へ） 近來東京に流行する「ナプキン」半紙は麻の屑にて製したる由にて、始めは洋食の膝かけにしたるがそよりずつと薄く製しあれば普通の半紙代りに懐中紙として妙なり、二十枚一錢五厘

◎第五十八問（仙臺T H君へ）　疣をとるは大山參詣か富士參詣のみやげもの、一なるづゝだまとてたすきに製しある薏苡を細末になし之を疣に度々つけべし又黑子をとるには硝酸の無水のものを小楊枝のさきにつけて黑子の上に點すべし二三回にしてとるを得べしこの硝酸は劇藥にして皮膚にふれるときは黄色となるべし故に衣服等につかざる樣注意すべし

◎第五十九問（日本橋山本君へ）　大坂漬は大根と蕪とを等分に葉莖とも刻み込みて醤油樽なれば鹽五合を入れてよく揉み合はせ、强壓に漬ける十餘日を經なば出してざつと洗ひかたく絞りこぼして醤油かけて食す

◎第六十問（三岡君へ）　劇しく焮衝したるときは醫師の診斷を乞ふべしそれまで沃度丁幾を筆若はクサ楊子にて塗るべし併しこのものは暗赤褐色にして顏面に塗るを好まず然るときは次亞硫酸曹達とて結晶物あり非常に廉なるものなりこれを少量買ひ求め水にて溶解せりて之を二三滴加入すれば褪色すべしこれを塗擦すべし

◎第六十一問（麻布安田君へ）　わちやら漬とは細根大根の莖を殘して首尾を去り、ざつとゆでゝ味醂へ醤油を合はせ煮つめたるに漬け込む

◎第六十二問（日本橋呉服町生へ）　荒布を柔に煮るにはゆでる時炭酸曹達か酢を少し入るれば柔になるなり

◎第六十三問（岐阜橋本君へ）　雲丹は北海道より多く産出すれど北陸産のもの優れり、一品にて酒の肴などに妙なれど淸汁吸物につみ入れ、或は豆腐の田樂の味噌にすりまずるも面白し

◎第六十四問（近江柴田君へ）　知己朋友の死に接し其追悼の意を表するには、其贅澤なるは生花、造花をおくれど、大低は菓子、茶、蠟燭、線香、家により酒を贈くるもあり、香典として金員を贈くれば便利多かるべし、併し家によつてせざれば大きに失禮にあたるなり

（つゞく）

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）（明治三十年十月十五日發兌）

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍印行